

早稲田大学人間科学部

講義要項

SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, WASEDA UNIVERSITY

1996年度 早稲田大学大学暦

区 分			期 日		
入 学 式		学 部	1996年 4 月 1 日 (月)		
		大学院	4 月 2 日 (火)		
前 期	授業開始	学 部	4 月 2 日 (火)		十 六 週
		大学院	4 月 3 日 (水)		
	授 業 終 了		7 月19日 (金)		
	夏季休業	自	7 月22日 (月)		
		至	9 月15日 (日)		
後 期	授 業 開 始		9 月17日 (火)		十 七 週
	創 立 記 念 日		10月21日 (月)		
	冬季休業	自	12月18日 (水)		
		至	1997年 1 月 7 日 (火)		
	授 業 終 了		2 月 6 日 (木)		
	春季休業	自	2 月 7 日 (金)		
		至	3 月31日 (月)		
授 業 期 間			33 週		
学部卒業式，専門学校 卒業式および大学院学 位授与式			3 月25日 (火)		

目次

講義內容

一般教育科目	教養演習	1
	人文科学系	2
	社会科学系	4
	自然科学系	7
外国語科目	(随意科目)	10
基礎教育科目		12
専門教育科目 (各学科共通 必修)		15
専門教育科目 (各学科別 必修) 選択)	人間基礎科学科	17
	人間健康科学科	35
	スポーツ科学科	51
専門教育科目 (各学科共通 選択)		87
寄附講座	(随意科目)	95
情報科学研究教育センター設置科目(全学共通科目)		101
早稲田／オレゴン夏期プログラム		102
役付教職員一覧		107
クラス担任者一覧		108
住所一覧		110
建物・号館案内		119
構内案内図		121

科目一覧（五十音順）

ア	遺伝学及び実習	25
	運動・保健概論	36
	運動処方論	93
	運動心理学	89
	運動制御論	69
	運動生理学	52
	衛生学	69
	映像論	4
	栄養学Ⅰ	91
	栄養学Ⅱ	49
	音楽理論・実習	70
カ	化学	7
	家族社会学及び実習Ⅰ	30
	家族社会学及び実習Ⅱ	30
	環境心理学Ⅰ	45
	環境心理学Ⅱ	36
	環境論	12
	学校カウンセリング	49
	学校保健	70
	画像医学Ⅰ	92
	画像医学Ⅱ	93
	救急医学Ⅰ	92
	救急医学Ⅱ	92
	教育学	2
	教育心理学Ⅰ	88
	教育心理学Ⅱ	45
	教育法	6
	基礎演習Ⅰ	18
	基礎演習Ⅱ（動機づけ）	18
	基礎演習Ⅱ（生物の遺伝機構）	18
	基礎演習Ⅱ（家族研究）	19
	基礎演習Ⅱ（現代の都市論）	19

基礎演習 II (差別〔部落差別と天皇制を中心に〕)	19
基礎演習 II (家と村の基礎理論)	20
基礎演習 II (細胞生物学)	20
基礎演習 II (神経科学)	20
基礎演習 II (人口問題)	20
基礎演習 II (人間と自然)	20
基礎演習 II (神経薬理学)	21
基礎演習 II (実験計画とノンバーバル行動研究)	21
基礎演習 II (発達行動学)	21
基礎演習 II (セルフコントロール理論)	22
基礎演習 II (高齢者福祉)	22
基礎演習 II (芸術文化論)	22
基礎演習 II (身体心理学)	22
基礎演習 II (高次認知過程論)	23
基礎演習 II (生態系と環境問題)	23
基礎演習 II (社会人類学)	23
基礎演習 II (神経内分泌・神経行動)	23
基礎演習 II (神経生物学)	23
基礎演習 II (比較文明論)	24
基礎演習 II (細胞運動の機構)	24
基礎 数学	8
教養演習	1
経済学	4
健康演習 I	37
健康演習 II (祭りと文化)	37
健康演習 II (日本の民俗文化)	37
健康演習 II (高齢者を含む福祉援助)	37
健康演習 II (催眠を中心とした心理療法)	38
健康演習 II (健康とレクリエーション)	38
健康演習 II (社会開発論)	38
健康演習 II (人間工学)	39
健康演習 II (人間工学)	39
健康演習 II (環境心理学)	40
健康演習 II (臨床心理学・健康心理学)	40

健康演習Ⅱ（教育工学）	40
健康演習Ⅱ（行動療法）	40
健康演習Ⅱ（人間工学）	41
健康演習Ⅱ（環境心理学）	41
健康演習Ⅱ（環境－行動研究）	41
健康演習Ⅱ（発達と臨床）	41
健康演習Ⅱ（バイオエシックスの基礎理論と臨床の倫理）	42
言語・記号論	87
原書購読演習	85
現代都市・地域論（早稲田都市計画フォーラム寄附講座）	98
コーチング論	84
公衆衛生学	69
行 動 学	8
行動学概論	17
行動学研究法及び実習	28
行動検査法	47
行動療法Ⅰ	48
行動療法Ⅱ	48
コミュニケーション論	44
コミュニティ・スポーツ論	94
コミュニティ論	68
サ 細胞学・発生学及び実習	25
産業・職業社会学	43
社会意識論	43
社会運動論	43
社会開発論	44
社会学概論	17
社会学理論史	29
社会構造論	68
社会集団論Ⅰ	30
社会集団論Ⅱ	30
社会心理学	89
社会生命科学	17
社会調査Ⅰ	86

社会調査Ⅱ	86
社会調査法Ⅰ	44
社会調査法Ⅱ	44
社会病理学	32
社会福祉論Ⅰ	32
社会福祉論Ⅱ	32
社会変動論	5
宗 教 学	2
職場体育論	94
自然人類学	27
神経内分泌学及び実習	25
身体形態学	69
心理学概論	17
心理学研究法及び実習	28
心理学的測定法及び実習	28
心理検査法Ⅰ	46
心理検査法Ⅱ	47
心理療法Ⅰ	49
心理療法Ⅱ	49
上級英語Ⅰ	10
上級英語Ⅱ	10
上級独語Ⅰ	10
上級独語Ⅱ	10
上級仏語Ⅰ	10
上級仏語Ⅱ	11
ジェロントロジー（高砂殿寄附講座）	97
情 報 処 理	13
情報生理学及び実習	26
人格心理学	88
人 口 学 Ⅰ	33
人 口 学 Ⅱ	33
人 類 学	8
スポーツ医学Ⅰ	91
スポーツ医学Ⅱ	92

スポーツ科学概論	51
スポーツ行政論	68
スポーツ経営学	52
スポーツ工学Ⅰ	71
スポーツ工学Ⅱ	71
スポーツ史	84
スポーツ社会学	51
スポーツ心理学	52
スポーツ情報論	51
スポーツ文化論	52
スポーツ法学	68
スポーツ特論・実習（水泳）	80
スポーツ特論・実習（ウエイトリフティング）	80
スポーツ特論・実習（体操競技）	80
スポーツ特論・実習（陸上競技）	80
スポーツ特論・実習（柔道）	80
スポーツ特論・実習（剣道）	80
スポーツ特論・実習（レスリング）	81
スポーツ特論・実習（ボクシング）	81
スポーツ特論・実習（野球）	81
スポーツ特論・実習（ソフトボール）	81
スポーツ特論・実習（テニス）	81
スポーツ特論・実習（軟式テニス）	82
スポーツ特論・実習（卓球）	82
スポーツ特論・実習（バドミントン）	82
スポーツ特論・実習（バレーボール）	82
スポーツ特論・実習（バスケットボール）	82
スポーツ特論・実習（ラグビー）	83
スポーツ特論・実習（サッカー）	83
スポーツ特論・実習（スキー）	83
スポーツ特論・実習（スケート）	83
スポーツ方法論・実習Ⅰ（体操）	71
スポーツ方法論・実習Ⅰ（陸上）	72
スポーツ方法論・実習Ⅱ（陸上）	72

スポーツ方法論・実習Ⅰ（バレーボール）	72
スポーツ方法論・実習Ⅱ（バレーボール）	72
スポーツ方法論・実習Ⅰ（バスケットボール）A・B	73
スポーツ方法論・実習Ⅰ（バスケットボール）C	73
スポーツ方法論・実習Ⅱ（バスケットボール）	73
スポーツ方法論・実習Ⅰ（ラグビー）	73
スポーツ方法論・実習Ⅰ（サッカー）	74
スポーツ方法論・実習Ⅱ（サッカー）	74
スポーツ方法論・実習Ⅰ（柔道）	74
スポーツ方法論・実習Ⅱ（柔道）	74
スポーツ方法論・実習Ⅰ（剣道）	74
スポーツ方法論・実習Ⅱ（剣道）	75
スポーツ方法論・実習Ⅰ（ダンス）	75
スポーツ方法論・実習Ⅰ（ニュースポーツ）	75
スポーツ方法論・実習Ⅰ（筋力トレーニング）	76
スポーツ方法論・実習Ⅰ（器械運動）A	76
スポーツ方法論・実習Ⅰ（器械運動）B	77
スポーツ方法論・実習Ⅱ（器械運動）	77
スポーツ方法論・実習Ⅰ（水泳）	77
スポーツ方法論・実習Ⅰ（軟式テニス）	77
スポーツ方法論・実習Ⅰ（硬式テニス）	78
スポーツ方法論・実習Ⅰ（卓球）	78
スポーツ方法論・実習Ⅰ（バドミントン）	78
スポーツ方法論・実習Ⅰ（ソフトボール）	79
スポーツ方法論・実習Ⅰ（スキー）	79
スポーツ方法論・実習（スケート）	79
スポーツ方法論・実習Ⅰ（レスリング）	80
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ心理学）	54
スポーツ演習Ⅰ（精神生理学・心と身体のスポーツ科学）	54
スポーツ演習Ⅰ（身体運動の生理生化学）	54
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ人類学）	55
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ社会学）	55
スポーツ演習Ⅰ（衛生学）	55
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ工学）	56

スポーツ演習Ⅰ（スポーツ経営学）	56
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ法学）	56
スポーツ演習Ⅰ（バイオメカニクス）	57
スポーツ演習Ⅰ（栄養生理学）	57
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ運動学）	57
スポーツ演習Ⅰ（体力科学と運動処方）	57
スポーツ演習Ⅰ（体格・体力とトレーニング）	59
スポーツ演習Ⅰ（身体運動の生理科学）	59
スポーツ演習Ⅰ（武道文化論）	59
スポーツ演習Ⅰ（スポーツ方法学）	59
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ心理学）	60
スポーツ演習Ⅱ A・B（精神生理学・心と健康のスポーツ科学）	60
スポーツ演習Ⅱ A・B（身体運動の生理生化学）	60
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ人類学）	61
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ社会学）	61
スポーツ演習Ⅱ A・B（衛生学）	61
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ工学）	62
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ経営学）	62
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ法学）	62
スポーツ演習Ⅱ A・B（バイオメカニクス）	63
スポーツ演習Ⅱ A・B（栄養生理学）	63
スポーツ演習Ⅱ A・B（スポーツ運動学）	63
スポーツ演習Ⅱ A・B（体力科学と運動処方）	64
スポーツ演習Ⅱ A・B（体格・体力とトレーニング）	65
スポーツ演習Ⅱ A（身体運動の生理科学）	66
スポーツ演習Ⅱ A（武道文化論）	66
スポーツ演習Ⅱ A（スポーツ方法学）	66
生活構造論Ⅰ	43
生活構造論Ⅱ	43
精神医学Ⅰ	90
精神医学Ⅱ	90
精神衛生概論	90
精神身体医学Ⅰ	91
精神身体医学Ⅱ	36

	生態学及び実習	26
	生態系科学	7
	生物学概論	17
	生命科学論	8
	生理学	69
	生理心理学	27
	村落社会学及び実習Ⅰ	31
	村落社会学及び実習Ⅱ	31
	測定評価論	84
	測定評価演習	84
	組織心理学	46
	造形心理学	45
タ	体力トレーニング論	53
	ダンス概論	85
	地域福祉論	35
	哲学	2
	哲学的人間学Ⅰ	87
	哲学的人間学Ⅱ	87
	統計学概論	18
	東洋医学の人間科学（井深大寄附講座）	96
	特論Ⅰ	33
	特論Ⅱ	33
	特論Ⅲ	50
	特論Ⅳ	50
	都市社会学及び実習Ⅰ	31
	都市社会学及び実習Ⅱ	31
	動機づけ理論	29
ナ	日本文化史	5
	人間工学Ⅰ	89
	人間工学Ⅱ	50
	人間関係論Ⅰ	35
	人間関係論Ⅱ	36
	人間行動と環境（医）Ⅰ	46
	人間行動と環境（医）Ⅱ	46

人間の構造と機能	13
人間の諸問題	12
人間発達の行動学	16
人間発達の社会学	15
人間発達の心理学	15
人間発達のスポーツ科学	16
人間発達の生命科学	15
認知行動理論	28
認知発達理論	29
認知理論	88
脳神経科学	90
脳神経科学及び実習	26
ハ バイオエシックス	12
バイオメカニクス	53
比較行動学	27
比較文化論	49
比較文明論	3
非言語行動論	29
福祉援助論	35
物理学	7
武道概論	85
文化人類学	6
文学	3
分子神経生物学（ベックマン寄附講座）	96
分子生物学及び実習	25
法学	5
保健社会学	89
マ 民族文化論	87
ヤ 薬物作用学概論	27
薬理学及び実習	27
ヨーロッパ文化概論	6
余暇論	45
ラ リハビリテーション	70
臨床心理学	35

倫理学	3
レクシエーション論	37
ワ 早稲田／オレゴン夏期プログラム	102

一般教育科目

教養演習（必修）

教養演習は、大学における勉学への導入的役割を果すものと期待されており、演習参加者が勉学上の関心を主体的に充足する場であると同時に、クラスとして機能する、1年次に履習する3学科共通の科目である。

クラスは約30名編成20クラスで、3学科混成である。それぞれのクラスは入学手続後決定し、掲示する。

クラス	担当者	専門分野／専攻分野
1	井上宏子	生物学／神経生物学
2	矢野敬生	社会科学／文化人類学
3	吉村作治	考古学／エジプト考古学
4	根ヶ山光一	心理学／比較発達行動学
5	重原淳郎	文学／ドイツ文学，比較文学
6	宮崎清孝	心理学／認知心理学
7	柴田重信	薬理学／脳神経薬理
8	野嶋栄一郎	教育研究／教育工学，教育心理学
9	野呂影勇	人間工学（エルゴノミクス）
10	木村利人	バイオエシックス／基礎及び臨床バイオエシックス
11	菅野純	心理学／学校カウンセリング
12	齋藤美穂	心理学／環境心理学，色彩心理学
13	蔵持不三也	文化人類学／フランス民族学
14	太田章	スポーツ方法学／レスリング競技
15	竹中晃二	体育学／生涯スポーツ，スポーツ・セラピー
16	杉山千鶴	モダンダンス（現代舞踊）
17	葛西順一	体育学／スポーツ生理学，スポーツ方法学
18	土屋純	スポーツ運動学／スポーツ方法学
19	前田勝也	体育学／動作研究
20	志々田文明	体育学／武道史，武道論

(人 文 科 学 系)

教 育 学

林 幹 夫

人びとの教育への期待は教育の量的拡大と質的低下を併せて進行させ、教育の氾濫・混乱状況の中でさまざまな病理現象をもたらすにいたった。このときにこそあらためて教育の本質を問うことの必要性が痛感される。そして教育学は、だれもが経験するごく身近な事象である人間形成行為としての教育と、それに関わる諸条件を客観的＝科学的に解明し理論化しようとする学問として、われわれの日常と無縁のもの、実践行為からかけ離れたものであってはならない。

こうした認識から、前期には教育思想史上の主だった作品を手がかりに「教育とは何か」について、後期には現代教育の問題状況を解明すべく、学校教育の歴史を概観した上で、国家と教育、高等教育の大衆化と学歴の空洞化、脱学校論、生涯学習などを取り上げながら、「教育の社会的役割」について、受講者と共に考えてみようと思う。

〔テキスト〕

岩田朝一編著『教育学教程』（学苑社）、2,500円

〔参考文献〕

苅谷剛彦著『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書1249）、720円

宗 教 学

安 中 隆 徳

教団内部での伝統的な宗教理解が、神学（仏教では宗乗学）であった。これに対して宗教学は、諸宗教に関心を持ち、種々の文明の宗教性の構造と可能性を理解しようとする。近代・現代に至るにつれて、異なった文化・宗教を理解する重要性が意識されてきて、その新たなニーズが、宗教学という学問を生み出したのである。

確かに現代世界は、西欧近代の合理主義を、普遍的に導入している。しかしそれ故にこそ、諸文化の根底にある、宗教がはぐくんだ主体に関わる思惟（人間観・世界観）への理解が、いよいよ必要になってきているのではないだろうか。

人間の諸行動の根底にある宗教の営みに、われわれは宗教学によって照明を当ててみたい。そのとき諸宗教の理想主義だけを紹介するのではなく、各々の理想主義がもった近代的な変化、また盲点・墮落などにも、われわれは視線を行きとどかせたい。

哲 学

判 一 憲

現代という時代は先が見えない不確定な時代である。それだけに物事を深く広く根本の

ところから考える人間が求められている。東西の思想家たちが、彼らの生きた世界において、どういう問題にぶつかり、その問題にどう対処したかを思想の歴史を通して学びつつ、現代における人間の問題を考えてみたい。

参考書として次の二冊を挙げておく。

『哲学入門以前』川原栄峰著（南窓社）

『闘争の倫理』大西鐵之祐著（二玄社）

倫 理 学

大 崎 博

いかに生きるべきか？これは、古来から人間の変わらぬ問いであった。倫理をめぐるすべての問いは、ここに源を持っている。

しかし今日、倫理の問題を考えると、私達は気がつかないうちに、機械や無機物を考えるのと同じような態度を取っていないであろうか？自己とは無縁の客観的対象を扱うように、傍観者の態度を取っていないであろうか？倫理的な問いを問うことは、終局的には自らの生き方を問うことであり、他者との交わりを問うことである。必要なことは、考えるという行為が、直接自己の生き方へとはね返ってくるように問うことである。

講義の進め方としては、討論、発表も入れながら、前期に現代の倫理的諸問題を取り上げ、後期に倫理学の基礎概念と幾つかの代表的な学説を取り上げて、人間と倫理について考えていく。学生諸君の積極的、主体的な参加姿勢を期待する。

※第一回めの講義の際に資料を配布して、詳細について説明する。

文 学

菊 地 弘

日本近代の作品を素材として、人間の《生きる意志》とはどのようなものなのかを考察したい。本年は島崎藤村、國木田独歩、夏目漱石、志賀直哉、谷崎潤一郎、芥川龍之介、堀辰雄、梶井基次郎、太宰治などの作品を、ときに日記、書簡などもまじえてとりあげる。表現世界と現実との関係性、当代、後代の作品との関連などにもふれてみたい。テキスト（文庫本）はそのつど指示するのでかならず用意すること。なお、最初の授業で年間のスケジュールを話す。

比較文明論

吉 村 作 治

古代文明の中でもエジプト文明は特長のあるものとして知られている。ナイル川というたったひとつの水源を人々はいかに重要視したかは、ギリシアの歴史家ヘロドトスが、「エジプトはナイルの賜物」と言ったことでもわかる。そして古代社会の中で、自然の中から神を見出し、来世という概念を創り出し、人々の再生復活を信じそのために全ゆることを行った。そんな文明をになった人々の生活と考え方を検証していきたい。私自身すでに

26年間エジプトと関ってきて、いまだにその全てを解明できずにいる。そんな奥の深いエジプト文明をビデオを中心に地中海からヌビア砂漠まで遺跡を追いながら考えていくというのが当講座である。紀元前3000年から同30年までの約3000年の間にくりひろげられた文明を1年かけてじっくりと考えていく。尚同時に早稲田大学のエジプト調査についても諸君に知ってもらおうという趣旨に入っていることを付け加えておく。

映 像 論

奥 村 賢

20世紀は映像文化が大きく花開いた時代である。ことに現代では、いたるところに映像が氾濫し、それぬきには日常生活も成り立ちがたくなってきている。映像が人類にもたらしたものは何か？今日、原点にかえってもう一度、とらえかえしてみる必要がある。

今年度も、前年度に引き続き、「戦争と映画」の歴史を概観する。今回は第二次世界大戦期以降の両者の影響関係に焦点をあてながら、映像が内包する光と影、すなわち正負の力について考えていく。現代史を背景とした講義なので、受講するにあたっては、基本的な歴史知識が必要であることをあらかじめ認識しておいてもらいたい。

授業では、映像資料および参考文献を活用する。また、学生諸君が自由に意見を発表できる場も確保したい。

(社 会 科 学 系)

経 済 学

古 賀 勝次郎

経済のグローバル化ということが頻りにいわれている。日本は今やアメリカに次ぐ経済大国として、世界経済における責任ある行動が求められている。本講義では、グローバル化する世界経済の分析と、それへの日本の対応を中心テーマとしながら次の順序で講義をすすめる。

1. 経済学とは何か。
2. 経済学の成立と展開
3. 現代社会における経済の仕組み
4. 日本経済の現状と問題点
5. アメリカ経済と日米経済摩擦
6. EC（欧州共同体）の歴史と展望
7. アジア経済と日本
8. 旧社会主義圏および第三世界の経済改革
9. 国際金融、特に国際通貨制度

10. 世界の中の日本経済

《教科書》

○ McCall, B., The World of Economics (英潮社)

○ 拙著『二十一世紀の世界像』(日本教文社)

法 学 (憲法を含む)

世取山 洋 介

「法学」は、国家権力の発動（または非発動）に関する適切な規範の発見を目的とする学問である。「法学」を学ぶことの意義を、法律に関する知識は誰にでも必要であるという、その実用性に求めることもできるが、この講義では、体系的思考に基づいて問題を発見し、その問題に対して一定の価値判断を下す能力を身につけることにも、その意義を求めることにする。

前期では、「法」にかかわる基本的問題を取り扱い、①「権利」「法律問題」「判例」といった基本的概念、②現行法の基本的な仕組み、について検討する。後期では、「憲法」を取り扱い、①憲法の基本的観念、②日本国憲法の成立史、③国民主権と国家機構、④基本的人権とその保障、について検討する。[教科書]: 渡辺洋三『法律学への旅立ち』(岩波書店), 『デイリー六法, 平成8年版』(三省堂)

日 本 文 化 史

谷 川 章 雄

日本人にとって日本文化を知ることは自己を認識する上で不可欠な作業である。本年度は日本文化の諸相の中から「都市と村落」の問題とりあげる。具体的には、考古学・民俗学・歴史学などの多角的視点から、日本における都市と村落のあり方や心性及び両者のつながりを歴史的にたどってみることにする。

すなわち、日本的なる都市と村落とは何かという問題を考えることが本講義の目的である。

社 会 変 動 論

嵯峨座 晴 夫

社会変動とは、一般的にいつて、社会の活動水準あるいは社会構造が変化することを意味している。このような変化を対象として、その変動パターン、原因、帰結などについて、社会学を中心として関連諸科学においていろいろと研究が進められてきた。例えば、社会進化論、発展段階論、近代化論などがあげられる。ここでは、まず第一に、これらの社会変動の基礎理論について概説する。

第二に、現代の主要潮流の一つである近代化について、日本社会を例にとりながら具体的な考察を試みる。さらに、この近代化がいわゆる第三世界にも波及する可能性についても検討する。

第三に、望ましい社会変動を意図的に引きおこすことを目的とした社会計画あるいは社会開発の意義と問題点についても論述する。

テキストとして浜口・嵯峨座編『社会学講義』（早大出版部）、嵯峨座晴夫著『エイジングの人間学』（学文社）を使用する。

ヨーロッパ文化概論 《祝祭論》

蔵 持 不三也

祝祭とは、人間が社会生活を営む上で節目の時空を構成し、当該社会のもつ経済的・法的・倫理的・宗教的・審美的条件を包摂する「社会的事実」としてある。本講の目的は、そうした社会の自己表現としての祝祭の位相を、わが国やヨーロッパなどでの実地調査から具体的に紹介し、祭ることと生きることとの複合的かつ構造的な社会システムを解説するところにある。古典語はもとより、さまざまな言語が飛び交う授業ゆえ、外国語アレルギーのある諸君は、受講を避ける方が賢明。スライド・VTR使用。

教 育 法

世取山 洋 介

教育法学は1960年代から1970年代にかけて確立した新しいジャンルの法律学である。それは憲法、民法、刑法、行政法などの“六法”に対して“特殊法”として現在存在している。

この授業では、教育法を「教育制度に固有な法」と定義したうえで、教育制度に対してなしうる法の機能を、①教育の条件を整備する機能、②教育の自主性を擁護する機能、③教育活動を是正する機能、に三種別化し、それぞれの機能別に検討を加えることにしたい。

講義要項は概略次の通りである。

- 一 教育法の歴史・定義
- 二 教育法の機能的三種別
- 三 教育の自由法理の展開
- 四 校内教育裁判の成立とその行方

〔教科書〕：『教育小六法平成8年度版』（学陽書房）、兼子・神田編著『ホーンブック教育法』（北樹出版）

文化人類学

（前期） 谷 川 章 雄

（後期） 寒 川 恒 夫

文化人類学とは、世界の民族や文化を研究し、《異》社会を深層的・構造的に解説しようとする学問である。

本講義の前期には、主として日本の民俗文化をとり上げる。まず、日本の民俗文化研究の歴史と方法を概観する。次にいくつかの地域の民俗誌を比較しながら、日本の民俗文化

の多面性・重層性を明らかにしてゆきたい。

また、後期は最初に研究史をあつかう。つまり、文化人類学が展開してきた諸理論モデルを反省することで、この学問領域の広がりを確認する。次に、地域を東アジア・東南アジアに限定して、そこに展開する民族文化について論じる。

(自然科学系)

物理学

千葉明夫

前期では、力学の問題を中心に講義を行う。ニュートンは我々の身近にある運動と、大宇宙で起っている運動とが同じ簡単な基本法則にもとづいていることを看破し、運動の法則を発見した。我々の彼の運動の法則の確立のなかに近代科学的思考法の原点を見いだすことができる。講義では力学的エネルギーについても述べる。

後期では熱力学をあつかう。人類は原始の時代より火を熱源として食物を焼いたり煮たり、また体や水等を暖めるのに用いてきた。言い換えれば、古代より人類はいろいろな熱現象を利用して繁栄してきた。熱力学は熱現象を現象論的な立場で探究する科学で、物質内部のエネルギー状態の変化を知るには温度、熱、内部エネルギー、エントロピーなどの概念を確立する必要があった。熱力学に学ぶことにより、熱と温度の区別やエントロピーの概念が明確になり、熱力学の法則のもつ普遍性を知ることができる。

化学

(前期) 福田清成

(後期) 木邑隆保

人間と化学の関わり合いを中心に化学の基礎から話をする。前期は、大気と水と土とそして生物を含め、自然界における物質循環の原理に重点をおきながら、広い視野から、原子や分子やエネルギーなど化学の基礎概念をわかりやすく解説する。後期は、その応用として、合成宝石、ガラス、リサイクル・廃棄物問題など日常生活に関係ある化学を考える。

〔教科書〕 使用せず

生態系科学

森川靖

地球は、環境と生物が相互に作用し、一つの系をなしている。この系、すなわち生態系について、構造と機能の両面から基本的な問題を概説する。さらに地域生態系の特徴、生態系の発展と維持の機構について理解していく。後半は生態系と人間生存にかかわる諸問題のうち、食糧、資源、環境問題等を生態系の視点から順次述べ理解を深めたいと考えている。

基礎数学

関 達 也

整数、ベクトルなどを用いて、代数学の基本的な事項についての解説をします。

生命科学論

渡 辺 昭

科学的に人間を理解するためには、まず人間の生物学的な側面を理解しなければならない。このためには、生命科学を概観することが必要である。地球上に生息する生物は、少なくとも一千万の種に分れ、一見極めて多様であるが、意外にも、その基礎機構に、驚くべき共通性を示す。これらは、生命の特徴であり、生命現象を解く鍵である。この講義では、これらの、生命現象の基礎機構を、文系の人にも理解できる形で提示したい。プリントを配布し、参考書を示すが、教科書は指定しない。スライドを中心に解説する。次のような項目を含む。

- (1) 生命とは何か。科学とは何か。
- (2) 生命の歴史。発生からヒトの進化まで。
- (3) 細胞とは。発見。構造。機能。膜輸送。
- (4) 生命活動のエネルギー。代謝。
- (5) 細胞分裂（ビデオ使用）。
- (6) メンデルの法則。モルガンの遺伝子説。
- (7) ヒトの遺伝病。

行動学

春 木 豊

下等動物から人間までを「動物」、つまり「動くもの」という。このように行動は下等動物から人間までの全ての生命体のもつ共通の性質であり、特に複雑な内容をもつ人間にとっては、その底に流れていて、人間を支えているルーツの深い現象であるといえる。

日常生活で、人間は一時といえども行動していないことはないのであるが、ほとんど意識することなしに過している。行動学は人間の行動に焦点を当て、そこから人間の姿をながめてみようとするものである。

行動学はまだ定った体系をなしていないが、本講では、行動のうち体動（微細な行動）と行為に焦点をしぼり、その生態とメカニズムについて講ずる。

なお、この講義は、行動学であるが、その内容は人間科学を考えるためのものであるように進めてゆく。

人類学（自然）

保 志 宏

ヒトが生物の一種であることは今日疑う者もないが、他方で、ヒトにはヒト独特の特徴もあるはずである。その特徴は、解剖学、生理学、生化学、遺伝学、生態学など、多くの

角度から解明されてきた。人類学は、これらのヒト独特の特徴が、どのような進化の過程を経て獲得されてきたのか、何故このような特徴を持つに至ったのか、を明らかにしようとする。

前期は化石骨を手掛りとする進化過程の探究を主に紹介することとし、後期は遺伝学・生態学について述べたいと思っている。

受講者は下記の教科書を購入し、毎回教室へ持参すること。

〔教科書〕：ルーウィン『人類の起源と進化』（てらぺいあ）3,400円

外国語科目

上級英語 I (Advanced English I)

Robert Gray

The purpose of this class is to develop the language skills which are tested by objective tests of English such as the TOEIC and TOEFL tests.

Class work is based on exercises to improve these skills, especially listening comprehension skills. Practice tests will be given regularly.

Although not primarily a conversation class, conversation will be included as a component of the course.

Text : To be announced

上級英語 II (Advanced English II)

Stephen Martin

This course is an interactive English conversation class for advanced speakers. Topical issues and current affairs are the starting point for information and opinion exchange. In addition, supplementary topics from published articles and books will be presented and discussed. Class preparation will require extensive reading. Assessment is based on communicative participation in class, tasks assigned by the instructor, and attendance.

Text : To be announced

上級独語 I

重原 淳郎

本年は下記の中級教材を使います。読解中心の授業になりますが、聞き取り練習も行います。大谷弘道『ドイツ語読みかた教室——中級表現練習読本』(三修社)

上級独語 II

神崎 巖

テキスト読解を主とします。テキストは参加者の希望によってきめます。

上級仏語 I

堀田 郷弘

仏語 I と II の単位習得者あるいはそれと同等の知識を備えた者を対象にした上級仏語の講義です。本年度より上級仏語が2コマ (I, II) となりましたので、フランス人担当の上級仏語 II と講義内容を分担して、私の担当する「上級仏語 I」は、現代フランス語の読解力を高める訓練を主として、フランス語による自己表現 (書きことばとして) の訓練な

どをおこないます。小人数クラスですから、受講の学生それぞれがめざすフランス語習得の目的に応じた指導ができればと考えています。

上級仏語 II

フィリップ・ヴァネ

Selon le nombre des étudiants et ce qu'ils veulent faire, le cours peut prendre différentes formes. Voici mes propositions :

Dans la première partie de l'année, présentation d'exercices et de jeux qui permettent aux étudiants de s'exprimer, Par exemple : devinettes, mots croisés géants, discussions sur des photos, bandes dessinées, etc. Puis, peu à peu, introduction d'exercices plus complexes : petits exposés, débats pour ou contre, jeux de rôles.

Cours en français.

基礎教育科目

人間の諸問題（総合講座）

濱 口 晴 彦他

人間は何かという問いかけは、古今たえることなく問われつづけられてきた問いであり、この問いかけに最終的に答えることのできたものはない。しかし、人間は永遠にとらえどころのない謎そのものなのだろうか。謎の多い存在ではあるが、謎そのものではないと思う。

人間の諸問題は生と死、男と女、人間と環境、心と体など、人間をめぐるさまざまな問題をふくんでいるけれども、これらは人間とは何かという大状況の人間ではなく、人間のあり様を時間と空間という2つの軸の中に人間をおいて、もっと身近にひきよせ、多角的に考察する手がかりを与えている。今年度は人間の「生と死」という、人間の発端と終点をつなぐ過程をふくめ総合的にアプローチする。今年度のテーマの詳しい内容は講義登録の際提示する。

環 境 論（自然・人間）（総合講座）

（前期）森 川 靖

（後期）佐 古 順 彦

人間と環境のかかわりあいを総合的に考えていき、人間にとっての環境のあり方を再考し、問題意識をもってもらうことを意図している。そのため人間をとりまく自然環境と人間活動による環境の変化とその影響に関する諸問題（自然災害も含む）、人工的・社会的環境と人間の行動といった諸問題を取りあげる。そして現在あるいは近い将来人間の生存にかかわる諸問題を共に考えていきたい。5～6名の教員が分担しておこなう予定である。

バイオエシックス

青 木 清

木 村 利 人

小 室 輝 昌

池 岡 義 孝

近年生命への関心が高まっている。それは①自然科学の方向転換により自然科学の最前線が生命の探究に向っていること。②生命に関する解明が進むのと並行して生命の操作の技術化が急展開していること。これらについて、生命科学の立場から述べる。（青木）

現代の生物・医科学技術の急激な進歩と発展に対応して展開されてきた「バイオエシックス」の基本原理とその体系を、基本的人権及び公共政策の形成に焦点を合わせつつ講義する。（木村）

バイオエシックスの問題は何故起こってきたのか、ヒトの生命の誕生、存続、死の局面における特殊性について、自然界に見られる生物学的法則の検証から考察する。(小室)

生と死をめぐる問題を、日本の文化的伝統や社会構造をふまえながら、うまれる(生殖・出産)、みとる(死別体験)、おくる(葬送)、ほうむる(墓・埋葬)、いやす(喪)、のこす(遺書)などの角度から考えてみたい。(池岡)

情 報 処 理 (コンピュータ基礎・実習)

A. 太 田 章 B. 店 田 廣 文
C. 白 井 恒 夫 D. 岡 田 純 一
E. 齋 藤 美 穂 F. 宮 崎 清 孝

道具としてのコンピュータの使い方を実習をまじえて体得する。前期は主にネットワークによる情報の交換、後期は応用ソフトを用いたデータの処理について学ぶ。使用機種はパワーマック7100。

授業内容は以下の通り。

1. コンピュータ入門
2. タイプ練習
3. 日本語入力
4. ネットワーク入門
5. 図書館情報検索システム (WINE)
6. システム概説
7. ワープロ
8. 表計算
9. グラフィック
10. 統合ソフトの使い方

人間の構造と機能

(前期) 野 呂 影 勇

(後期) 木 村 一 郎

基礎、健康、スポーツの各学科の学生として、人間の構造と機能について必要な基本的知識を学ぶ。前期においては、臓器レベルまでである。人間と外界の関係の基礎的知識としての観点から、構造と機能について学ぶ。以下の様な項目について講義が行われる。人体の構成の要素・感覚・中枢神経系、骨格・筋(疾患との関係を含む)筋的負荷と呼吸循環機能・精神的負荷の自律神経機能、毎回配布資料を基にして講義が行われる。(野呂)

ヒトでみられる様々な生理現象について、分子から個体に至るいろいろなレベルでの構造的理解をもとに、それらのメカニズムについて概論する。主として分子～組織レベルの

内容の講義を予定している。人間の構造と機能について総合的に理解するため、および生物としてのヒトを理解するために必要な生物学の基礎的な学習を目的としている。(木村)
〔テキスト〕：別途通知する。

〔参考書〕：『細胞の分子生物学』(B. Alberts 他著，中村・松原監訳，教育社)

『人体生理学 (第2版)』(A. C. Guyton 著，内藺・入来監訳，広川書店)

専門教育科目 (各学科共通 必修)

人間発達の心理学

青 柳 肇

人間の出発点は受精の瞬間からである。受精から胎外に出て、死ぬまでのおよそ80年間は人間の一生といえる。この間ヒトは、様々に変化していく。時間の経過にともなう行動の変化を扱うのが発達の心理学である。行動の変化に影響を及ぼすのは、成熟などの生理的要因、親から受け継いだ遺伝的要因などがあげられるが、ここでは環境的要因との関係に焦点をあてる。そのうち特に人間関係たとえば母子、父子、きょうだい、友人、教師、職場の人間関係とのかかわりで発達を述べる。

人間発達の社会学

濱 口 晴 彦

人間発達の社会学的理解を旨として、大衆長寿時代における生活者の多様な表現形を素材に展開する。

④『生きがいさがし』（ミネルヴァ書房）をテキストにして、⑩『社会学講義』（早大出版部）をサブテキストに使用する。④によりたとえば、

1. 大衆長寿時代とは何か
2. エイジング
3. 白い手のジレンマ
4. 生活の質
5. 生きがい
6. 生と死
7. 習慣の束

のように、生きがいの表現形を提示し、⑩により、このことの社会学的理解に必要なコンセプトを提示する。

人間発達の生命科学

木 村 一 郎

ヒトの一生における生殖、発生、成長、成熟、老化、死などの問題の理解の一助となる内容の講義にしたい。具体的には、広義の動物発生生物学を基礎とし、組織や器官の形態形成などを扱いながら生命秩序の構築の基礎となる細胞の動態について、考えてみたい。

また、最近の生物工学や生殖医療等の発展の中で発生生物学も大きくその研究方法において変貌を遂げつつあるが、発生工学ともいべき分野の研究手法やその成果についても解説し、バイオ時代の基礎生物学の理解、あるいは生命倫理を考えるための生命科学的基

礎知識の提供，ということも意図してみたい。

人間発達のスポーツ科学

永 田 晟

人間の発育発達を生涯の生理的成長や加齢現象として捉え，それにスポーツがいかに働きかけ，いかなる影響をもつのかを講義する。そのためには，人間発達の態様とパターンを統計的に分析し，加齢と人間機能の関係を明確にしていく必要がある。さらにスポーツを科学的に分析した結果を詳述し，人間とスポーツの相互関連を人間発達上から考察していく。そしてスポーツの効果を客観量として提示し，人間発達上に占めるスポーツの意義を明確にすると同時に生活の中に運動習慣を確立する。また人間発達におけるスポーツの役割と位置づけを論証し，万人のためのスポーツ（Sports for All）とそのスポーツ権（Sports Right）の重要性を示していく。今日，高齢者社会におけるスポーツの役割は大切で，その効果とスポーツ実施は生活と福祉に役立ち，生活の質（QOL）向上に役立っている。

これらの内容を主に生理学，心理学，解剖学，社会学，物理学，人類学，老人病理学の広い立場で詳講し，The biology of aging and sportsを中心に“Human Gerontology”の意義を示す予定である。

〔教科書〕：『スポーツ・運動による60歳からの健康・体力づくり』（日本加除出版）

人間発達の行動学

根ヶ山 光 一

行動は，身体器官と同様に生物の適応の「道具」である。生物は行動を介して物理・社会的環境と身体的にかかわりを持ち，そうすることによって生きている。その行動のパターン・強度や対象などは，身体と同様，というよりもむしろ身体と相互にかかわり合いながら，成長につれ変化していくものであり，その変化がすなわち生物の発達である。行動発達とはまた，未熟な子が親の保護などにも助けられながら徐々に成熟し，やがて親となり子孫を残して没していくという意味では，繁殖過程の一断面でもある。本講では，このようにヒトの生存と適応に直結する行動の生涯発達を，胎児期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・壮年期・老年期にわたって概観する。わけても，親子関係・兄弟関係・友人関係・夫婦関係など，社会的行動と対人関係におけるヒトの成長に応じた変化について，「自立」と「依存」，「個」と「関係」のかかわりなどに注目しつつ，行動学的に論考する。

専門教育科目 (人間基礎科学科 必修)

生物学概論

生物系教員全員

人間は霊長類ヒト科の動物としての側面を持つ生物の一員であり、人間あるいは人間科学を正しく理解するためには、生物学的知識の把握が必要である。この科目では、生物学各分野の基本的事項について概説し、自然界における一生命体としてのヒトについて理解できるよう、生物系教員全員で講義を進める。

行動学概論

春 木 豊

行動は、人間の生命、精神、及び社会性ととともに、人間を考える上での重要な側面である。行動なしには、生命の維持、精神の実現、人間関係の活性化は生じ得ない。

行動学はまだ定まった体系をなしているわけではないが、本講では、特に行為の理論に焦点をあてて、行為のコントロールについて考察する。

心理学概論

青 柳 肇

心理学とはどんな学問かを概観する。心理学の歴史、研究方法、研究対象、などについて学んだ後、研究領域の内もっとも基礎的な領域である「知覚」「学習」について触れる。この領域は、いわば、人間一般の研究である。それとは別に個人差を扱う「人格」の領域についても触れる。

社会学概論

柿 崎 京 一

「飛驒白川村の家と村」をテーマとして、特に、いわゆる「大家族」の研究の事例をとりあげ、社会学的研究視点・方法等について考えてみたい。白川村の「大家族」研究の歴史は1900年当時から始まり、1960年代に及ぶ。この間に多くの論争がみられる。本講義では、これらの研究史の再検討を通じて問題の所在を明らかにし、実証研究を通じて、その特質の解明のプロセスを論証してみようとするものである。

社会生命科学

松 原 洋 子

生命科学は、生命現象および生命界の統一的理解を追究するとともに、その知と技術を通じて、人間の生存のありように強力に作用するという特徴を持っている。また、生命科学は、生物科学としての独自の世界を開示する一方で、既存の社会・経済・文化システムの産物でもある。授業では、こうした視点から、生命科学と社会の関係について多角的に検討する。

統計学概論

嵯峨座 晴 夫

全体は、統計調査論と統計解析論からなる。もちろん、統計データの解析手法の解説が中心であるが、講義の前段では、統計データの信頼性の問題について考察する。統計データの利用にあたっては、まずその作成段階における問題点を明らかにし、統計の評価を行うことが絶対に必要であるからである。講義は、序論、統計調査の方法、分布、代表値、関係の分析、時系列の分析、標本理論、推定、検定の順で行なう。

演 習 I

青柳 肇、飯野徹雄、池岡義孝、臼井恒夫、柿崎京一、木村一郎、小室輝昌
嵯峨座晴夫、柴田重信、宮崎清孝、鈴木晶夫、根ヶ山光一、根建金男、濱口晴彦、
春木 豊、森川 靖、山内兄人

「演習 I」は、人間理解の基礎となる生物学、心理行動学及び社会学の基本的実験及び調査の技術や思考方法の修得を目的としている。学生は3班に別れ、各学系につき7回、計21回の基礎的実習を行なう。詳細はオリエンテーションの際に説明する。

演 習 II (動機づけ)

青 柳 肇

動機づけ行動には、大別すると食を求めたり異性を求めたりするような生理的行動、課題を何とかやり遂げようという達成行動、他者と良い関係を持とうとするような対人行動の3種類があげられる。本演習では主として達成行動と対人行動について学ぶ。動機づけは常に行動と関係づける必要がある。しかし、動機が行動化する過程は複雑で、動機が行動化しないことも多い。従って最近では認知的な側面だけに焦点をあてた研究も増えてきている。こうした研究対象の違いにも留意しながら、動機づけ行動に関する重要な内外の文献を講読し研究方法を学ぶ。その後、それらをモデルにして小グループで実際に実験を行い卒業論文の予備的な研究になるようにしたい。従って、常に問題意識を持って学んでほしい。

演 習 II (生物の遺伝機構)

飯 野 徹 雄

先ず遺伝学の基本知識を集約して理解するために、テキストを受講生が章毎に分担して輪読方式で学習する。

次の段階では、遺伝学分野のトピックスの中から、各受講生が興味を持っているテーマを一つずつ選び、総説や文献を調査する。その結果を互いに発表し合い、全員で討論する。さらに各受講生が提出した調査結果の要約レポートを教材として、論文のまとめ方の基礎的心得を習得する。

また適時遺伝学の基礎的実験の実習や、デモンストレーションを挿入する。

本演習の受講生はあらかじめ、または少なくとも平行して「遺伝学」を履修していることが望ましい。

演習 II (家族研究)

池岡義孝

家族にかんする研究手法と研究成果についての文献を講読する。今年度はとくに家族史の研究に焦点をあてたい。

演習 II (現代の都市論)

臼井恒夫

従来、都市については人口と機能の集中、人口構成、近隣関係の稀薄化、土地利用の変化などさまざまな特徴があげられ、主に農村との対比という観点から論じられることが多かった。しかし、都市化の進展、都市の拡大と都市間の結びつきの強化などにより、近年では新たな視点からの都市論の構築が進められている。また、社会学、地理学、行政学、経済学など従来からの都市研究に加えて、文学、歴史学、文化人類学などの分野からも、都市研究が行われている。

本演習では、「現代の都市論」というテーマのもとで、さまざまな角度から現代都市の本質にアプローチしていきたい。前期は主として文献講読を行い、後期は各自の関心に応じて報告と討論を中心に進める。

演習 II (差別 (部落差別と天皇制を中心に))

神崎巖

なぜ私たちの日常に無用な「陛」(「階段」の意)が当用漢字に残されているのか。陛下とは、階段の下の方である。だれが階段の上にいる、だれが階段の下にひざまづくのか。生まれながらにだれが上、貴で、だれが下、賤なのか。天皇制は部落差別の対極にある。だが天皇制を否定、批判する声はこの国では思想操作と暴力によって抑圧される。

差別には、支配者のつくった諸制度、国家的規模の思想操作に源のあるもの、無知に基づく偏見によるものがある。それは民族、出身、性別、病気をふくむ心身障害、非異性間の愛、その他多くの対象に向けられ、教育や言い伝えによって世代をこえて伝播し心に植えつけられる。

前期では文献(例えば文学書では「破壊」)やビデオで部落差別と天皇制の歴史と実態を紹介する。後期からは、各人がそれぞれ考え見つけた問題を少しずつまとめ、短時間の発表をし、これを基に卒業論文につながるように議論を深めるとともに、この演習の中ではどんな些細なことに関しても既成の観念からはずれた思考が当然のものとなるようにしてゆきたい。

演 習 II (家と村の基礎理論)

柿 崎 京 一

日本人の基本的な価値観・行動様式、さらに日本社会の構造の理解においてキーワードとなる家と村について、その基礎理論を文献講読を通じて理解する。さらに、中国・韓国との比較考察を行い、それぞれの民族の特質を明らかにする。使用する文献・テキストは本授業のはじめに指示する。

演 習 II (細胞生物学)

木 村 一 郎

生命現象を理解する上で必須であり、現代の生命科学の基盤をなす細胞生物学の基礎の学習を、英文文献の購読と発表、質疑応答、教員による講義等を通じて総合的に行う。さらに、それらをもとにバイオテクノロジーを含む生命科学の現況等についても具体的研究例を通じて学習する。また、生命科学研究及びその発表などのあり方についても学ぶ。

テーマとしては、細胞生物学における研究方、免疫・細胞運動・ガン等の細胞生物学等を予定している。使用するテキストは特定せず、演習の経過をみながら提示する。

なお、本演習については分担発表等において受講生諸君にかなりの負担を強いることが予想されるので、自発的・積極的な学習を目指す人の受講を期待している。

演 習 II (神経科学)

小 室 輝 昌

神経系の機能を構造的基盤の上に理解できるよう、神経系の構成やシナプスの微細構造について英文参考図書、論文抄読を通して勉強する。

演 習 II (人口問題)

嵯峨座 晴 夫

人口変動が人々の社会生活との関連においてもたらす諸問題、つまり人口問題は今日の世界的関心事である。この人口問題は、食糧問題、雇用問題、人口増加問題など古くして新しいいわば伝統的問題から、新たに最近立ち現れてきた過密・過疎、人口の都市集中、高齢化、環境破壊、外国人労働力、難民、中絶、人口減少などの諸問題まで広い範囲にわたっている。演習の前半では、これらの諸問題の意味と関連づけを概観する。後半では、参加者各人がテーマを設定し、具体的な事例をとりあげて報告を行う。

演 習 II (人間と自然)

重 原 淳 郎

日本人の自然に対する関係は、近代化によって大きく変わりました。昔の日本人は自然に対して受動的でした。近代以前の日本文学では、自然の秩序をあるがままに受け入れる姿勢が目立ちます。これに対して現代人は能動的です。そしてこの能動的姿勢と近代科学が結び付いて現代の文明世界が成立しているわけです。能動的になった結果として日本人に失われたもの、あるいは失われつつあるものは、自然との対話関係です。和歌の伝統は

この対話関係の上に成立していました。この関係は現在は支配関係に変わっています。現代の自然破壊はその結果として発生した問題だと言えます。この自然に対する関係の変化がどのようにして起こったかを研究します。

演習 II (神経薬理学)

柴田 重信

神経薬理学は精神神経機能障害等、疾病の治療薬の開発のみならず、脳機能の理解に必要不可欠な方法論である。中枢神経系の解剖、生理、病理の学習が重要であり、このような学問の理解の上で、薬物の薬理学について学ぶことになる。生体の恒常性（ホメオスタシス）は睡眠・覚醒リズムなど生体リズムという大きな生理学的な変化の中で営まれている。そこでこのダイナミックスについて行動学的、神経薬理学的観点から学習する。この演習では総説、小テキスト、英文文献等を通じて、文献の読み方、実験計画等の理解に重点を置く。後期に入ると実験研究も行う。

演習 II (実験計画とノンバーバル行動研究)

鈴木 晶夫

<目標>

- ・実験のおもしろさ、実験計画の必要性を知る。
- ・ノンバーバル行動に関する研究の流れ、問題点を探り、実験・調査・観察を計画・実施する。

<方法>

前期には、浅井邦二監修『心理学実験計画入門』をテキストとして、各種実験の基礎にもなる実験計画について学習する。

後期には、ノンバーバル行動の基本的な文献を読み、研究を概観する。

(詳細は、別途配布の人間基礎科学科教員ガイド参照)

演習 II (発達行動学)

根ヶ山 光一

行動は個体の適応様式であり、さまざまな行動により生物が環境に適応する姿を通じて、生きるということの本質に近づくことができる。生きるということの中には「個」として生きるということと、その生が複数の個の「関係」のネットワークの中で支えられ実現されるという二重性があり（それは「自立」と「依存」の問題といってもよからう）、そのあり方は生活体の発達に応じて変化する。その問題を考える一つの重要な場面として、親子関係の発達の変容過程（とくに離乳）や子どもと空間（家屋と自立、事故など）に注目したい。それらについてここでは、行動発達研究の基礎に関する文献講読と行動観察の実体実験、ヒトと霊長類の親子関係や離乳など自立の行動発達に関する基礎的な文献の講読、実際の行動研究についての予備的な計画・実施、といった諸側面から学ぶ。

演 習 II (セルフコントロールの理論)

根 建 金 男

まずセルフコントロールについて概観を理解する。その際、行動的次元、生理的次元、認知的次元のセルフコントロールについて整理する。その後、このような概観を受けて、それぞれの次元のセルフコントロールの代表的な技法をとりあげ、その理論と実際を学ぶ。この授業では、講義、学生の発表、ビデオを通しての学習、技法や心理テストの実習などを行う。

演 習 II (高齢者福祉)

濱 口 晴 彦

「高齢者福祉——政策とその背景および実例の分析」を、つぎのような中分類のもとで演習を行うことを考えている。

- 1) 地域社会の事例研究——エリア・ケース、スタディ——いくつかの自治体のケース・スタディを考えている。
- 2) 社会福祉思想と理論の研究——社会福祉の考えや水準は、いっきに形成されたのではなく、社会運動や実践の中でつちかわれてきた。そういう思想と理論の形成史を考える。
- 3) 高齢者福祉における「生きがい」の問題——社会福祉は、科学の成果が日常生活へ総合的に応用され、活用されている領域である。エイジング（加齢）の側から理論と実際と体験をふまえて理解し、分析する力をつけるようにしたい。
- 4) 上記の課題をもとにしてレポート・論文の書き方の修得につとめる。

演 習 II (芸術文化論)

堀 田 郷 弘

*テーマ：人間にとって芸術はどのような意味をもつか。

*キーワード：芸術文化

演習の内容は、文学と美術を主とする芸術論にもとづいて、芸術とは何か、人間にとって芸術はどのような意味をもつか、を考える、いわば「芸術文化論」と言えるものです。

学生の選択については、希望する学生が卒論として考えているテーマが、演習内容にどのように関連しているかを、学生とよく検討した上で、受講の可否を決めたいと考えています。

演 習 II (身体心理学)

春 木 豊

身体の動きを操作することで、心理的な現象がどのように影響を受けるかといったテーマについて、文献を読む。

このような文献の購読を通して、文献のよみ方や実験計画の方法などについて学びたいと思っている。

演 習 II (高次認知過程論)

宮 崎 清 孝

具体的なテーマとして、イメージと想像力の問題を取り扱いたい。言語、理解といった高次認知過程の中でも、イメージ、さらにそれを駆使する想像力は現在最も研究が進んでいない問題である。しかし人間の日常的に心の働きの中では、たとえば科学・技術における創造的な発想の過程で、文学作品や映像作品の創造と理解の過程で、演劇の中で、また教育の中で、あるいは臨床心理学での患者理解でと、それはたくさんの場面でいろいろな形で使われている。その中で多くの実践者が実践知という形で想像力の本質について、またそれを育てる手法について多くの研究をおこなっている。それに対してその科学研究はまだ見るべきものが少ない。この現状をふまえ、ここでは、先人の実践を知る、自分たちで経験してみる、科学的な研究の対象としてみる、という3つのレベルで、この問題に取り組んでみたい。

演 習 II (生態系と環境問題)

森 川 靖

現在問題となっている小地域、大地域、地球的規模の環境問題を生態系の視点から議論する。また、環境変動に対する植物の応答を環境生理学的な視点から議論する。ときには野外に出て環境影響の実態を見つつ議論を進める。

演 習 II (社会人類学)

矢 野 敬 生

前期は主として、文化(社会)人類学に関する概論書(英文)の講読を通して、人類学的なもののみかた・考え方について学ぶ。

後期は、個別文化に関する民族誌(Ethnography)をとりあげ、緻密に読むことをつうじて、異なる文化の理解にせまりたい。本年度は、メラネシアのトロブリアンド島を事例としてとりあげる予定である。

演 習 II (神経内分泌・神経行動)

山 内 兄 人

人間など動物の構造と機能は生きるためのものと子供を残すためのものよりなる。子供を残す機能である生殖生理は、雌では卵子形成－性行動－排卵－妊娠－分娩－授乳－母性行動、雄では精子形成－性行動といった一連の生理現象よりなる。生殖は脳とホルモンの相互作用により調節されているが、演習では脳と生殖に関する基礎研究の論文を読み理解を深めてもらう。また、それらの機能に付随する、雌と雄の脳の違い、脳の右と左の違いなどにもふれたい。

演 習 II (神経生物学)

吉 岡 亨

神経生物学(ニューロバイオロジー)は現在最も進歩を遂げつつある研究分野である。

この進歩の原因の約半分は分子生物学の進歩に負っている。他の半分は測定技術の進歩である。今やニューロン内部のカルシウムイオンの濃度変化は視覚に訴えるイメージングという手法で生きたまま三次元的に測定することが可能である。この他に神経生物学独特な重要な概念として階層構造がある。これは神経系の本質が一ヶ一ヶのニューロンにある訳ではなく、その組み立て方にあることを示している。

本演習では分子→階層性というフレームワークに組み込まれた新しい概念の神経生物学を確実に理解することに重点を置く。

演習 II (比較文明論)

吉村 作治

人類の文化史は5千年を超える。地域も西アジア・地中海周辺からユーラシア・東アジアへと広がっている。これら独自に栄えたと思われる文明も実はそれぞれ相互に関連している。それぞれの文明を比較することにより文明の本質を知ることができると思われるので、地域、時代、項目などの比較検討を行う予定。

演習 II (細胞運動の機構)

渡辺 昭

動物の運動機構は、動物が外界に対して示す反応の基礎を形成する。ヒト及び大形動物の速い反応は、横紋筋の収縮によるものであり、その収縮機構は、古くから生理学での主要な問題としてとりあげられている。多くの発見もなされたが、最終の解決はなお将来に残されている。細胞運動という立場から見ると、横紋筋収縮は特に発達した一つの型にすぎない。そのほかに、平滑筋収縮・原形質流動・細胞質分裂・軸索輸送などの重要で興味深い問題があり、多くの発展が見られている。英文文献の輪読によりこれらの問題を考察する。

専門教育科目 (人間基礎科学科 選択)

細胞学・発生学及び実習

木村 一郎

臨海実験に合宿して講義及び実習を行なう。合宿は後期授業終了後、春季休業開始時に集中して行う。なお、所沢キャンパスにおいても若干の講義を行う。

海産動物の生きた細胞を用いての細胞学的及び発生生物学的な観察に主眼をおき、それに関連した講義を併せて行う。極めてダイナミックな姿を我々に見せてくれる生きた細胞・胚を観察することによって、通常の学習ではややもすると“死”物学となりがちな生物学を、名実ともに“生”物学として実感してもらうことを大きな目的としている。

具体的には、主としてウニ等の海産無脊椎動物を材料にして、配偶子細胞や受精の観察と実験、正常発生の観察、実験発生学的操作による観察、などを行う。

神経内分泌学及び実習

山内 兄人

脳とホルモンの相互機能を知るにはいろいろな手段が考えられるが、基本的なものとして形態的、行動的变化を調べる方法がある。この実習ではラットをもちいて脳と内分泌腺の顕微鏡標本を作成し、それらの構造を理解する。また、去勢をしたりホルモンの投与をしたりして、それらがどの様に変化するか調べ、神経内分泌学の基本的実験技術を学ぶ。さらに、脳の手術も習得してもらう予定でいる。講義は脳とホルモンの関係について行う。

分子生物学及び実習 (旧生物学・分子生物学及び実習)

吉岡 亨

生きている細胞は、呼吸・興奮・分泌・代謝など様々な生理機能を示すことが知られている。このような生理機能を分子のレベルで説明しようとするのがこの科目の目的である。講義と実習の二つのパートに分けて行う。前半で行う講義は、“Molecular Biology of the Cell”〔細胞の分子生物学〕第3版監修中村桂子、松原謙一、(1995年)〕を教科書として用いて行う。後半で行う実習は培養細胞や脳切片を用いて、(1)電気生理的測定、(2)生化学的測定、(3)発現遺伝子の解析をそれぞれ1～2回ずつ行う。この実習では、細胞の生理機能を遺伝子とタンパク質のレベルでコントロールすることを学習する。

遺伝学及び実習

飯野 徹雄

遺伝学発展の歴史に沿って、遺伝子概念の成立、遺伝的変質の機構、遺伝情報系の実体、遺伝子発現の制御機構等の基本的知識を講述する。

実習においては、遺伝学的分析法の基本である遺伝形質の検定法、遺伝子の導入法、形

質転換法など基礎技術を習得せしめる。

脳神経科学及び実習

小 室 輝 昌

生体の機能には必ずそれに対応する構造の裏付けがある。ここでは脳神経系を構成する細胞、組織の構造とその機能との関連を解説する。

実習：神経組織の各種観察法について、簡単な新鮮標本の作り方から組織化学、電子顕微鏡標本作製、写真の撮影等にわたって指導を行う。

情報生理学及び実習

渡 辺 昭

ヒトが生命を任うするためには、摂食・生殖などの諸行動をつつがなく行わなければならない。ヒトはこのために外界の状況を観察し適切な対応を行っている。そのために体内には電気的情報（神経インパルス）と物質的情報（ホルモン）の伝達経路がすき間なく配置されている。ここでは電気的・物質的情報の伝達の機構に焦点を絞って解説すると同時に、実習を通して、それらの現象を体験的に理解させ、ヒト体内の情報伝達システムを総合的に理解させる。

生態学及び実習

森 川 靖

環境という場合、ふつう人間の環境のことに限っているが、地球上にはおびただしい数の生物が生存し、それぞれの生物種は独自の環境下にある。対人間に限っていた眼を、生物一般に広げることによって、人間の環境の意味もまた、より深く理解されるようになる。環境といえまわりの事物をふつう考えるが、それとは別に生物自身が他の生物の環境の一部を構成するという観点も重要である。他種間と、種内のおのおのにおいて成立する、資源の取り合いとしての競争関係や、食う食われるの関係のように、生物の相互関係が自然の中で果している重要性は生態学の中でも特に重視される。他方、非生物的、物理的環境の重要性もやはり大きい。

環境は生態系の構造と機能に影響を与え、また生態系は環境に影響を与える。これらの関係のなかで、人間活動も大きな影響を持つようになった。ここでは主に、(1)森林生態系に及ぼす環境影響、人間活動の影響を実際の森林生態系の測定・観察を通じて評価する。また、(2)樹木の成長にとって重要な葉の光合成をつかさどるクロロフィルなどの測定も行う。(1)については、夏期休業中に3泊4日程度で集中して行う。場所は未定だが、関東周辺の山岳を予定している。(2)については、学期始めに実習のための講義及び説明を行う。各自で1～2週間隔（測定日、測定時間は学生にまかせる）の簡単な測定（1回でおよそ10分）を実施する。植物の種間差、種内差及び季節変化を考察する。

薬理学及び実習

柴田 重信

薬理学とは薬物の生体における作用機序を解明する学問であるが、ここでは特に高次脳機能——精神病、そううつ病、不安神経症、痴呆症——といった神経疾患に作用する薬物について解説する。実習では、マウス、ラット等小動物を用いて、種々の中枢神経作用薬や末梢神経作用薬の薬理作用を、行動薬理、生化学、電気生理学的に学習する。

比較行動学

青木 清

ヒトも含めた動物の行動発現と行動の特徴について、神経生理学的方法による成果にもとづいて述べる。①本能行動、②学習、③行動を制御する中枢神経系、④行動の発達と脳、⑤神経生理学に基づいた本能論などを述べる。これら課題については最近の研究成果にもとづいて述べるが、本論義の目的は人間の自然科学的理解を得ることにある。

自然人類学

乗越 皓司

本講義は、自然人類学の一領域である霊長類学の立場から、人間の社会や行動の起源を、次の3項目について考察する。まず、人間の家族社会を考えるため、ニホンザルや類人猿などの霊長類の生態および社会構造について述べる。次に、人類進化に重要な役割をはたした道具行動の問題を下等動物やチンパンジーなどから述べ、人類進化の特徴を考える。最後に、動物と比較して人間の特質である言語に関連して、動物のコミュニケーションと類人猿の“言語”実験について述べる。なお授業では、アフリカや東南アジアでの動物調査の経験を加えるとともに、動物行動の理解を助けるために16ミリやビデオなどの映像もできるだけ利用したい。

薬物作用学概論

柴田 重信

薬物は疾病の治療のみならず予防的側面からも広く使用されている。このような薬物は身体に入り、生体との相互作用の結果として薬の効果を発揮する。本講義では、薬物の主作用ならびに毒(副)作用の発現機序について、また、自律神経作用薬や向精神薬などの薬理作用について解説する。

薬物は健康増進のため、さらにスポーツ医学の領域で広く繁用され、ドーピング問題も提起している。そこでこれらの薬物もその作用発現メカニズムの面からの解説を行なうつもりである。近年社会問題化している、コカイン、大麻、覚醒剤等の乱用性薬物さらにニコチン中毒、アルコール依存症等の薬物作用学についても述べたい。

生理心理学

宮下 彰夫

生理心理学は、近年脳の科学として注目されている神経科学と心理学との接点であり、

心と体の関係を追求することがその命題である。その内容は、心理的現象に伴う生理的活動をとらえ、逆に生理的状态が心理・行動にどう影響するかを研究する。また、行動の神経生理的過程を解明することも含まれる。本講義の目的は、この分野に興味と理解を持ってもらい、学生各自のめざす学問分野（生物、心理、社会）からの視点で、心と体の関係、心の生理的メカニズムを考えてもらうことである。授業は教科書は使わず資料を配布して、なるべく具体的な研究例を紹介しながらすすめていく、生理心理学の理解に必要な神経生理学的な知識については随時説明を加え、神経生理学の知識が無くても理解できるように講義を進める。成績評価は、筆記試験にて行う予定である。

認知行動理論（本年度休講）

根 建 金 男

行動学研究法及び実習

春 木 豊

鈴 木 晶 夫

心理学研究法及び実習の項を参照のこと。

心理学研究法及び実習

青 柳 肇

宮 崎 清 孝

心理学的測定法は、心理学研究及び行動学研究に従事する者にとって事象の特性を数量化するのに不可欠な条件である。故に、すべての学生諸君に基本を修得して欲しい方法である。その知識を実際に生かし、心理学研究、行動学研究それぞれの実験実習を通じて、心理的、行動的側面の測定はいかなるものかを体験してもらう。実験後はレポート提出を義務付ける。実験学習での1回の欠席は、自他ともに多大な影響を及ぼすので、各自の自覚を望む。なお、6種の実習の内容は同じである。履修の際にはどれか一つを選択することになる。ただし前期・後期の割り振りについては前年度中に学科で調査を行ない、結果を履修登録以前に学科室前に掲示する。前期に割り振られた者は前期の科目名で、後期の者は後期の科目名で登録すること。また実習なので履修可能者数に上限がある。希望者全員が履修できないこともある。

心理学的測定法及び実習

根ヶ山 光 一

心理学的測定法は、心理学研究及び行動学研究に従事する者にとって事象の特性を数量化するのに不可欠な条件である。故に、すべての学生諸君に基本を修得して欲しい方法である。その知識を実際に生かし、心理学研究、行動学研究それぞれの実験実習を通じて、心理的、行動学側面の測定はいかなるものかを体験してもらう。実験後はレポート提出を義務づける。実験実習での1回の欠席は、自他ともに多大な影響を及ぼすので、各自の自覚を望む。なお、6種の実習の内容は同じである。履修の際にはどれか一つを選択するこ

とになる。ただし前期・後期の割り振りについては前年度中に学科で調査を行ない、結果を履修登録以前に学科室前に掲示する。前期に割り振られた者は前期の科目名で、後期の者は後期の科目名で登録すること。また実習なので履修可能者数に上限がある。希望者全員が履修できないこともある。

非言語行動論

鈴木 晶 夫

非言語的情報伝達手段として代表的チャネルに、表情表出、視線行動、身振り（ジェスチャー）、空間行動などがあげられる。これまでの研究から導き出された事実を中心に講義し、非言語行動を通じて、動物や人間がどのようにして他者とコミュニケーションを形成し、維持し、発展させているのかについて考えたい。

認知発達理論

宮 崎 清 孝

この授業では人間の知の働きについて、認知心理学的な観点から考えていく。認知心理学は心理学の諸分野の中でも現在最もホットな領域であり、基本的な考え方についてもいろいろな立場があるが、この授業は「生態学的」といわれる立場に立つ。普通知の働きというと学校での勉強に代表されるような言葉となった知識を学ぶことが連想されるが、ここではそれをもっと広く、人間の心のすべての領域で働くものと考え。なんらかの“意味”を生み出す心の働きのすべてで知が関わっているとこの立場では考える。また、言語は人間の知にとって重要なメディアではあるが、この立場ではその背後にそれを支えるものとして身体とその活動があると考え。このような立場から、人間が世界、自分、他者を理解する活動について、そこでの知覚、記憶、想像といった働きについて、日常でのそのいろいろな現れとそれについての科学研究を関連づけながら考えていく。

動機づけ理論

青 柳 肇

動機づけは、心理学研究のなかでも基礎的領域の一つである。何故そのような行動をとるのか、何故そのように考えるのか、といった「何故」の問題を扱うのが動機づけの研究領域だといってよい。ここでは、動機づけの考え方の古典的なものから現代のものまで、歴史的変遷を踏まえて述べていく。

社会学理論史

麦 倉 哲

社会と人間の関係を説明する枠組みを定式化したものが社会学理論である。近代の成立過程から現代にいたるまで、社会のさまざまなレベルで、数々の問題が発生してきた。こうした問題を解決するためには、その前提として当該社会を的確に把握する必要がある。近代化とともに発展してきた社会学は、その時代その時代の社会問題を解明するための取

り組みをなしてきたのである。

著明な社会学者の実践的関心を背景に見すえながら、こうした社会学の著明な先人たちが織りなし・展開してきた理論の歴史をたどることが本講義の主題である。

今年は、自殺の社会学研究史について、昨年よりも深めながら、折々に論じていきたい。

社会集団論 I

矢野 敬生

社会は単なる個人の集まりではなく、ひとは互いに関係をもちながら生きている。こうした営為をマクロな視座からとらえることを目的とする。そこで社会学の「集団論」のみならず、社会人類学の「社会組織論」の成果をふまえて講義をすすめる。基本的には、時間的歴史的展望を縦軸に、横軸には各レベルに対応した特徴的な社会組織（バンド社会・二元的社会・一般交換型社会・分節リネージ型社会等）に焦点をあて、現実の諸社会のもつ組織化の多様性をとおして、人間社会の諸相を明らかにしたい。特に、社会集団論 I においては、一般的理論を展望し、考察する。

社会集団論 II

矢野 敬生

社会集団論 I が基礎的作業とするならば、社会集団論 II は応用編にあたり、具体的事例に照らすことで豊富化していこうと考える。そこで本講義では、日本の村落社会（イエ・ムラ）を基軸として、東アジア（韓国・中国・沖縄）や東南アジアの村落社会（ジャワのデサや、フィリピンのバラングイ）を対比しながら進めていくつもりである。単に私自身が講ずるのではなく、学生諸君が文献を読み、発表し、討論をつみかさねる方式をとるつもりである。そこで社会集団論 II を履習する学生は、社会集団論 I をあらかじめ受講していることが望ましい。

家族社会学及び実習 I

池岡 義孝

面接調査を中心にした家族調査の実習を行なう。具体的な作業手順は以下のようである。1) 文献の検討によって基本的な考え方とデータ収集・データ分析の技法を学ぶ。2) 設定されたテーマにもとづく調査票を作成する。3) 予備調査の実施。4) 調査対象者の選定。5) 本調査の実施。6) 収集したデータの整理。なお、参加者には収集したデータにもとづくレポートが課せられる。

家族社会学及び実習 II

池岡 義孝

実験的手法による家族研究を行なう。人びとが日常生活の中で家族についてどのような見方をしているのか、心の内にある家族イメージを明らかにすることが研究の目的である。そのためにプロトコル分析の手法やエスノメソドロジーの方法を用いる。

村落社会学及び実習 I

柿崎 京一

人間の創造した生活基盤としての地域社会の中で、とくに農山漁村を含む村落社会を対象とし、生活者としての人間について実証的に理解することをねらいとする。

実習 I では、主として特定村落における調査実習を通して実証的研究の方法について学習する。とくに調査実習については、1)各自がそれぞれ研究テーマを選定し、テーマに即して作業仮説を設定、2)調査項目および調査票の作成、3)予備調査、4)本調査(合宿)を行ない、5)調査収集資料の整理・分析、6)報告書作成について指導する。

村落社会学及び実習 II

柿崎 京一

矢野 敬生

村落社会学及び実習 I で実施した調査実習のデータを基礎にして、日本村落社会の構造、さらに人々の生活について、社会学・民俗学・歴史人類学等の知見を動員して理解を深める。さらにアジア諸民族との比較考察を通じて村落生活の特質について明らかにする。なお、本科目を履修希望する学生は、実習 I を履修することが望ましい。

都市社会学及び実習 I

白井 恒夫

都市社会学にかぎらず、社会学のどのような分野においても実証的な研究をおこなうとすれば、その研究テーマに適した調査方法を用いることが必要となる。本講では、都市社会学的な実証研究のなかから代表的なものをいくつかとりあげて、都市社会学における研究の進め方、とくにそこで用いられてきたさまざまな調査と分析の手法について解説する。

ただしここでは、講義形式で終わることなく、とりあげた研究手法を参加者各自が例題をもとに実際に作業を進めながら追体験するという、実習の形式も併用したい。そして最終的には、各自の問題関心のなかから都市社会学に関連したテーマを設定し、そのテーマにそった研究計画の企画立案ができるような能力をつけてもらいたい。

都市社会学及び実習 II

白井 恒夫

本講は「都市社会学及び実習 I」の応用編として位置づけられる。すなわち、各自がその問題関心のなかから都市社会学に関連した研究テーマを設定して、そのテーマに適した研究手法を用いながら、研究論文を仕上げていく。

なお、本年度はこのクラス全体として特定の都市で調査を実施するという形式をとらず、参加者各自がその出身地の都市を対象として、調査研究を個別に進めていくことになる。

また、半期という授業期間の関係と応用編という性格から、できればこの授業を履修する学生は、すでに前期の「都市社会学及び実習 I」を履修していることが望ましい。

社会福祉論 I

児 玉 幹 夫

社会福祉は、「人間科学」という総合科学が、現実には活用される実践領域である。人間の生活は、身体的・精神的・社会的・文化的な諸側面が密接にからみ合って全体を成り立たせているので、問題の表面化している一側面だけを補修しても、生活全体は改善されない。近年提唱されている統合的ソーシャル・ワークは、心理学・社会学・人類学・生理学など関連諸科学を体系化し、人間生活をトータルにとらえる立場から、福祉の増進に寄与しようとする試みである。

社会福祉の制度と技術の発展と現状をあとづけながら、福祉の実践がヒューマニズムに支えられているように、福祉の研究がいかにヒューマン・サイエンスに基礎づけられているかを考えていきたい。

社会福祉論 II

麦 倉 哲

「福祉のまちづくり」について講義する。福祉のまちづくり対策は、「介護対策」とならんで、高齢者・障害者福祉の焦点となっている。すべての人は、生きがい追求のために、生活空間を移動する。この移動の権利を保障することが、障害者・高齢者の生活をノーマライズする不可欠な条件となっている。自宅、学校・職場、公共施設・商業施設、駅・鉄道、バス、歩道・道路、地域など、移動にまつわる生活の諸空間におけるまちの現状を、私が取り組んできた最新の調査により明らかにし、問題の原因を究明し、対策を提案する。この授業をきちんと受講した者には、「福祉のまちづくり調査士」の称号を私が勝手に授与する。フィールド志向のおおせいな学生の受講を期待している。

以上に加えて、昨年同様シリアスに福祉の現状に分け入ってみる。駅のホームで車イス使用者が転落死亡したのはなぜか。踏切で障害者が電車にひかれ、横断歩道で高齢者がひかれたのはなぜか。高齢者が歩道で転んで亡くなったのはなぜか。「福祉事故調査委員会」という枠組みを設定して究明したい。

社会病理学

白 井 恒 夫

社会病理学は、人間の行為、生活、社会集団に生じた障害を社会学的手法を用いて分析、検討し、その障害を取り除いて安定した社会生活を実現する方策を探究する。その意味で社会病理学は、社会学のなかでもっとも実践的志向の強い領域であるといえる。

本講では、社会病理学への理解をえるために、その形成と発展の歴史をそのときどきの社会的背景と照らしあわせながらあとづけていく。テキスト、参考文献については教場で指示する。

人 口 学 I

嵯峨座 晴 夫

人口学 (demography) は、主として、人間の集合体である人口に変動をもたらす要因である、出生、死亡、移動の分析と、人口と社会経済的変数との相互関係を解明することを目的としている。人口学 I では、体系化された人口分析の方法、および応用としての人口研究の諸理論を紹介する。

人 口 学 II

嵯峨座 晴 夫

ここでは、人口問題について講述する。人口問題とは、人口変動が自然、社会、経済などとの関連においてひき起こす諸問題のことである。それは大きく分けると、人口増加がもたらす諸問題と、人口の停滞ないし減少がもたらす諸問題がある。とくに、後者のうち、高齢化の問題が今日、世界的に顕著になってきているので、後半においては高齢化について社会老年学的な考察を加える。

人口学 II を選択する者は、人口学 I を習得していることが必要である。テキストとして、部分的に嵯峨座晴夫著『エイジングの人間科学』（学文社）を使用する。

特 論 I (現代免疫学)

加 茂 功

矢 倉 英 隆

山 元 弘

生体全体はバランスよく統御されており、病原体や異物の侵入に対しても恒常性を維持しようとする機構が作用する。これを生体防御と呼んでいる。その最も進化した機構が免疫と呼ばれるものである。免疫応答は自分と自分でないものを識別するプロセス、非自己と識別したものに対する免疫反応を増幅するための細胞や、分子を産出するプロセス、そして非自己と一度遭遇したリンパ球クローンを免疫記憶として温存し、次回には速かに応答できるようにするプロセスから成り立っている。

最近の学問の進歩はめざましくこのようなプロセス等を細胞、遺伝子、分子レベルでとられることが可能になり、病気の予防、治療の面への利用もはかられている。本講では、以上の点を論じていきたい。

特 論 II (エスノメソドロジーと会話分析の問題)

山 崎 敬 一

新しい社会理論の一つとして社会学ばかりではなく、言語学や認知科学の中でも注目されているエスノメソドロジー（会話分析）の立場から、人間の実際の相互行為と推論の過程を研究する。この講義では、エスノメソドロジーと会話分析についての理論的考察を行うだけでなく、具体的な相互行為場面（例えば、男女の会話、障害者と介助者の関係）を取り上げ、その具体的な場面においてどのような行為がなされ、どのような推論が可能に

なるのかを具体的に考えていく予定である。だが同時に、具体的な社会的場면을研究することが、より精緻な社会理論を要求することを実際の場面の分析の中で具体的に示していきたいと思う。

<テキスト>山崎敬一著『美貌の陥穽—セクシュアリティの 에스ノメソドロジー』(ハーベスト社)

専門教育科目 (人間健康科学科 必修)

福祉援助論

岡野 静二

欧米における社会福祉の発達と、その日本への影響について考える。またそれとは別に、わが国における福祉的行動の歴史的展開を調べる。そして日本の精神的風土の中で、なにが福祉援助を、基本的に支えるものなのかを探りたい。そこで次の項目にしたがって授業をすすめることにする。

- 1) 欧米における福祉援助とそれを支える社会
- 2) 日本における福祉援助とそれを支える思想と社会
- 3) 今後の課題

地域福祉論

岡野 静二

現代社会における地域福祉の重要性を、説明しつつ、福祉が地域社会形成の基本的条件であることを明らかにする。そこで次の項目の順序で、講義をすすめる。地位社会とボランティア活動。地域社会と小・中学生問題。地域社会と青年問題。地域社会と高齢者問題。以上の講義には、実践的な問題や課題を、多く提出することにする。結局、地域福祉の課題として、なにができるか、どこまでできるかを、じっくり考えることがねらいである。

臨床心理学

上里 一郎

ここでは、人間の行動の原理、行動異常のメカニズムとそのコントロールなどについて講義する。

具体的には、欲求・動機、防衛のメカニズム、正常と異常、エゴ・アイデンティティの形成と病理、心理とアセスメント、心理療法、精神分裂病、神経性食思不振、人格障害、恐慌障害、不登校などをとりあげる。

人間関係論 I

安藤 喜久雄

人間関係は、社会、組織、集団の構造、システムや文化、風土などによって規定される。それゆえ、日本における社会、組織、集団の構造的文化的特質をふまえながら、社会、組織、集団と個人との関係や日本人の意識などについて諸説を中心に分析、検討を行う予定である。

参考文献は授業中に指示する。

人間関係論 II

小 西 啓 史

本講義では、集団や組織内の人と人との関係について、主に社会心理学視点から論じる。

(1) 人間関係論の成立

「人間関係論」成立のきっかけとなったホーソン研究の概要を述べ、その成果と問題点を検討する。

(2) 人間関係論の展開

人間関係論的研究の中心は動機づけ理論とリーダーシップ研究である。そこで、これらテーマに関する主要な研究を紹介する。

(3) 人間関係論と社会心理学

実際の人間関係において生じる様々な問題について社会心理学ではどのようなアプローチがなされているか。印象の形成過程や対人魅力を中心に論じる。

精神身体医学 II

武 井 茂 樹

精神と身体との関わりは、現代科学の中でも中心的あるいは究極的課題である。この課題を論ずる場合、種々のアプローチがあると思われるが、本講義では、精神医学全般にわたる基礎的概念の解説を行った上で、次の観点から講述する。

人間の精神とその障害が、どこまで身体としての「脳」とその機能障害に関連づけて理解可能であるか。特にてんかん、痴呆、脳局所損傷、脳死などを中心に述べる。

また、東西の心身論についても、紹介、解説する予定である。

環境心理学 II

佐 古 順 彦

環境心理学の研究分野を概観する。環境心理学の考え方、環境と個人の心理（環境の知覚、環境の心理的評価）、環境と社会的相互作用の心理（空間や場所における人間関係）、そして物理的社会的環境と人間行動の心理（住居や地域や公共の環境における諸問題）についての基礎的な研究を紹介する。

運動・保健概論（環境人間工学入門）

宮 崎 正 己

最近、人間（ヒト）に対する関心がさまざまな分野で高まってきている。

本授業では、ヒトの生物科学的特性を研究し、ヒトと機器や環境との関係をインターフェイシ的な側面から、アプローチしようとするものである。特に“ヒト”と“ヒトを取り囲む環境”という観点から話を進めていく予定である。

テキストは、佐藤・勝浦著『環境人間工学』朝倉書店を用いる。

レクリエーション論

吉 村 正

レクリエーション（以下レク）の概念、レクの日米比較、レクの分類と展開、レク指導者とその指導法、レク施設と環境などについて講義する。

また、その中でもセラピューティック・レクリエーション（治療レク）とリゾートやレジャーについては、詳しく講義したい。

演 習 I

健康科学科は、大きく分けて環境心理学、社会学、臨床心理学および人間工学の4つの分野がある。演習IIではそれぞれの分野を選択し学ぶが、演習Iでは上記の4分野全てについて、基本的な考え方および研究の方法論を学習する。

演習は20名前後を一つの班とし、8つの班に別れて行われる。各分野について4回程度を以下の各担当者について学ぶことになる。各班共通の授業もあるので注意すること。また、演習Iは2コマ連続の授業となる。

担当者

環境心理学 佐古順彦 野嶋栄一郎

社会学 店田廣文 谷川章雄 蔵持不三也 吉村 正 木村利人

臨床心理学 坂野雄二 菅野 純

人間工学 石田敏郎

演 習 II（祭りと文化）

蔵 持 不三也

- 1) 文化人類学の基礎的文献（欧文・邦文）輪読
- 2) 民俗調査および調査報告書作成

なお、受講者はできる限り谷川先生の演習IIにも参加すること。

演 習 II（日本の民俗文化）

谷 川 章 雄

この演習では、日本の民俗文化の研究における考古学・民俗学・歴史学などの様々なものの考え方、方法を学ぶとともに、実際のフィールド・ワークを体験する。すなわち、人間とモノの関係、人間と自然と神の交渉からなる日本の民俗文化の多様な世界を知ることが本演習の目的である。具体的には、基本的な文献講読、フィールド・ワーク及び調査報告書の作成、さらに各自の卒業論文に向けての準備に入ることを目標とする。

演 習 II（高齢者を含む福祉援助）4単位

岡 野 静 二

高齢者問題と心身障害者の問題が、ボランティア活動の中で重要な位置をしめることはたしかである。そのために、それに関する文献をしらべ、同時に高齢者及び心身障害者の

ところへ出掛け、調査をすることにする。そのことによって問題点や課題が各人の中にたしかなものとして生まれたら、日本における高齢者問題と心身障害者の問題を、個人の行動と組織の力とでつまりボランティア活動として、なにができるかを考える。

演習 II (催眠を中心とした心理療法)

門 前 進

臨床実験研究の内容と、臨床実践を2本の柱として、演習を行っていく。

臨床実験としては、催眠現象、臨床心理現象に関係する英語の実験論文、英語の調査論文、英語の書籍を各自が探してきて、それを紹介していく。これらを通して、各自の卒業研究に向けて実験計画、調査計画、文献研究計画などを組み立てていくことを目標とする。催眠的臨床心理に関係するものには、リラックス、イメージ、暗示現象、葛藤、情動に関係するものなどが含まれる。臨床実践については、催眠的技法、リラクセーションに関する技法、カウンセリング技法などの実習を中心として行う。

演習 II (健康とレクリエーション)

吉 村 正

本演習では、下記の4項目について学習する。

1. Therapeutic Recreation では、医師、看護婦、ケースワーカーやアレルギー患者たちと、サマーキャンプを行い、24時間診療を試みる。春に病院見学、秋に治療レクリエーションを行う。(医療スタッフからの特別講義も予定している。)
2. Outdoor Recreation では、都会の雑踏から離れ、自然に触れ、Recreation (再創造) 活動と学習を行いながら、人間の健康やレクリエーションについて考える。
3. Recreation Education では、レク活動やレジャー活動を通して、豊かに創造力(creation)を養う学習を行う。
4. 健康やレクリエーションに関する文献の講読、レジュメの作成、発表などを行う。それらを通して、人間の健康や、レクリエーション活動や指導法を正しく理解する学習も行う。

演習 II (社会開発論<地域社会の開発に関する調査と研究>) 店 田 廣 文

住民運動はひと頃に比べると社会の耳目を集めるといった点では大きく後退した感はない。しかしこれは地域社会に運動の対象となりうる問題等が減少したのではなく、従来の公害などの謂わば直接的な生活妨害問題といった狭い領域からより対象が広がり運動そのものが多様化し質的变化をとげたためといえよう。本演習では広義の社会開発に関わるまちづくりや村おこしなど「生活の質を高める」地域の動きをメインテーマとして取り上げ、演習参加者の各々がサブテーマを分担し、資料検索・収集を進めつつ、適宜中間報告をおこなう。そのうえで全員が参加して、地域社会調査(フィールドワーク)を実施す

る。これらを軸として、研究発表・レポート作成の指導をおこなう。

演 習 II (人間工学)

石 田 敏 郎

オフィスオートメーションの発展に伴い労働現場ではVDT作業など、視覚情報処理作業が増大してきた。その結果、視覚的疲労や、局所筋負担などが新たな産業疲労として、人間工学の重要な課題となっている。本演習では、この問題を核として、人間工学を学ぶ上で基本となる種々の測定手法およびデータ解析手法についての実習を行なう。実習項目の主なものは、人体計測、動作域、照明と明るさ感、人間の情報処理、生体情報処理などである。また、実習レポートとその発表が参加者に義務づけられる。

なお、本演習希望者は人間工学 I を履修していることが望ましい。

演 習 II

野 呂 影 勇

人間にとり最適なものや環境を創造するために寄与する人間工学として、1996年度は、以下の演習を実施する予定である。

第1部

人間工学の方法の基本演習編

測定法

1. 1 人間工学の基本的測定
1. 2 ヒトと物の関係を表す尺度 人間・時間・空間
2. 人体計測
3. ひとと情報の関係
4. 人の五感に関わる知識とその測定法解析法
5. デザイン

第2部 応用演習編

1. 座の演習 (椅子の座り方の研究)
2. 立体映像とバーチャルリアリティ／サイバースペース
3. 臨場感通信 (プレゼンスコミュニケーション)
4. ナビゲータ・リモコンなどの製品デザイン
5. 化粧と肌・毛髪の人間工学
6. 看護環境の人間工学

第3部 オプション

イベントの企画・実施

ビデオと音響・芳香クリエータ

演 習 II (環境心理学<感性と文化差の心理学>)

齋 藤 美 穂

この演習では環境と人間との関わりを、主として色彩心理学や造形心理学の立場から考察する。また色彩嗜好等の感性やパーソナルスペース等の空間認知の国際比較や文化間の差異も当ゼミの主要な研究領域である。前半はこれらの研究領域への理解を深めるために文献講読を中心に行い、後半は各人がテーマを決めて実験・調査の計画を立て具体的に進めて行く。

演 習 II (臨床心理学・健康心理学)

上 里 一 郎

この演習では、(1)行動異常の形成のメカニズム、プロセス、心理的特性、心理治療、(2)自我同一性(エゴ・アイデンティティ)の形成と病理、(3)健康心理学の問題(例えば、患者の心理過程、リスクファクターとしての行動様式、喪失の受容過程、摂食行動の病理、ターミナルケアなど)のなかからテーマ選び学習する。前期は主として文献を読み発表・討論したり、施設見学・実習を行い問題の焦点化を図る。後期は各自のテーマを決めるために、文献講読、実験・調査への参加、合宿などをおこない、ついで研究計画を立て調査や実験をおこなう。

演 習 II (教育工学<教育工学と教育心理学>)

野 嶋 栄一郎

教育心理学と教育工学の関係は、基礎と応用の関係にある。基礎的な研究は実験、調査を、応用的研究は開発を主たる研究方法とする。研究の対象は、教育という枠組の中での人間の行動とそれを取りまく環境、およびそれらの相互作用である。

前半は資料講読、後半は調査・実験の班別の演習を行なう。カバーする領域は、メディアと認知、教育環境と行動、教育測定と教育評価、タスクアナリシス、マルチメディア教材の開発、適性と指導法、学習過程とカリキュラムの評価等々である。

演 習 II (行動療法)

坂 野 雄 二

前半は、「心理学研究」誌、「教育心理学研究」誌、「行動療法研究」誌、「Behavior Therapy」誌、「Behaviour Research and Therapy」誌等に発表された論文や症例報告の講読を中心にして、行動療法の実際について、実験臨床とケーススタディの両面から演習を行う。「行動療法Ⅰ」および「行動療法Ⅱ」において学習した基礎的事項を実際の臨床場面において応用できるよう学習を行う。後半には、臨床の基礎研究として、不安、神経症、ストレス、心身症、抑うつ、児童生徒の学習や問題行為等に関わる諸要因(人格変数、環境、対人関係等)の検討を実験もしくは調査によって行う予定である。

演 習 II (人間工学<作業及び労働環境生理学>)

宮 崎 正 己

本演習では、生体の情報処理を中心としておこなう。具体的には、積極的な健康へのアプローチとしての身体活動、あるいは、疲労に至るまでの、人の生体反応を環境とのかかわりあいから観察する予定である。

実施項目としては、身体の構造として、形態、皮下脂肪厚、身体組成、姿勢、重心などの計測をおこなう。また、身体の機能面からは、各種エルゴメトリー、心電図、血圧、体温、皮膚表面温度、力、筋電図、反応時間、反射、神経伝導速度等の測定をおこなう。

いずれも、実習を中心として実施する。おたがいが検者、被検者としての役割を果たしてもらうことになる。それぞれの項目が終了するごとに、レポートの提出をおこなう。また、データ処理についてもコンピュータ (Macintosh, IBM 互換機) を使用して、エクセルワードを使いこなせるようにする。また、計測制御用ソフトウェアの Labview (Ver. 3.1) を使い、データ取得及び処理機能の習熟もめざす。特に、ウインドウ NT3.51 の OS によりサーバー・クライアントのネットワーク構築についても進めていく。可能であれば、自宅から携帯パソコン (モデムを介して) から研究室へのアクセスをおこない、大学へ来なくてもデータ、テキストのやりとりができるようにする。

文献抄読は、1人3〜4件ほどおこなう。このことにより、人間工学系における視野をひろめ、知識の獲得をおこなう。

演 習 II (環境心理学)

相 馬 一 郎

前半は環境心理学を理解するため文献を読み、その報告を中心におこなう。後半は、各自がテーマを決め、それを中心に計画を立て、具体的な実験・調査をおこなう。テーマによっては文献中心ということもある。ここでの実験・調査をもとに卒業研究のテーマをしぼりこむことを意図している。

演 習 II (環境一行動研究)

佐 古 順 彦

環境一行動のインターフェースの研究を主として認知の観点から取り上げる。環境心理学関係の研究法の実習を行なうと共に、既存のデータを利用したり新たな実験・調査を行って環境心理学の研究を実践してみる。

演 習 II (発達と臨床)

菅 野 純

主に児童期から青年期にかけての文献の解説と、発達と臨床に関する諸テーマ (不登校、家庭内暴力、食行動障害、アパシー人格障害など) についての研究発表、そしてカウンセリング、絵画療法、箱庭療法などの臨床方法についての演習を行う。また基礎実習としてここ3年来続けている障害者施設での宿泊研修を夏期休業期間に行う予定である。

演 習 II (バイオエシックスの基礎理論と臨床の倫理)

木 村 利 人

バイオエシックス基礎理論の徹底的理解を目指して、哲学・宗教・倫理・医学・生物学に関連する重要な文献を幅広く読み、レポートし、更に具体的な「事例」をとりあげ研究・調査・討議等を行う。たとえば、臨床的見地から「真実告知」の方法とその内容、インフォームド・コンセントをめぐる医療の現場の問題などをとりあげる。また、セミナー参加者の学習のニーズに応じ、いのちの始まり、いのちの質、いのちの終り等のそれぞれのテーマに即し、論文の書き方、発表の仕方等についてもトレーニングし、卒論へと結びつけて行く。外国語による研究・講義・討議も行うので極めて長時間の準備が必要となる。

更にこれらの内容をまとめて外国語による報告や討議のセッションを、外国人学習や外国留学生を迎えて行う。成績の評価は、グループレポートと個人レポートの内容、討論への参加による貢献度、発言の内容等を慎重に考慮して行う。

専門教育科目 (人間健康科学科 選択)

産業・職業社会学

安藤 喜久雄

産業・職業社会学の諸分野——企業組織，労働者意識，労働組合，労使関係，産業と社会，職業など——について，これまでの研究成果をふまえながら，各々の現状と課題について講義する。これらを通じて現代社会における人間の生き方を探ってみたい。

〔教科書〕：『産業社会学』安藤喜久雄・他共著，学文社刊 ￥2,500

生活構造論 I

池岡 義孝

われわれが経験している生活世界の構造を理解するためのアプローチとして，社会学的な思考法，発想法を獲得することを目的とする。テキストはとくに使用せず，参考文献は取り上げるテーマごとに教場でその都度指示する。

生活構造論 II

店田 廣文

「豊かさ」や「ゆとり」が問われる今日，あらためて「生活」をとらえ直す必要に，われわれは迫られている。人間が構成する「生活世界」のしくみは，構造的制約をうけるものの，行為者（生活者）の能動性や創造性によって大きく変動する。生活の再構成のためには，多様な地域や文化の経験ならびに将来の見通しをふまえた取り組みが要求される。以上のような立場から生活にアプローチすることが本講の課題である。

社会運動論

濱口 晴彦

社会運動を社会問題解決の集会的志向ととらえ，それらの事例をふまえながら，社会運動の意識化，構造化，組織化について講述する。人数が少なければ，セミナー形式でケース・スタディ方式で各自に発表してもらい，討論することも考えている。

参考文献：濱口晴彦『社会運動の組織化』（早大出版部）

社会意識論

和田 修一

日本社会においては，本来的にアソシエーションである集団に対してもコミュニティとしての意味付与をしばしば行われることが指摘されている。たとえば，本来は経済利益の追求という極めて実利的な組織（アソシエーション）であるはずの企業に所属することにも運命共同体（コミュニティ）への所属と変わらぬ意味付けが行われることが当然視されている。本講義では，こういった日本人の意識構造が何故生まれてきたのかにつ

いて、かつての日本で優越的な位置づけを与えられてきた「家族主義イデオロギー」並びに今日でも影響力を行使し続けている「パターンリズム」という2つの価値体系の視点から論じる。

なお、受講を希望する学生は、かなりの量の必読文献が課せられることを覚悟されたい。

社会調査法 I

店 田 廣 文

本講の目的は、特定の社会現象を解明するために定められたデータ収集とデータ分析の科学的方法である社会調査法の基本的な考え方と技法を修得することである。取り上げる課題の主たるものは、①社会調査の目的と全体の流れ、②標本調査の考え方と標本抽出の方法、③質問文と調査票の作成、④調査の実施と結果の分析を予定している。これらのことを通して最終的には、各人が各人の関心テーマに応じた調査計画を作成できるようにしたい。

社会調査法 II

野 嶋 栄一郎

(1)測定の信頼性と妥当性、(2)調査票の設計、(3)標本抽出と標本調査法、(4)データ解析(回帰分析、判別分析、因子分析、数量化理論)、のうち、1～2個のテーマをとりあげ解説する。

使用教科書『テストの信頼性と妥当性』カーマイン&ツェラー他(水野銅司、野嶋栄一郎訳) 朝倉書店

社会開発論

店 田 廣 文

社会開発は経済開発重視の政策への対抗的な概念として積極的に唱えられてきたもので、社会開発そのものは一般的には生活環境の整備、住宅、保健・医療・衛生や教育・文化など広義の社会の福祉水準向上や人間の能力向上を目的とするものである。この講義では社会開発の理論と開発計画のサイクルならびに住民参加の問題や社会開発のための認識・監視・評価について論じていくことにしたい。

コミュニケーション論

臼 井 恒 夫

コミュニケーションといえば、通常それは思想の伝達ないし交換を意味し、あるいは思想の交換にもとづき成立する一定の社会関係を意味している。したがって社会学的立場からのアプローチでは、記号過程論よりも社会関係論としてのコミュニケーション論に比重がおかれることになる。本講では、「社会変動とコミュニケーション」というテーマを設定して、現代社会をとりまくさまざまなコミュニケーション状況に言及してみたい。

余 暇 論

長 田 攻 一

「余暇」という概念の社会的意味は、社会の歴史とともに変化してきた。本稿では、生産力の発展に対応する社会の変動過程を踏まえた上で、世界における労働時間短縮の略史、余暇（ないしレジャー）と労働の社会的意味の変化を簡単にあとづけ、消費社会、脱工業化社会、情報化社会と呼ばれる今日の社会において、余暇がどのような意味を帯び、われわれに対してどのような対応を迫りつつあるのかについて考えてみたい。とくに、現代日本の労働時間短縮、リゾート開発、広告とレジャーの関係などのトピックに焦点を絞りながら、現代日本社会の余暇（レジャー）をめぐる問題点を考察してみたい。

参考文献などは、教場でその都度指示する。

教育心理学 II

野 嶋 栄一郎

テキストの流れに沿い、教育の目的を人間の有能さ（コンピテンス）を助長することにあるととらえ、その目的実現のための教育活動を「発達促進」、「訓練」という対極をなす教育理念を軸に解説していく。一方、教育の科学的研究を至向したとき、教育心理学は従来の枠からはみ出ることがある。このはみ出る部分を大事にしたい。本年も引き続き「コンピュータと教育」、「メディアと教育」をトピックスとしてとりあつかう。

テキスト：入門教育心理学（波多野誼余夫，久原恵子）有斐閣

環境心理学 I

相 馬 一 郎

環境心理学について概括する。内容的には、環境を認知する人間側の感覚器官の特性、知覚などについてふれ、さらに環境と人間のかかわりあい、行動などを述べた後に、環境の評価、環境への意識などについてふれる。

造 形 心 理 学

齋 藤 美 穂

本講は、美や快適さを追求する人間の「こころ」にかかわる諸現象に焦点を当て、それに対して造形的側面から解釈を与えるものである。造形物は主として三属性、すなわち形態・色彩・材質により構成されているが、本講では特に形態と色彩に関する知覚と感情を中心に考察することになる。具体的には、1. 視知覚のメカニズムと情報処理システム、2. 形態と色彩の知覚および認知に関する基礎的現象、3. 形態と色彩に関する感情効果やパーソナリティーとのかかわり、4. 美に対する心理学的解釈とその国際比較などを中心として授業を展開する予定である。スライド・ビデオ等の視聴覚教材および簡単な作業を通して我々を取り囲む造形物への理解を深めて行く。テキスト・参考文献および最終評価の方法に関しては授業中に説明する。

組織心理学

松本 芳之

組織心理学とは、産業心理学の中で、特に集団や社会体系に強調をおいたものである。こうした理解が必要であるのは、組織に属する人々の様態が、結局、組織のあり方に依存するからである。しかし、組織心理学の目的は、個人の理解にとどまるものではない。組織活動を営む中で、独自の問題が生じる。これらの問題の理解こそ、組織心理学の目的とするところなのである。組織についてのさまざまな理論や研究方法は、こうした困難を扱う中で生みだされたものである。そこで、本講義では、それらの問題を振り返りながら、組織に対するいくつかの捉え方を検討するとともに、現在の我々にとっての問題点を考えて行きたい。

テキストは使用しない。参考図書については、講義の中で紹介し、また、資料は適宜配布することとする。

人間行動と環境 (医) I

黒田 勲

人間が置かれた生活環境について、異常環境下における人間行動から逆に地上環境での行動に与える基本的原理を考えてみる。

酸素および圧力についての地球史的観点から生物行動の推移について検討する。空間および時間環境については、リズム、時差、単調の問題、温度、湿度の特殊作業環境、重力および加速度に関する生体反応、光、騒音、衝撃、振動等の物理環境下での人間行動、放射能、一般的中毒物質についつての行動変容とパフォーマンスの限界、さらに人間社会環境条件が行動に及ぼす影響の原則について講義する。

人間行動と環境 (医) II

黒田 勲

生活環境における健康、作業環境におけるパフォーマンスに影響する因子について、仕事、仕事環境、人間関係、これらの管理を含めた外的要因、心理的および生理的ストレス、個人特性による内的要因、人間-機械インターフェイス、自動化等、安全人間工学の総合的観点から検討を加える。さらに緊急事態、強度ストレス環境、航空宇宙環境等の特異環境における人間行動を含めて講義する。

心理検査法 I

菅野 純

心理検査の中でも本講義では人間発達を知るための以下の検査を取りあげる。

- (1)精神発達検査 (乳幼児精神発達診断法, MCC ベビーテストなど)
- (2)言語発達検査 (ITPA, 言語障害選別検査など)
- (3)感覚・知覚・認知能力検査 (ベンダー・ゲシュタルト・テスト・フロステッグ視知覚発達テストなど)

(4)知能検査(演習 I で扱う WISC-R 以外の諸検査——ビネー法, マッカーシー知能発達検査など)

(5)描画法(人物画法, バウムテストなど)

それぞれの背景となる理論, 実施法, 実施上の留意点, 解釈法などを事例をもとに講義する。

心理検査法 II

上 里 一 郎

人間の性格をアセスメントする心理学的な方法は多岐にわたるが, その中から代表的なものをとりあげ, その理論・方法・効用と限界・実践例などについて講義するとともに, 実際に心理検査を自分と他者に実施してまとめ, レポートを提出するという方式ですすめる。具体的なプログラムは以下のとおりである。

- 第1回 性格のアセスメント総論(1)
- 第2回 性格のアセスメント総論(2)
- 第3回 質問紙性格検査—矢田部ギルフォード性格検査(1)
- 第4回 質問紙性格検査—矢田部ギルフォード性格検査(2)
- 第5回 質問紙性格検査—CMI(1)
- 第6回 質問紙性格検査—MMP I(1)
- 第7回 質問紙性格検査—MMP I(2)
- 第8回 作業検査—内田クレペリン精神作業検査(1)
- 第9回 作業検査—内田クレペリン精神作業検査(2)
- 第10回 投影法—PFスタディ(1)
- 第11回 投影法—PFスタディ(2)
- 第12回 投影法—ロールシャッハテスト(1)
- 第13回 投影法—ロールシャッハテスト(2)
- 第14回 投影法—ロールシャッハテスト(3)
- 第15回 性格のアセスメント総論(3)

なお, 受講者は心理検査法 I を履修していることが望ましい。

行動検査法

坂 野 雄 二

臨床的現象を客観的に査定するための方法論や臨床的介入の計画法, 資料の処理の方法について, その理論と実際を学習する。内容は以下の通り。

- ①臨床的出来事の客観的理解: 臨床心理学のための研究計画法
- ②臨床的出来事の客観的理解: 臨床心理学のための基礎統計
- ③不安を感じるとなぜドキドキするか: 情動の生理学的測定

- ④行動や症状を記述する：行動観察法
- ⑤行動や症状を数量化する：尺度構成法
- ⑥臨床的出来事を客観的に評価する：行動検査法総括

それぞれのテーマに関して実習を伴うため、単位取得は全時間の出席を前提とする。各テーマ毎に提出されたレポート、期末レポート、および期末試験結果を総合して成績を評価する。

行動療法 I

坂野 雄 二

行動療法の特徴は、さまざまな心理的問題を、社会化あるいは個性化の過程で誤って学習された習慣と考える点にある。講義内容は以下の通り。

- ①行動療法の定義と発想
- ②行動療法の歴史
- ③精神疾患、各種不適応問題の診断と査定
- ④臨床的介入の評価
- ⑤行動理論概説
- ⑥系統的脱感作法：不安への介入
- ⑦モデリング法：適応行動の獲得
- ⑧オペラント法：不適応行動の修正と適応行動の形成
- ⑨発達障害と自閉性障害の指導
- ⑩行動療法の適用症例と事例研究
- ⑪行動療法の最近の発展

単位取得は、10回以上の出席を前提とする。学期中3回以上ワークシートの提出を求める。提出されたワークシート、期末レポート、および期末試験結果を総合して成績を評価する。

行動療法 II

坂野 雄 二

行動療法の最近の発展系である「認知行動療法」について、その理論と実際を学習する。講義内容は以下の通り。

- ①認知行動療法の原理
- ②認知行動療法の歴史
- ③認知とは何か、認知をどう評価するか
- ④セルフ・エフィカシーと行動変容
- ⑤原因帰属と行動変容
- ⑥セルフモニタリングと認知的再体制化

- ⑦うつ病の認知療法
- ⑧SST（社会的スキル訓練）
- ⑨摂食障害と認知行動療法
- ⑩ストレスと認知
- ⑪学校不応と認知行動療法
- ⑫認知行動療法展望

単位取得は、10回以上の出席を前提とする。学期中3回以上ワークシートの提出を求める。提出されたワークシート、期末レポート、および期末試験結果を総合して成績を評価する。

心理療法 I

神田 信彦

心の健康を回復するため、さらに健康になるために心理療法が一定の役割を果たしている。心理療法には様々な立場があり、その違いの根幹にはそれぞれの人間観が反映している。本講義ではそうしたことを踏まえながら、心理療法を理解するために必要な基礎的な概念を取りあげる。

さらに、幾つかの基本的な心理療法（精神分析、来談者中心療法や行動療法など）を紹介し、その有効性や限界を考えていく。

心理療法 II（本年度休講）

門前 進

学校カウンセリング

菅野 純

幼年期から青年期における子どもの精神発達とその障害、不適応行動などをとりあげ、それらの問題の理解と援助の方法を考える。具体的には、①登校拒否、②いじめ問題、③心身障害と学校、④食行動異常、⑤子どもの自殺などをとりあげる。

比較文化論 《トピックス'96》

蔵持 不三也

本講は、時々刻々と変わる世界の文化的状況を、具体的な事件や出来事を通してリアルタイムで取り上げ、その歴史的・社会的・構造的背景や展望などを縦横果敢に考察しようとするものである。その限りにおいて、本講は必然的に現代世界の解読といった様相を帯びるはずだが、いささか実験的な性格の強い講義ゆえ、受講者にはとくに積極的に参加が求められる。

栄養学 II

太田 富貴雄

栄養素が不足したり量的に著しく不均衡な食事を長期間摂り続けると、発育期における成長・発達が損なわれるだけでなく、成人後でも新陳代謝や生理機能が障害されてさまざまな

まな疾病をひき起す。本講義では、幼児期から老年期までの各年代における生理的特性と栄養摂取のあり方、肥満・骨粗しょう症などの栄養素の過不足による病気の特質と治療食、成人病といわれる糖尿病・高血圧・心臓病などの病態と予防・治療のための食生活、感染性およびアレルギー性の疾患と食事の関係、発ガンと栄養、および健康・体力の水準を高め長寿を享受する栄養上の留意点などについて述べる。なお、栄養学Ⅱの聴講にあたってはあらかじめ栄養学Ⅰを受講しておくことが望ましい。

人間工学 II

野 呂 影 勇

本講は、人間工学に将来、関わる学生にとって必要とする基礎的な考えと課題解決の知識修得を目的としている。まず、人間工学入門すなわち、人間工学の方法の基本（人を評価する方法／人に評価させる方法に中心を置く）と新たな方法の解説を行う。

人間工学の応用として、身装系（含む身を守る安全システム）など10のデザイン系の実例の紹介と解説である。最後に、野呂研究室の研究実績のうち、社会的に反響の高いものを二三紹介する。

第一部 理論と方法編

第二部 人間工学のデザイン

第三部 最新のトピックス

特 論 III（本年度休講）

特 論 IV（INTERCULTURAL COMMUNICATION） Robert Gray

This is a one-semester course conducted entirely in English. Participating students are expected to have intermediate to advanced English proficiency. Lectures and discussion relate to issues of adaptation and enculturation at the national and international level. All students will undertake an original research project. Evaluation is based on class attendance and participation, an in-class presentation, and a 1,000 word essay, in English, in which the research project is reported.

Text : No set text. In place of a text, notes, articles and videos will be distributed in class.

専門教育科目 (スポーツ科学科 必修)

スポーツ科学概論

上 田 雅 夫他

本講義は、スポーツ科学の入門として、また、2年次以降の専門必修科目である演習(I, II A, II B)の選択の参考に供するため設置されたものである。スポーツ科学は、極めて広い領域を持つ総合科学である。したがって、上記目的を達成するために、本年度は、①原理・哲学・歴史学等の人文科学的領域、②社会学・経営学等の社会科学的領域、③生理学・心理学等の自然科学的領域、④運動学やトレーニング、運動方法等の動作系領域に分け、それぞれの担当者が講義する。本講義を通して、各領域をできるだけ理解し、自分にあった分野を見極める手がかりを得ることが望まれる。なお、本科目の成績は、演習Iの選択に関わるものであることも付言しておく。

スポーツ社会学

宮 内 孝 知

スポーツは現代社会において極めて大きな、かつ、重要な意味を持つ社会現象である。それは一つの文化として大きな勢力を持っているばかりでなく、政治や経済、教育などと密接に関係し、そこに社会学的理解の必要性和意義がある。本講義では、スポーツの社会的な意味と価値、その機能などについての基礎的理解を得ることをねらいとしている。

〔参考書〕：『スポーツ社会学講義』(大修館)

スポーツ情報論

中 条 一 雄

情報化時代の今日、一瞬にして世界を駆けめぐる大量の情報に、スポーツ界は大きく影響を受けている。スポーツに対する選手や大衆の考え方、世間の目も、めまぐるしく変化しつつある。スポーツと情報のかかわり合いを、次のような網目で追求してゆきたい。

- 1 スポーツの発達と情報の大切さ
- 2 事実とは何か。物を見る目の大切さ
- 3 情報と商業主義・企業、冠大会
- 4 情報とプロ・アマ問題
- 5 情報と政治権力。言論の自由
- 6 ニュースと解説・評論、ニュージャーナリズムの実際
- 7 情報の分析と利用・新聞の読み方
- 8 情報の分析の実例
- 9 わかり易い情報とそのまとめ方、構成

10 情報としての体育学

スポーツ文化論

寒 川 恒 夫

スポーツを文化の問題として論じるために、以下の諸項目について講義をおこなう。

1. 文化の諸概念
2. スポーツの諸概念
3. スポーツ文化複合
4. スポーツと神話と世界観
5. スポーツと民族生活
6. スポーツと文化伝播
7. スポーツと構造機能論
8. 武道と日本文化
9. スポーツと身体技法

〔教科書〕：『スポーツ文化論』（杏林書院）

スポーツ経営学

梅 澤 宣 雄

スポーツ経営学とは何か。その意義と、理論体系について、組織論，経営過程論，行動科学等に依拠しながら概説する。

運動生理学

村 岡 功

運動と関連深い生理的機能は、主に運動を支配する神経系および内分泌系，運動を発現する骨格筋系，ならびに運動を持続する呼吸循環系である。

ここでは、これら生理的諸機能に焦点を合わせ、一過性の運動ならびにトレーニングによる影響について言及する。

なお、この科目を履修するにあたっては、各自で生理学の基礎を理解しておくこと。

スポーツ心理学

上 田 雅 夫

近年、スポーツにおける精神面の重要性が指摘されている。昔から、運動技術を十分に発揮するためには「心・技・体」の三つの要素が充実していなければならないと言われてきた。ここでは、特に「心」の部分の強化法を中心に扱うが、あわせて、効果的な技術練習，体力トレーニングの進め方について述べる。主な内容としてはつぎのものを予定している。1) スポーツ行動の本質，2) 運動・競技の適性，3) 運動学習の諸問題，4) 競技力について，5) 緊張異常（あがり）とその対策。

参考文献は必要に応じて講義で紹介する。

バイオメカニクス

永 田 晟

多くの基本運動とスポーツ活動を工学，スポーツ医学，解剖学，生理学，物理学，リハビリテーションの面から考究し，それぞれの運動メカニズムを講義する。運動現象の機構をわかり易く詳講し，運動方程式とスポーツ・運動のモデル化を演習しながら実証する。バイオメカニクス上の基本用語（英語）に熟知し，スポーツ科学のスペシャリストとしての生体機構上の知識を学習する。

- ① 基本運動の分類と人体形態・組織解剖学
- ② スポーツ活動時の骨・筋，靱帯，神経，血液・心臓，呼吸機能の働き
- ③ バイオメカニクスの研究方法と計測法
- ④ 運動神経機構と神経支配（運動生理学）・敏捷な動き
- ⑤ キネテックスな解析例（運動力学）
- ⑥ キネマテックスな解析例（計量測定学）
- ⑦ 動きのエネルギー効率と競技力の向上，そしてトレーニング効果
- ⑧ バイオ・フィードバックとバイオ・フィードフォワードの応用（制御工学）
- ⑨ 筋パワーの出し方と使い方—微分機能
- ⑩ 各種運動方程式と生体工学の基礎（モデリング）——打つ，投げる，滑るなど
- ⑪ 周波数分析とフーリエ展開，そしてパワースペクトルの算出法
- ⑫ プログラム制御と構え
- ⑬ 生体信号のフーリエ変換（周波数分析）と——ECG，EMG，EEG など
- ⑭ 歩行運動の各種分析—筋電図，ゴニオグラフ，床反力—，そして疾患者との比較
- ⑮ 第1～3種のもてこの応用と計算——アキレス腱断裂と裂離骨折
- ⑯ 床効による力積とエネルギー計算—積分機能
- ⑰ スピードの出し方と運動スキルの上達法—運動学習
- ⑱ OT と PT の役割とリハビリテーション医学

〔教科書〕：『バイオ・キネテックス』（杏林書院）

体力トレーニング論

加 藤 清 忠

トレーニングに関する概念的な理解の上に，体力・健康養成ムーブメントの歴史的背景や問題点を明らかにするとともに，従来行なわれている各種のトレーニング法に関して順次解説していく。そして更に，現代トレーニング法の基本的な考え方やより効果的なトレーニング法とは何かといった点について述べるが，競技スポーツにおけるドーピング問題にも言及するつもりである。なお，2～3グループに分けて，授業の最初に全員の体力測定を実施する予定である。

テキスト：『マッスル・トレーニング』（西村書店）

演 習 I (スポーツ心理学)

児 玉 昌 久

スポーツ心理学は、スポーツ活動に関して基礎科学である心理学を適用、実践していく科学領域である。そこでは、直接、間接を問わずスポーツに関わる人間の行動の全てが対象となりうる。

課題に対する取り組みはきわめて自然科学的であり、思考法、発想法も、自然科学的な態度が要求される。

スポーツ心理学の研究を進めて行くために必要となる。心理学的思考法の理解を深めるため、研究方法を課題の中心にする。

トピックスは心理学の主要研究領域である学習、知覚・認知、動機・欲求、人格、情動更に社会心理、臨床心理などにわたり、観察、検査、実験など諸方法の実験計画法、測定方法、資料解析法について行うため、また、課題ごとのレポートや発表が課せられるため、かなり負担が大きくなることが予想される。

文献の輪読と実験実習とを併行していくが、特に後者の比重が大きいため、授業への参加が重視される。「測定・評価論」もこの演習を行って行く上で大変重要な意味をもっている。

演 習 I (精神生理学・心と身体のスポート科学)

山 崎 勝 男

プレッシャーを感じ過ぎると緊張して体は硬直し、喉はカラカラ、心臓はドキドキ、手掌にじっとりと汗をかく、いわゆるあがりの現象が生じる。このようなときに良い競技成績をあげることは期待出来ない。スポーツ科学における精神生理学・心と身体の関係関係を解明する学問は心理的なプレッシャーに大して、どのような身体の変化が生じるかを客観的に調べ上げると共に、過剰な身体変化の防止対策及び最適な緊張水準へ自己コントロールする方策を明らかにして、現実場面への適用を示唆することである。授業では、心理学的な方法論とこの学問に関わる生理学的な方法論を含めた演習を中心に展開し、この学問をスポーツ科学的に位置づけたい。

演 習 I (身体運動の生理生化学)

村 岡 功

本演習では、一過性の運動に対する生体応答とトレーニングに伴う生体適応を明らかにすることを目的とする。そこで演習 I では、運動生理学の分野で用いられる基本的な測定を行い、得られたデータに基づいて、運動に伴う生理的諸機能の変化を観察することとする。予定している演習項目は、①筋電図、②心電図と血圧、③心拍数、④肺換気、⑤血液の5項目である。なお、演習項目⑤では耳朶血を採取することもありうる。また、授業は基本的に全員が測定者や被験者となってデータを取るように進められ、そして、授業終了後それぞれについて、1週間以内に各自でレポートをまとめて提出することになる。

演 習 I (スポーツ人類学)

寒 川 恒 夫

スポーツ人類学についての基礎的演習をおこなう。スポーツ人類学はスポーツを文化人類学(民族学, 民俗学)の方法によって研究する分野である。ここにいうスポーツは人類がこれまで展開したスポーツの全体を指しているが, 本演習では民族スポーツ(ethnic sport)が扱われる。本演習は第3年次演習のための基礎の性格を有するため, その目的は, 日本と諸外国におこなわれる民族スポーツとその文化的背景を理解することに置かれている。演習は民族スポーツについての概説的文献をテキストに, これの講読と映像資料による解説とによって進められる。

なお, 必要に応じて短いフィールドワークが課される。

演 習 I (スポーツ社会学)

宮 内 孝 知

スポーツ社会学の研究領域はきわめて広範囲に及ぶものであり, また, 学問的な関心も人によって異なるであろう。しかしながら, その研究方法は, 社会学の方法や知識を用いることになる。したがって, ここでは, 「社会」を理解する上で必要な社会学の基礎知識や態度を学ぶことと, 研究対象となる「スポーツ」と「スポーツの社会的側面」の理解を, 文献の講読, 事例の検討, 討論等で演習する。

演 習 I (衛生学)

町 田 和 彦

将来, 研究活動, 国内・国外の保健活動(行政)および環境や健康科学を活かして, 各種企業に進むことを希望する学生が, そのため最低限度の研究および活動の進め方(問題解決能迷)と実験的手技を身につけられるようなトレーニングをおこなう。

ここでは衛生学・公衆衛生学の基本的問題のうち, 当研究室に関係の深い項目についての理解を深めるとともに, 選択者全員に夏季休暇に行なわれる健康調査へ参加してもらい, 老人のライフスタイルと健康について考える。

第1回 オリエンテーション: 授業のすすめ方, 演習II A, B, 卒論, 大学院について

講義: 適度な運動とは

第2回 講義: 運動と免疫・発癌

第3回 講義: 感染症・免疫, A I D Sについて・環境問題(河川の汚染と飲料水)

第4回 講義: ライフスタイル(適度な運動, ストレス, 趣味, 栄養, 嗜好品などの日常生活に及ぼす各種因子)の高齢者の健康に及ぼす影響

第5回 アンケート調査の作り方と問診の取り方・高齢者健康調査実習の説明(実習室: 前期試験後半の2年生必修試験の後の90分・演習I 選択者全員参加)

第6回 高齢者の健康調査実習(狭山市で行なわれる7月24-27の間の調査に最低1人1日, 演習I 選択者全員が参加, 主にアンケート調査と問診担当)

なお、第5回、第6回の振り替え休日として各演習期間内に休みを2回入れる。

本演習を希望する学生は選択科目の衛生学、公衆衛生学、学科共通選択科目も含め、できるかぎり多くの医学関連科目を履修することが望ましい。また、衛生学・公衆衛生学の内容は非常に多岐にわたり、演習Ⅱで多種類の実習項目をおこなうことになるが、ここで出来る内容には限度があるため、将来、多少なりとも専門を活かした職業を希望する人は大学院進学を歓迎する。なお、演習Ⅰは前期は月曜2限、後期は金曜2限におこなう予定である。

演 習 Ⅰ (スポーツ工学)

比 企 静 雄

生体のもつ種々な機能を工学的な多様な研究の手法を使って解明するとともに、得られた知見を関連する分野に多面的に応用することを目的とする、生体工学(Biological engineering)の立場を基盤として、この演習では、スポーツ工学だけでなく、スポーツ医学や、リハビリテーション工学やリハビリテーション医学や、さらに、人間工学や教育技術や情報処理などの広い領域にわたって、講義と見学と実習を組み合わせて学習を進める。

演習Ⅰ(スポーツ工学)では、スポーツ科学全般の基礎知識として、身体の運動の力学、とくに、上肢・下肢の各関節の周りの回転運動の力学について、基本的な概念を理解する。このために、所沢スポーツホールのリハビリテーション室で、サイベックス・システムを使った、単関節の等速性回転力の測定と、スポーツ障害の機能回復訓練への応用について実習する。

演 習 Ⅰ (スポーツ経営学)

梅 澤 宣 雄

スポーツ経営学の基礎理論を理解することが出来るよう、先行論文・資料等に関する文献研究を中心に研究討議を行なう。特に、スポーツ経営学の基礎理論を、学校体育としてのスポーツ経営、地域や職場におけるスポーツ経営、商業スポーツ施設(スイミングクラブ、テニススクール、リゾートスポーツエリア等)の経営、競技スポーツの団体(チーム)の経営等の各領域にどのように活用したらよいか、という視点を常に意識しながら、より正確に、より深く理解できるようにする。また、経営調査(診断・評価)の技術を身につける上で必要な、基礎的準備についてもこの演習のもう一つの柱とする予定である。

なお、テキスト・参考書等については、授業の初めに指示する。

演 習 Ⅰ (スポーツ法学)

濱 野 吉 生

ここでは、スポーツ法学を理解するために不可欠な法学の基本的な問題、すなわち「法とは何か」「法の目的、法の解釈」「裁判と法」「憲法の基本原則」「基本的人権」等について文献を輪読し、検討を加える。

演 習 I (バイオメカニクス)

鈴木 秀 次

バイオメカニクスとは、生理学、解剖学、力学などの基礎知識を応用して、身体運動そのもののからくりを明らかにする学問である。巧みな運動、速い運動、強力な運動、自然な運動、効率のよい運動、美しい運動・・・といった運動の中にはそれなりの科学的根拠がある。ここではそれらの科学的根拠となる生理学、解剖学、運動学、力学の基礎知識を概説する。〔後期集中〕

演 習 I (栄養生理学)

太 田 富貴雄

栄養生理学の目的は、疾病を予防し、健康の維持・増進をはかり、さらには各人が潜在的にもつ様々な身体及び精神的な能力を最大限に発揮させるための最適な栄養条件を明らかにすることである。本演習 I では、栄養生理学の基礎とスポーツ活動における栄養管理の重要性について概説するとともに、広く栄養学研究の基本的技術と測定手段である呼気分析および化学分析の基礎を実習する。授業で取り上げる事項は以下の通りである。

- ①栄養素の種類と機能、栄養所要量、食品の成分的特徴（講義）
- ②スポーツと栄養管理（ビデオ教材使用）
- ③エネルギー消費量の測定（安静時と動作時）
- ④栄養摂取量の算出法（パソコンソフト使用）
- ⑤化学分析の基本操作法（実習：滴定法による有機酸と比色法によるブドウ糖の定量）

演 習 I (スポーツ運動学)

土 屋 純

スポーツ運動学は、各種スポーツ運動にみられる様々な運動形態（フォーム）の質的、量的な特徴を明らかにしようとする学問である。運動形態の記述・分析を通して運動指導の際に有効な指導理論を構築することがその主たる目的である。したがって常に運動の指導・学習の現場が重視される。

本演習では、運動の技術とはなにか、成長に伴ってどのように運動動作が発達してゆくのか、ある運動を学習するときどのような過程をたどるのか、といった運動学の基本的な問題について講義する。

演 習 I (体力科学と運動処方)

永 田 晟

【授業のねらい】

スポーツ医学、運動生理学、バイオメカニクス、スポーツ工学の視座からスポーツ・運動現象を把握し、コンピュータによるデータ処理と客観量の提示法を学習する。スポーツを実施する人間の運動機構を探究すると同時にスポーツを科学的にとらえる方法も合わせて教授する。最大のねらいは、あらゆるスポーツ・運動を実際に体験し、科学的に調査・

研究するあらゆる方法を万遍なく広く浅く学習する。その結果、スポーツを科学的に視ることができる者を育成し、有能なスポーツのインストラクターや専門家に必須な実習内容をそろえている。

【授業内容】

(演習 I)

スポーツや運動を実施する人間のからだについての基本的な知識を学習し、スポーツ科学の基礎的な若干の研究方法を紹介する。

1. 関節運動と筋力の測定：各種張力計（ロードセル型）によって身体各部位の関節（足関節、膝関節、股関節、肩関節、肘関節、手関節）の併尺性と等張性の運動時の筋力を経時的に記録する。そして全国平均としての標準筋力値と比較する。統計上の有意差検定（t検定）をおこなう。
2. 運動神経伝導速度と敏捷能力の評価：腕の尺骨神経と脚の腓骨神経を経皮的に電流刺激し、M波を誘発させて、それぞれの伝導速度（平均75m/sec）を計測する。同時に全身反応時間を測定して両者の相関を得る。
3. 最大運動能力の心理的限界と生理的限界：気合い（シャウト）を入れることによって筋張力は増加する。しかし、その精神的な興奮レベルには限界がある。表面筋電図によって筋の内部エネルギー（仕事量）を積分化して計算し、筋張力としての外部エネルギーと比較し、運動の効率と限界値を求める。
4. 音と光刺激による反応時間と反射時間の測定：フォースプレート上にて音（サウンド）や光（ライト）を暴露し、それに反応し5cm跳び上る。その試行を7回おこない、平均反応時間、平均反射時間、そして標準誤差を算出する。刺激信号の流れと大脳からの命令信号、そして感覚受容器や運動効果器の働らきに注目する。
5. サーモグラフィーとドップラー方式による運動時の皮膚温と血流量の変化：肉離れ・しこりや筋痛が発生するのは、筋組織の血液循環に起因する。それを非侵襲的に体表面温度とレーザー・ドップラー型決流量の測定によって評価する。

【演習のやり方】

学校内の授業だけでは不充分なので、任意に夏期休暇中に追分セミナーにおいて、各種の運動処方や療法を実際に体験し、話し合ってゆく（2泊3日）。

- 1 実際に各自が手足を動かして、実習を体験する。
- 2 教官が自ら模範を示す。
- 3 客観的（定量的）なデータを個人別に収集する。
- 4 パソコンによる図表表示と基礎統計処理をおこなう。
- 5 実際のスポーツや運動に必ず応用する。
- 6 コーチングやトレーニングに役立つ知識と応用できる手法を習得する。

- 7 演習後、必ずレポートにまとめ、演習実績を活字化する。
- 8 演習実績は必ず公開し、発表していく。
- 9 データの有意差検定をおこなう。例えばt検定も練習する。
- 10 他のデータと比較し、評価する。

演 習 I (体格・体力とトレーニング)

加 藤 清 忠

本演習では、正しいトレーニング法の理解と習得を目標に、トレーニング実技を中心に実習する。したがって、履修者は実技実習に積極的に参加するという意識を十分に持っていないといけない。その内容は、バーベルやダンベルのようなフリーウエイトによる基本種目・応用種目・クイックリフト種目等の実施や、各種トレーニングマシンの特徴と使用法の学習である。また、総合体力トレーニング法として、サーキットトレーニングを行う場合もある。

なお、すべてトレーニングスコアによるレポートの提出が課せられるので、必ずテキスト：『トレーニングマニュアル』（前野書店）を用意しなければならない。

演 習 I (身体運動の生理科学)

中 村 好 男

この演習では、運動生理学の視点からスポーツをとらえ、「問題の発見とその解決」の手法を修得することを目標として、運動生理学における基本的測定手法（心電図、血圧、換気閾値・最大酸素摂取量、血中乳酸、体脂肪率）の実験・実習を行う。

演 習 I (武道文化論)

志々田 文 明

武道とは、広く考えると、日本における人間の戦いの技術から発した運動文化を意味します。その素晴らしさは、戦いに勝つことを目指した先人たちが、不殺の境地を悟ったことや、不動心や平常心などの優れた精神性を獲得したところにあります。こうした精神性や人間としての倫理性を、歴史学の視点から学習していくのが演習「武道文化論」全体の内容です。そのような全体展望のなかで、この演習Iの授業で行うのは、武道文化論という研究領域の歴史、スポーツ科学における位置づけ、研究方法など基本的事項の学習です。また、指導者論から心法論までが収められた武芸伝書を学習し、演習IIへの導入とします。

武道は日本文化の興味深い一領域を占めますから、その学習は自ずからスポーツなど他民族発祥の文化との比較の関心と呼び覚まします。授業では武道文化を考察する過程で、学問の基本的態度としての批判的精神を育成していきたいと思います。

演 習 I (スポーツ方法学)

葛 西 順 一

スポーツ方法学の学問体系には、いくつかの領域があるが、ここではボールゲームの競

技力向上のための技術分析、ゲーム分析、動作分析、体力トレーニングの基礎的演習を行う。医学、生理学、バイオメカニクス、心理学、栄養学等の関連諸分野の蓄積された情報から導き出される総論、方法論をボールゲームの実践場面で活用し、その実験結果あるいは競技力向上の成果を観察・記録して分類・分析・評価を行い、実践場面にフィードバックさせることを目的として講義を中心に実習を交えて行う。

演 習 II A・B (スポーツ心理学)

児 玉 昌 久

演習II Aでは、演習Iであつかった基礎的問題を発展させ、実践的に応用することを試みてゆく。運動学習、チームワーク、ストレス・マネージメント、イメージトレーニング、メンタル・リハーサル、コンディショニング、リラクセーションなどの、スポーツ場面におけるトピックスについて、その問題を構成する要因の分析と、そこに用いる方法の選択やその効果の測定方法などを、モデル実験によって検討すると共に、種々の文献と比較研究する。

演習II Bは4年次の履修のため、卒業研究と平行して行うことになるので、とりあげる課題は各自別々に、卒業研究に結び付く研究テーマを設定する。研究方法、実験デザインなどの検討、実験器具の操作の習得、結果の処理・分析方法の吟味・習得、論文のまとめ方など、演習I、演習II Aで経験してきたことのまとめを行い、科学的思考法を充分にマスターすることを目指す。

演 習 II A・B (精神生理学・心と身体のスポーツ科学)

山 崎 勝 男

「演習I」で学習した基本的事項をさらに深く追求する。そしてこの研究領域の主要テーマに関する広範な文献研究を行い、現在の国際的な研究動向も同時に探ることを当演習の目的としたい。受講者は文献研究に参加して、文献紹介及び報告の役目を随時に担う。これらの経験を基礎として、受講者は各自の興味にしたがった実験研究計画を立案・企画し、受講者自らが実験者になって、比較的短期間の実験を行う。ここで得られた実験結果を各自が分析してレポートしてもらう。本演習は卒業論文研究の予備的な性格が濃い。当演習でマスターした研究方法を基盤として、4年次の卒業論文への発展、展開してもらいたいと考えている。

演 習 II A・B (身体運動の生理生化学)

村 岡 功

《演習II A》ここでは、演習Iでの基本的な測定を土台として、本演習の主要テーマであるエネルギー出力の問題、さらには運動に伴う血液生化学的成分の変化に焦点を合わせ、それぞれの測定技術を修得することを目標とする。そして可能ならば後半では、各自の興味あるテーマについて英語の論文を渉猟し、その内容を発表することとしたい。

《演習ⅡB》演習ⅡBでは、演習ⅡAでの後半に引き続いて、運動生理学に関する英語の論文を発表する形で授業を進めるが、ここでの発表内容は、直接卒業論文と関連したものとなる。同時に、問題点の発見と課題の設定、解決方法の選択と手法の確立、による研究の進め方と、その結果に基づいた研究論文の書き方、などについて教授し、最終的に卒業論文を完成することにつながるものとする。

演習ⅡA・B（スポーツ人類学）

寒川 恒夫

演習ⅡAではスポーツ人類学の理論および研究方法について学ぶ。一世紀余の研究史をもつスポーツ人類学は、これまでに、進化論、伝播論、構造機能論、解釈論、象徴論などさまざまな理論から接近されたすぐれた数多くの論文・著書を有している。本演習では、こうした論文・著書の講読を通して理論モデルを含むスポーツ人類学の研究方法一般について理解する。なお、研究方法論学習の一環として一週間のフィールドワーク実習が課される。またそのために「社会調査Ⅱ」の履修が義務づけられる。

演習ⅡBは卒業論文指導に当てられる。演習ⅡAの研究方法論学習の成果として決定された研究テーマ・研究計画に従って定期的に発表をおこない、そのつど指導を受けて論文作成を進めてゆく。

演習ⅡA・B（スポーツ社会学）

宮内 孝知

内外のスポーツ社会学の論文を広く読みながら、スポーツの社会的理解を深めるとともに、社会調査を含めた基本的な研究方法の演習をする。また、この「演習ⅡA・B」を通じて、多岐にわたるスポーツ社会学の研究領域から、自分の研究テーマを具体化していくことも必要であろう。

演習ⅡA・B（衛生学）

町田 和彦

演習Ⅰで身につけた基礎的知識をさらに充実させるとともに、研究能力の育成に重点をおく。前期は生化学実験の基本操作と動物の取り扱い、健康のための栄養・運動と疲労、健康管理実習（血液・尿・血圧の分析）、高齢者の健康調査実習。

後期は食品衛生（食中毒の疫学シミュレーションと食品添加物の測定）、環境衛生（水質検査と空気の物理化学的性質の測定、培養細胞を用いた毒性試験）、微生物学実習、ウイルス・免疫学実習。さらに11月後半より卒論について考えていく。

なお、冬休み中（夏、冬、春）には衛生・公衆衛生関連テーマについての英文和訳と本の抄読のレポート提出をおこない、一層の理解を深めるとともに、実習の前にはそれぞれに関連した話題について、ビデオ又はスライドを中心とした講義をおこなう。おな演習ⅡAのAコースは火曜日3時限のみを予定している。Bコースは火曜日3時限から4時限迄

(時には5時限迄) かかることが多いので4時限の科目や活動はさけることを希望する。

演習ⅡBは金曜日3時限以降に行い、その内容は各自の卒論のテーマに合った調査法や実験技法の指導が中心になる。

演 習 ⅡA・B (スポーツ工学)

比 企 静 雄

人間の運動機能に関係する体格・体力や動作の特性を、観測・記録して分類・評価するための測定方法を取りあげる。そして、このために使われる計測機器・システムの動作原理と操作方法や、電子計算機の利用による、測定データの処理や画像解析や、運動のシミュレーションのためのモデル化などについて、ビデオ撮影やMRI画像や筋電信号などを材料にして学習する。

また、人間の運動機能や感覚機能に一時的あるいは長期的に起きる障害に注目して、それらの障害を検査する方法や、障害された機能を修復したり代行したりする可能性や、機能を回復するための訓練の効果などについて、医療技術の開発や障害児の教育環境や障害者の福祉体制などの側面もあわせて学習する。

これらの演習ⅡAの学習の過程を、演習ⅡBでは、さらに一般化しながら継続する。

なお、この演習を選択する者は、関連の講義科目(スポーツ科学科の専門選択科目、選択)の「スポーツ工学Ⅱ」と「リハビリテーション」を、2年次か3年次に履習すること。

演 習 ⅡA・B (スポーツ経営学)

梅 澤 宣 雄

スポーツ経営の実践領域である、学校、地域、職場、スポーツ施設等に関する経営学的研究に資料を求めながら、スポーツ経営の理論体系について学習することを基本的なねらいとする。同時に、演習Ⅰにおける学習をもふまえて、ここでは経営調査グループを組織して実際に調査を行う予定である。すなわち、目標の設定、調査計画の立案から、調査票の作成、調査の実施、結果の処理、まとめといった一連の具体的な作業が予定されている。さらに、このような経営調査(実態調査)と、スポーツ経営学の理論を高めたり、確かめたりするための研究との違いや、その関係についても十分な理解が得られるよう配慮する。そのことが、次年度の卒業論文への取り組みにとってたいへん重要であると考えからである。

演 習 ⅡA・B (スポーツ法学)

濱 野 吉 生

演習ⅡAではまず、スポーツ法とは何かということから始める。次に、スポーツ法の主たる機能が、スポーツの自由を守ることと、スポーツの実践を希求する国民のための条件整備にあることを明らかにしたのち、その法源、すなわち法の存在形式について見ていく。そうした知識・理解を踏まえたうえで、現在、スポーツ法学が直面している多様な事例を紹介し、それらの中から、スポーツ権、スポーツ振興法、団体に対する助成、スポーツ・

クラブ、施設の民間委託、事故と法的責任の問題を取上げ、検討する。

演習ⅡBでは、スポーツ法学論文の書き方を習得したのち、卒業論文のテーマと概要を決定し、以後は各自が自由に執筆を進める。演習時には、その経過報告を聞き、論文完成についての個別指導を行なう。

演習ⅡA・B（バイオメカニクス）

鈴木 秀次

ここでは、身体運動の仕組みについて講義と実験をまじえて授業を進め、卒業論文作成に結びついた演習を行う。

ⅡAの前半は、身体運動におけるキネマティックス（動きの起こりを見無視し、正確な動きだけを描写、例えば、位置の移動、速度、加速度を問題とする研究分野）について、そしてⅡAの後半では、筋活動、キネティックス（動きの起こりを力に関連させて研究する研究分野）について演習する。

ⅡBでは、演習ⅡAでの演習をふまえ、卒業論文指導を行う。

テキストとして、Neuromechanical Basis of Kinesiology (Roger M. Enoka, 1994)を使用する。

尚、私は1996年の夏まで在外研究中です。この間の演習ⅡA・Bは平井直樹先生（杏林大学医学部生理学教室教授）が代講する。

演習ⅡA・B（栄養生理学）

太田 富貴雄

栄養生理学は、食物摂取や身体活動に伴う生体の代謝ないしは生理機能の変化と適応の仕組み、および栄養の摂り方が体力や疾病にどのような影響を与えるかを解明する学問である。本演習では、栄養生理学的立場からの調査・研究に必要な専門的知識と測定または化学分析の技術を習得し、更には卒業論文の作成に役立つように、以下の項目について実習ないしは解説を行う。

演習ⅡAでは、スポーツ栄養学の英文テキスト輪読、コレステロール・鉄など各種血液成分の比色定量、エネルギー消費量の測定原理と実測及び食物成分の生理機能と栄養価を調べる動物実験（卒論モデル実験）を行う。演習ⅡBではビデオ教材を用いて、スポーツ活動実習の栄養摂取のあり方、栄養と運動が健康・体力に及ぼす影響について学習し、実践的な知識を身につけるとともに、栄養とスポーツや健康に関する原著論文（主として外国雑誌）の講読と討論を行う。

演習ⅡA・B（スポーツ運動学）

土屋 純

スポーツ運動学については動作の正確な把握がまず最初に重要な意味をもつので、運動動作を質的、量的に記述することがその研究方法の中心となる。そこで用いられるのが、

運動モルフォロジー（形態学）といわれる運動の質的な分析方法と、バイオメカニクスの手法を用いた運動の量的な分析方法である。演習Ⅱでは演習Ⅰの内容をさらに充実させ、まずこうした運動動作の分析方法について実習を中心に進める。さらに各自が研究テーマを設定して、それに関連した文献を発表し、討議を行う。

演 習 Ⅱ A・B（体力科学と運動処方）

永 田 晟

〔演習Ⅱ A〕

スポーツ科学は古典的な学問分野を基礎とした総合的な境界領域の人間科学の一つである。この観点に立ってスポーツ科学が人間生活にいかに関与し、役立つかの具体的な方法を教示する。スポーツを科学する者としての資格と能力を陶冶できるように配慮し、スポーツのスペシャリストとして成長することを期待した演習である。他学問領域の研究手法も参考にして理学療法やマッサージなどの方法も実習する。そして論文の書き方を教授し、個々のテーマ選択によって独自で実験し、レポートしていく研究態度を養成する。リハビリテーション・センターやハンディキャップの人達への介助と介護に当たる実習を経験すると同時に運動処方やスポーツ療法についても演習していく。

スポーツ科学は人間科学の中の一つの学問領域であり、人間生活にいかに関与するのか、その役立つ具体的な方法と基礎的で科学的な手法を学習する。スポーツ科学者としての資格と能力を陶冶できるように体験と実習を重視する。以下に20週にわたる演習項目を列記する。

- 1 サルの解剖と関節可動域の基礎知識（4週間）
- 2 水中運動と流水プールの利用法
- 3 ボール・ゲームのスピード分析と DLT 法による動作分析
- 4 運動による自律神経機能の変化——ゆらぎとファジー理論
- 5 運動による末梢神経機能の変化——カオスとフラクタル理論
- 6 運動による末梢循環機能の変化——皮膚反射と血流量
- 7 スポーツ心臓のチェックと R・R 間隔のゆらぎ——CVRR の算出
- 8 脚パワーの測定とアイソキネティックなトレーニング法
- 9 シルエット法による基礎代謝量の算出法、形態と肥満の判定
- 10 水中体重法による体脂肪率の算出
- 11 エアロビックスとアナロビックス運動代謝量（RMR と METS）の効率比較
- 12 積極的休息法と呼吸体操によるストレス解消法——ヨーガと気功
- 13 電気刺激法による筋トレーニング——心理的限界と生理的限界の測定
- 14 サーモグラフィーとドブラー法の血流量計による末梢循環と皮膚温の変化——軸索反射と自律神経検査

- 15 各種生体信号のテレメタリング法の習得——遠方からの送信法
- 16 ウェルネスとフィットネスの運動処方プログラムの作成法——成人病を中心として
- 17 鍼灸法とスポーツ障害——筋痛やしこりへの対策法

〔演習ⅡB〕

卒業論文の作成法とその実験手法をコンパクトに説明し、希望する就職先への周旋と話し合いを中心とした演習である。卒業研究計画の作り方と論文の書き方をじっくりと説明し、多くの論文を読みこなしていく。そして、自由に個人別に研究テーマを設定し、個別に研究を進めていけるように配慮する。以下にその内容を列記する。

- 1 論文の書き方と研究仮設や実験計画法のたて方
- 2 研究方法とブロック線図や流れ図の書き方
- 3 コンピュータによる図表の作成法
- 4 コンピュータによる基礎統計法と検定
- 5 多変量解析法の初歩——主成分分析、重回帰分析など
- 6 動作分析(1)……ビデオフィルムによる三次元解析 (LDT 法など)
- 7 動作分析(2)……筋電図法と筋仕事量
- 8 動作分析(3)……張力や圧センサーによるキネテックな方法
- 9 メディカルチェックの方法——生活習慣と運動習慣
- 10 運動負荷試験(ストレステスト)のやり方
- 11 生理心理学的な方法(1)……誘発筋電図(H波とM波)
- 12 生理心理学的な方法(2)……GSRと皮膚抵抗
- 13 生理心理学的な方法(3)……自律神経と呼吸パターン
- 14 スポーツ姿勢と構えの特徴
- 15 カロリー算出式とエネルギー示性式のたて方……運動方程式とスポーツのゲーム分析(モンテカルロの方法)
- 16 スポーツ・マッサージなどの理学療法の実践
- 17 リハビリテーション・センターの見学と養護学校への体験入学……介助と介護の処方を覚える
- 18 理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、トレーナーとの交流と話し合い
- 19 スポーツ障害やスポーツ・リハビリテーション治療病院への見学
- 20 PNFとイエンドラシック・マニューバーのやり方と神経・筋促進効果

演習ⅡA・B(体格・体力とトレーニング)

加藤 清 忠

演習ⅡAでは、体格・体力を把握する一般的測定法を学習するとともに、トレーニングの指導者に必要な知識や各種の実技を習得するための実習を行う。具体的には、生体計測、

体力診断システムによる体力測定、サイベックスマシンを使つての測定法やトレーニング法、筋力トレーニング中の生体機能測定等であるが、実技ではストレッチング、エアロビックス、マッサージ、テーピング等を実施する予定である。また、後期には関連文献の調査・発表を行うとともに、卒業研究のテーマや方法について検討する。

演習ⅡBでは、トレーニングに関する文献（英文）の輪読を進めながら、トレーニングに対する理解を更に深めていく。卒業研究は、基本的には各自の方法に従って進めていくことになるのであるが、研究の方法や論文の作成法については適時学習する。後期には各自がその途中経過を報告し討論する。最終的には卒業論文の発表会を実施する。

演 習 Ⅱ A （身体運動の生理科学）

中 村 好 男

実習Ⅰで学習したB運動生理学の基礎知識と実験手技を充実させるとともに、研究能力を育成させることを目指して、具体的な研究演習を行う。前期は、予め用意されたテーマに従って実験を行う。これと平行して各自で興味をもった領域に関して研究問題を設定し、夏休み中に各自の立てた問題を整理したうえで、後期にはその手法を修得して研究概要を完成させる。

演 習 Ⅱ A （武道文化論）

志々田 文 明

前期は、演習Ⅰを発展させて近世の多様な武芸伝書を輪読し、武芸関連の思想を学習します。取り扱う予定の伝書は、生死を賭けた戦いという緊張状態での心の問題を扱った、禅僧・沢庵の「不動智神妙録」、三代将軍徳川家光剣術師範・柳生宗矩の「兵法家伝書」、また柔術師範・渋川時英「薫風雑話」などです。後期は主に近・現代の武道思想書（例えば哲学者ヘリゲルの「弓と禅」など）を採り上げます。ここでは受講者は分担箇所について出典の研究に基づいた和訳解説が義務付けられる。

また、広く歴史学的方法論と人文科学的な教養を身につけるため、指示した参考文献についてのレポート提出が前後期数回だされます。こうした作業をとおして人文・社会科学系の論文・レポートの書き方を体得するよう指導していきます。

演 習 Ⅱ A （スポーツ方法学）

葛 西 順 一

本演習は、演習Ⅰで学習した内容をさらに深く考究し、最終的には4年次卒業研究作成に直結する研究を段階的、計画的、発展的に行うことを目的として行う。

各種のスポーツの競技力向上に関わる指導方法（精神、体力、技術および戦術等）に関連して、多種多様な学術研究が過去になされている。これらから得られた重要な知見を実際の指導場面で応用しようという試みは、少なからず心ある現場の指導者によってなされている。

しかしながら、実践場面の指導方法に関連した実践的研究は数多くはないことから、心ある指導者であっても、自らの長期にわたって蓄積した指導経験、指導者どうしの経験交流およびセミナー等から得た知識を柱に独自の指導方法を構築しているのが現状である。

受講者は、自分がこれから生涯を通して深く関わっていききたいスポーツを一種目取り上げ、その研究テーマを絞った上で、研究テーマに添って自らの指導方法を構築するための柱を科学的な手法でうちたてることになる。

授業では、研究テーマに添った内外の文献を抄読し、卒業研究と有機的な関連を持つようにする。

夏期に、実際の運動場面における動作分析および呼吸循環系機能の対応を検討するための科学的手法を駆使した実習を計画している。受講者はこの実習に参加すること。

専門教育科目 (スポーツ科学科 選択)

社会構造論

長 田 攻 一

社会構造は、一方で人びとの行為によって支られえながらも、他方では人びとの行為を水路づけるという意味で、個人やその行為に還元されない独自の存在である。それは通常、役割、集団、制度、階層、体制などの諸レベルにおいて把握され、それら相互の関係や変動の要因、そのメカニズムばかりではなく、さまざまな社会現象と社会構造の関係が社会学の重要なテーマになってきた。

本講では、現代社会の集団間の相互依存関係や社会階層の現状などに特に注意を払いながら、自殺、犯罪、パニック現象など、さまざまな逸脱的行動と社会構造との関係についての諸説を概観し、社会構造の観点から現代社会の特質や問題点を考える方法を探ってみたい。参考文献などは、教場にてその都度指示する。

コミュニティ論

岡 野 静 二

まずコミュニティとは何かを、基本的に理解する。そして日本にふさわしいコミュニティの概念を把握する。その概念にてらして、日本の過去の地域社会に存在していたが現在失っているもの、現在の地域社会で始めて得たものなどを考える。そしてコミュニティ形成に必要な条件とは何かを知る。行政の役割、住民運動、ボランティア活動などについて、現状を把握し、それらの意義と役割について明らかにする。

スポーツ法学

濱 野 吉 生

ここではまず、スポーツ法学の基礎理論と構造について説明し、次に、スポーツ法学が直面している具体的な問題を適宜取り上げていきたいと考えている。

参考書については、授業のはじめに指示する。

スポーツ行政論

深 川 長 郎

1. スポーツ行政のねらい。2. 日本のスポーツ行政の現状。〈国および地方におけるスポーツ行政〉3. 世界のスポーツ界の組織と行政とのかかわりについて。4. スポーツ関連の諸法規等と行政との関係について。5. オリンピック憲章、アジアオリンピック評議会憲章、国際大学スポーツ連盟憲章等とこれに関連した行政について。6. ユネスコ等国際的諸機関のスポーツ行政への影響について。7. 将来のスポーツ施策の行政的取り組みについて。以上の現状をふまえて考察を進める講義内容とする。

公衆衛生学

町田 和彦

公衆衛生学は衛生学で一応基礎的な衛生・公衆衛生的な知識を身につけた学生が、実際に地域住民の中に入って保健指導をおこなううえでの重要な知識や方法論を身につけられるような講義内容をもつ。その意味では、公衆衛生学だけの選択はさけ、衛生学を必ず選択してほしい。

内容は、疫学、体力医学、栄養学、母子保健、成人保健、老人保健、産業衛生、地域保健、人口問題、医療問題、衛生統計、衛生行政、衛生法規等を予定している。

生理学

村岡 功

生理学は極めて広い分野を包括するものであり、ライフサイエンスの基礎学問の一つである。ここでは一般生理学の基礎を講義するが、目や耳から入った情報がどのようにして脳に送られるのか、脳から筋肉へどのようにして指令が送られるのか、等の疑問に答えながら、生物としての人間、即ちヒトの生命活動の基本現象を捕らえることとする。

衛生学

町田 和彦

病気を治療する臨床医学に対し、病気を予防し、健康の維持増進をはかる学問として、衛生学、公衆衛生学がある。今日、この二つの学問は明確に区別できないが、歴史的過程からいって、日本では衛生学は環境衛生、感染症等実験室内でおこなう研究が多いのに対し、公衆衛生学は地域医療の諸問題（母子保健、学校保健、成人保健、精神衛生、産業衛生等）や人口問題、衛生行政等、直接地域住民の中に入り、健康問題の改良にとりくむ研究が多い。本学の衛生学では衛生学を理解するためにまず医学の歴史と衛生学・公衆衛生学の医学の中に占める位置と重要性を学んだ後、環境衛生を中心にした講義を行う。主な内容として、感染症の疫学と予防、食品衛生、身近な環境問題（空気・水・居住環境）、地域環境問題（公害）、地球環境問題を予定している。

運動制御論

鈴木 秀次

運動制御は、中枢からの指令と脊髄反射によって制御される姿勢と動きについての学問である。我々動物が合目的な運動を行うためには、中枢神経系から目的に応じた運動指令を発するとともに、運動の結果が中枢神経系にフィードバックされて、反射的に調節されることが必要である。ここではスポーツ活動での身体運動に係わる神経系の調節機構の基礎となる随意運動と反射運動について概説する。

身体形態学（解剖学を含む）

加藤 清忠

ヒトのからだは「小宇宙」と言われるように、複雑で難解なものであるが、本講

座では進化の道筋を通してからだの歴史を辿るという「原形形態論」の観点から、その理解を少しでも深めていきたいと思う。したがって、中心テーマとなる骨や筋の運動器官系も、上記形態論の一側面である比較解剖学的立場から話を進めることになる。また、からだの基本の構造やロコモーション等についても人間の特徴という観点から概説していきたい。更に、われわれの「すがた・かたち」の問題（特にプロポーションや姿勢）に関しても言及するつもりである。

なお、テキスト・参考書については、授業中に指示する。

リハビリテーション

比 企 静 雄

人間の感覚機能や運動機能に一時的あるいは長期的に起きる障害に注目して、検査・診断の手法や、機能の修復・代行の可能性や、機能回復訓練の効果について、基礎的な知識を解説する。あわせて、検査・診断に使われる機器や、機能の修復・代行のための補装具や、機能回復訓練のシステムなどについても、技術的な進展を紹介する。さらに、リハビリテーションのためのこれらの医療技術の開発と、障害児の教育環境や障害者の福祉体制との係わりについても問題点を指摘する。

具体的な材料としては、視覚障害および聴覚障害を主に取りあげる予定である。

また、これらに先立って、リハビリテーションの基本的理念についても、ADA (The Americans with Disabilities Act)などを例にとり、様々な角度から検討する。

なお、この講義は人間科学部の3学科から共通に選択できるように、内容を設定している。2年次と3年次を対象にしている。

音楽理論・実習

大 池 美智子

講義では、視聴覚教材をできる限り多用しながら、次の5項目を概説する。

1. 音楽美について
2. 環境と音楽について
3. スポーツと音楽について
4. 音楽とイメージについて
5. テンポとリズムについて

実習では、イメージ・トレーニング、テンポ保持・トレーニング、身体によるリズム・トレーニング等を行なう。

学 校 保 健

坂 口 早 苗

学校保健は、保健管理と保健教育に大別される。保健管理は、主に学校保健法にもとづいて行われる管理活動であり、保健教育は主として学校教育法にもとづく教育活動である。

講義内容は、1. 学校保健概論 2. 健康診断 3. 小児に多い疾患 4. 長期欠席
5. 学校伝染病 6. 学校環境基準 7. 学校安全 8. 保健教育（性教育・禁酒教育・
禁煙教育・薬物教育・死の教育）

スポーツ工学Ⅰ

池 原 義 郎

学校・職場・地域社会などにおけるスポーツの競技あるいはトレーニングのための各種の施設について、競技者と観衆との両方の立場から必要とされる構造や機能を、建築工学的な種々な観点から、実例を参照しながら解説する。

また、スポーツのトレーニングに用いられる機器や、各種の競技に必要なスポーツ用具について、その使用方法や使用効果の問題点を、人間工学的な見地から検討する。

スポーツウェアについても、夫々の競技の種目に必要とされる運動機能性を実現するために、設計・評価において考慮されるべき要素を、身体形態学、材料工学、デザイン工学などの種々な面から分析して説明する。

スポーツ工学Ⅱ

比 企 静 雄

スポーツという対象に適用される工学的な研究の手法は、多様な学問分野にわたっているが、このスポーツ工学Ⅱでは、まず、人体の内外から加わる力の作用を解析するために必要になる、生体工学あるいはバイオメカニクスの基礎的な概念を説明する。

そのうえで、計測工学あるいは情報工学の立場から、人間の運動機能に関与する体格・体力や動作の特性を記録して分類・評価するための、多面的な測定器具・機器・システムについて、取扱いの問題点を指摘する。

電子計算機の利用による、測定データの統計的な処理や、画像解析や、運動のシミュレーションのためのモデル化の手法などについても、所沢構内の計算機の環境で可能な具体例を紹介する。

2年次と3年次を対象にしている。スポーツ科学科の専門教育科目の「スポーツ工学Ⅰ」の内容と相補うものである。

スポーツ方法論・実習Ⅰ（体操）

土 屋 純

学校体育の7運動領域の一つで必修となっている体操の理論および実技を行う。

ここでいう体操とは、学習指導要領にある通り以下の運動を指す。

ア. 身体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動

イ. 力強い動きを高める運動

ウ. 動きを持続する能力を高める運動

本授業ではこうした運動の具体例を紹介し、実習する。

スポーツ方法論・実習 I (陸上)

佐々木 秀 幸

陸上競技は生み出された力とスピードを、いかに技術によってコントロールするかにある。このことを主としてバイオメカニクスの分野で解析しながら、実習においてはその科学的知識を応用して競技力の向上を体験する。

これらの実習をとおして、将来スポーツ指導者として活用できるトレーニング法、コーチング法を習得する。

スポーツ方法論・実習 II (陸上)

佐々木 秀 幸

実習 I から更に発展して、歩・走・跳・投のそれぞれの陸上競技種目の基本技術とその関連を実習によって体験し、各種目への展開とその方法についての具体的な検討を行って行く。

特にトレーニング・プランの立案を実践を重点とした講義と実技を展開して行く。

スポーツ方法論・実習 I (バレーボール)

矢 島 忠 明

バレーボールは、学校体育の教材ならびに部活の一つとして重要な役割を果たしている。と同時に社会スポーツ、職場スポーツとしても広く愛好されている。さらにまた、国内・外ともに、ポピュラーな競技スポーツとしても目ざましい進展を遂げている。このようにバレーボールが幅広く活用されてきているのは、総合的な体力を高めながら、ボールコントロール、ボディコントロールなどの能力を高めて、チームプレーに還元するコミュニケーションスポーツの役割をも果たしているからである。

本授業では、理論的な裏づけを基に、基本動作及び技術を確実に身につけると同時に、バレーボールの効果的な指導の手順、方法を修得し、加えてルール、審判をはじめとして試合の運営等について学習する。

〔テキスト〕：西村書店発行の『ボールゲームバレーボール』を使用する。

スポーツ方法論・実習 II (バレーボール)

矢 島 忠 明

方法論 I で習得した基礎的な技術を確認しながら、バレーボールの身体運動上の特質を理解し、さらに、科学的知識を加えて応用技術に結びつける。

ゲーム展開していく上で必要な戦術及び作戦の立て方の研究やVTR、スライドなどの視聴覚を十分に活用して、より高度な練習やゲームへと発展させる。これらが指導の現場において役立てられることを前提で学ぶ。

テキスト：西村書店発行の『ボールゲームバレーボール』を使用する。

スポーツ方法論・実習 I (バスケットボール) A・B

五 三 健

バスケットボールの技術構造を理解しながら、ゲームに必要な基本技能（特にいろいろなシュート）および技術、応用技術等を確実に修得することを目指す。

この講座では、最初基本的なシュートを学習する。次に集団的技能を中心に展開し、その様相から課題を見付け出すことにより個人的技能の向上を計り、ゲームに連結させて行く。同時に、理論的な裏付けを基に、将来役立つバスケットボールの効果的な指導法を身につけるようにする。

理論の実践を中心に実技指導を行うが、学校体育の教材やクラブ活動の一つとして、主要な役割を果たしているバスケットボールの楽しさや教育的価値、歴史・ルール・ゲームの進め方などについても、ビデオを併用して講義する。

なお、教育実習予定者は3年時までに履修することが望ましい。

スポーツ方法論・実習 I (バスケットボール) C

伊 藤 順 蔵

バスケットボールの技術構造を理解しながら、ゲームに必要な基本技能（特にいろいろなシュート）および技術、応用技術等を確実に修得することを目指す。

この講座では、集団的技能を中心に展開し、その様相から課題を見付け出すことにより個人的技能の向上を計り、ゲームに連結させて行く。同時に、理論的な裏付けを基に、将来役立つバスケットボールの効果的な指導法をも身につけるようにする。

理論の実践を中心に実技指導を行うが、学校体育の教材やクラブ活動の一つとして、主要な役割を果たしているバスケットボールの楽しさや教育的価値、歴史・ルール・ゲームの進め方などについても、学んで貰う。

なお、教育実習予定者は3年時までに履修することが望ましい。

スポーツ方法論・実習 II (バスケットボール)

伊 藤 順 蔵

スポーツ方法論・実習 I (バスケットボール) で履修した、ゲームに必要な基本動作および技術、応用技術に更に習熟することを目指す。すなわちシュート・パス・ドリブル・リバウンド・ディフェンスの基礎技術を修得し、その連契プレーであるチーム・オフENSとチーム・ディフェンスにまで発展して、実習する。その間にチームづくりや、指導法について勉強することにする。

スポーツ方法論・実習 I (ラグビー)

日比野 弘

ラグビーはチームスポーツである。15人のメンバー全員が、ルールと攻防理論を熟知し、自らの役割をまっとうしたときに、勝利の喜びを味わうことができる。

この講座では、ラグビーの基礎的知識と、将来役立つ指導法を身につけることを目的と

する。

経験の有無、技術の上手、下手にかかわらず、スキルの向上を目指すもの、レフリー、コーチを志望するもの、教員としてラグビー経験を取り入れようとするものなど、巾広い層に受講してほしい。女子の参加も大歓迎である。

理論の実践を中心に実技指導を行うが、雨天の際には、ラグビーの歴史、戦術論、ルール解説、ゲーム分析など、ビデオを併用して講義する。

(初回はオリエンテーション。筆記用具持参)

スポーツ方法論・実習 I (サッカー)

安田 一 男

本授業においては、サッカーを行う上で不可欠な技術、戦術、体力の三つの要素を個々に分析し、その内容、能力の高め方、相互の関連性についての理解を深める。また、それをプレーとして表現できるように実技を行っていく。

さらに、サッカーのルールや試合の進め方、歴史と現状、スポーツの中でのサッカーの位置づけ、サッカーの教育的価値などについての講義も合わせて行う。

スポーツ方法論・実習 II (サッカー) (本年度休講)

加藤 久

スポーツ方法論・実習 I (柔道)

小野沢 弘 史

柔術から発展した柔道は、日本民族が生んだ世界に誇るべきスポーツ文化である。

柔道の特性をふまえ、基礎的・応用的技能の体得と、楽しく意欲的で、かつ個人差(技能、体力、経験、性)に応じた安全な練習法、指導法の習得を目指す。さらに、柔道の技術構造、ルール、審判法などを学びながら、柔道の根源を追求してその背景を求める。

スポーツ方法論・実習 II (柔道)

小野沢 弘 史

スポーツ方法論・実習 I (柔道) で履修した技能の向上をさらに図り、体力差、技能差や経験差などをふまえ安全に自由練習が出来るようにする。また、初心者に対する効果的な指導法についての理解を深める。

初段程度の技能に到達することを努力目標として「投の形」も学ぶ。

スポーツ方法論・実習 I (剣道)

安藤 宏 三

竹刀を媒体とした打つ、突く、捌く等の対人攻防技能の習得を通して剣道の理解を深める。

男女共に初心者は基礎から導入し、簡易な試合や審判ができるよう指導する。

準備するもの (第1週目に説明するので必ず出席すること。)

・服装：剣道着、袴またはトレーニングウェア上下 (長袖、長ズボン)

- ・テキスト：安藤宏三著『目で見る剣道上達法』（成美堂出版）
- ・その他：手拭，名札，竹刀（カーボンシナイが望ましい）

スポーツ方法論・実習 II（剣道）

安藤 宏 三

本講座はスポーツ方法論・実習 I（剣道）を履修した者を対象とする。日本剣道形及び初心者の方の指導法を学ぶ。

準備するもの

- ・剣道用具（剣道着，袴，木刀）
- ・テキスト：安藤宏三著『目で見る剣道上達法』（成美堂出版）

スポーツ方法論・実習 I（ダンス）

杉 山 千 鶴

身体各部のストレッチと基本ステップにより，柔軟性を高めると共に自己の身体を細部に至るまで認識し，表現手段としての身体づくり，実際に踊る際に必要不可欠となるボディ・コントロールと空間の把握の習得を目指す。また，小品の練習により，リズム感を養うと共に自由な表現・創造性を追求する。更にクリエイティブな活動や舞踊公演の観賞も行い，1年間を通じて「踊る」「創る」「観る」のダンスのトータルな体験をする。

尚，1回目の実技は更衣不要。但し筆記具持参のこと。

スポーツ方法論・実習 I（ニュースポーツ）

竹 中 晃 二

近年，我国では，子どもから大人，そして高齢者が生涯を通して行えるように，勝敗にこだわらない健康作りや楽しみを目的とした「生涯スポーツ活動」が奨励されてきた。これら生涯スポーツの種目として，体力や性，年齢に関わらないで誰もが行うことができる多くのニュースポーツが誕生している。しかし，実際には，ニュースポーツを行う対象は主婦や高齢者など勤労者以外の者に限られている。一方，会員制スポーツクラブにおける個人の体力に応じた運動処方（処方）は勤労者に人気が高く，我国の生涯スポーツ活動の実践は二重構造を呈していると言える。

今や，文部省を中心とする官主導の生涯スポーツ活動にも新しい視点が必要となっている。たとえば，高齢者にとってスポーツを行う意味は，人生の充実感とも言える Quality of Life の向上の他に，自分一人の力で生活を営んで行くことができる体力，すなわち生活体力の維持である。高齢化社会の先進国である米国の高齢者は，ウォーキングやジョギングなど有酸素運動ではなく，従来高齢者には危険とされてきた筋力トレーニングを行うようになってきた。この現象は，自立意識の必要な高齢者が，日常の生活を自分自身で行えるだけの筋力の必要性を実感していることを示しており，高齢化社会を迎えようとしている我国の生涯スポーツ推進活動に指針を与えていると言える。

本スポーツ方法論・実習は、ペタング、ゲートボール、ソフトバレーボールなどのニュースポーツ種目を単に紹介するだけではない。現代社会におけるスポーツ活動の意義を、その心理・生理的効果を確認し、それぞれのライフ・スパンに応じた身体運動・スポーツ活動の内容を論議しながら、人々にスポーツをどのように提供していくかを考える機会としたい。実際には、講義と実技、そしてグループワークを絡めた授業を展開していくつもりである。そのため、評価は、グループワークおよびそのレポートの内容によって決定される。もちろんグループワークを行うために、授業に出席することがその前提である。

スポーツ方法論・実習 I (筋力トレーニング)

岡田 純一

スポーツ選手の補強運動を中心として筋力トレーニングは普及してきたが、最近ではリハビリテーションをはじめ、中高年者の健康の維持増進など幅広く応用されている。本実習ではトレーニングプログラムの作成や管理なども含め、基礎的な種目の習得を目指し、筋力トレーニングを実践していく。また後期には応用種目についても学習する。主な内容を以下に示す。

1. 基礎トレーニング種目の修得

フリーウエイトトレーニング、マシントレーニング

クイックリフト (ハイクリーン、スナッチ)

2. 応用種目とトレーニングシステムの実践

フリーウエイトの応用種目

サーキットトレーニングなど

3. 目的・対象別のトレーニング法

ジュニア、中高年者、健康・体力づくり、競技力向上のためのトレーニング

スポーツ方法論・実習 I (器械運動) A

船戸 徳郎

学校体育において必修の一つである「器械運動」領域の理論と実技を行う。

この授業は、個人スポーツの特性を生かし個々の能力に応じた運動技術の習得、習熟を目指し、その体験学習の過程でスポーツの本質である喜びや楽しさを理解しながら個々の持つ課題を解決できるよう指導する。

同時に学習者側の立場のみではなく指導者側の立場にたって、その指導法の理論と実習も行う予定である。

具体的には以下の種目を扱う

1. マット運動

2. とび箱運動

3. 鉄棒運動

4. 平均台運動
5. トランポリン
6. その他

服装は、可動性の大きい運動着上下、体操シューズ

スポーツ方法論・実習 I（器械運動）B

土 屋 純

学校体育の7運動領域の一つである器械運動の理論および実技を行う。

具体的には以下の4つの運動についてそれぞれ課題となる「技」を設定し、技術の習得・習熟をはかる。

1. マット運動
2. 鉄棒運動
3. 平均台運動
4. 跳び箱運動

各運動で課題となる技は授業のなかで指示する。

スポーツ方法論・実習 II（器械運動）

土 屋 純

スポーツ方法論・実習 I（器械運動）の内容を発展させ、「マット運動」、「鉄棒運動」、「跳び箱運動」、「平均台運動」の各運動において、より難度の高い「技」を習得し、その指導方法を学習する。

また、高等学校学習指導要領体育科において取り扱われる「体操競技」について、各器械種目の基本的な「技」を経験する。

スポーツ方法論・実習 I（水泳）

矢 野 正 次

水中運動の一つである水泳は、夏季の限られた期間に屋外で実施される運動種目であった。

今日では、屋内プールの普及によって年間を通して行える運動種目になっている。年齢、性別に関係なく、またハンデキャッパーでも、医師等の指示によって実施が可能である。当科目では、各自の水泳能力を高めることは勿論、水泳に対する知識を学び以後の活動に役立てることを期している。

スポーツ方法論・実習 I（軟式テニス）

林 敏 弘

軟式テニス（国際普及の進展にともない、現在は国内外においてソフトテニスと呼ばれている）は、軽いゴムボールを使用して行うダブルスが主体（シングルスもある）のスポーツである。

本授業では、基礎技術としてのグランドストローク、ボレー、スマッシュ、サービスを練習した後、試合を数多く経験してもらう。

試合は国際競技規則をベースに行うが、長い歴史を持つ日本競技規則での試合もあわせて理解し、体験してもらう。

どちらのルールでの試合においても、ソフトテニスの基本であるダブルスのコンビネーションプレーを主体的に修得してもらう。

スポーツ方法論・実習 I (硬式テニス)

宮 城 淳

近年、社会的な要請として積極的に『やるスポーツ』の必要性が高まり、誰もが生涯を通じて楽しめるスポーツを身につけることが望まれている。テニスは老若男女を問わず、しかも国際性豊かな競技であり、これらの要請に応えるスポーツとして最適であり、この授業ではテニスを通じて人間資質を高めることを目的とする。内容としては基礎実技のマスター、ストローク理論、マナー、ルール、審判法、及び戦略理論の修得を目標とする。

スポーツ方法論・実習 I (卓球)

葛 西 順 一

卓球は、長さ274cmの卓球台に2人あるいは4人のプレーヤーが対峙して、初速が126km/hに及ぶボールを打ち合って勝敗を争う競技である。また、ボールがセルロイド製で質量が小さいため（重要は約2.4g）、ラバーの摩擦によって種々のスピン（トップ・バック・サイド）が生じる競技特性がある。すなわち、卓球はきわめて短い時間の中で、スピードとスピンに対応しなければならない競技特性をもっている。

卓球競技で最も重要なポイントは、相手の打球直前までの様々な情報を認知した上で、相手の打球のスピード、スピン、打球方向を予測し、打球のための最適な位置と姿勢をとることにある。

本実習では、卓球のゲームを構成する基本的な公式ルールと技術、サービス、レシーブ、フットワーク、指導方法等をマスターすることを目標として、生涯を通じてプレー可能な自分流のスタイルを確立してもらう。

スポーツ方法論・実習 I (バドミントン)

関 一 誠

バドミントンを生涯スポーツの中のいち競技として位置付け、学校体育・社会体育等の場における技術理論、指導法を体系的に講じる。

また、上記をふまえて、バドミントン遊びから、バドミントン競技に至る技術習得過程や、個人差（技能、体力、年齢、性）等の対象に応じた指導実習を行う。

実習にあたり、次の用品を各自で準備すること。

選手用ラケット、運動着、運動靴。なお、一回目の授業は、オリエンテーションを行う。

スポーツ方法論・実習 I (ソフトボール)

吉 村 正

平成4, 5, 6年から, ソフトボールは, 小学校(5, 6年), 中学校, 高等学校で選択必須になった。これは, サッカーとともに, 学校体育の球技の中で最も重要視されている証である。

生涯スポーツとしてのソフトボールも, 総理府の調べで分かるように, 過去10年間, バレーボールや軟式野球を抜いて, 日本1の競技人口を誇っている。

このように, ソフトボールは, 学校体育のみならず, 社会体育の場でも, 広くプレーされているのである。

本授業では, 小・中・高ではどのようなソフトボールを, 正課体育や課外活動の場で教えるべきか, また生涯スポーツとしてのソフトボールはどうあるべきかなどを学習する。

〔参考書〕: 吉村正著『現代ソフトボールの戦法』全4巻(ベースボール・マガジン社)

スポーツ方法論・実習 I (スキー)

佐 藤 千 春

この授業においては, スキーについて何でも知っているということ, すなわち, 知ることと, 良く滑れるということを目指したい。しかし, そうは言っても時間には限りがある。従って, いわゆるスキーに関する基礎的な部分を大事にして, その部分から進めることができるところまで, 積極的に授業を進めたい。後期9月になってから毎週1コマずつ授業を行い, 雪が降ったならば3泊4日の雪上の集中授業を行う。後期併合型の授業ということである。この授業に関しては, 掲示によって, いろいろな伝達を行なうから, その点十分に注意するよう望みたい。

スポーツ方法論・実習 I (スケート)

伊 藤 順 蔵

期間 12月18日(水)~12月23日(月)

教場 日光スケートセンター

説明会 11月中旬に実施予定。掲示で日時をしらせます。

実習, スケート経験歴と, スケート技術を基準にして, 初心者から上級者までのグループに班別して行なう。

実習する基礎技術は, フォワードスケーティング, スカーリング, スネーク, クロッシング, バックワードスケーティング, ストップ, ターンなどであるが, それが確実に行えるようになったら, フィギュア・ホッケー・スピードにチャレンジしたい。

スケート靴は, 上達・安全面のうえから, 自分の靴を持って欲しい。

なお, 宿舍の確保や貸しきりリンクのために必らず参加する人が選択して欲しいと思う。

スポーツ方法論・実習 I (レスリング)

太田 章

本授業は、アマチュアレスリング競技について、特に初心者、女子にもわかりやすくその方法を指導し、フリースタイル及びグレコローマンスタイルの理論及び実技を行なう。

スポーツ特論・実習 (水泳)

矢野 正次

体育・スポーツの指導者として、水中運動の一つである水泳は、欠くことのできない必須条件と考える。単に泳げることばかりでなく各種泳法にも優れた技能と知識を持たなければならない。

当科目では、水上安全をふまえて水泳を総合的に研究、実習する。将来、学校体育・社会、職場体育の場合は勿論その他の分野での実践を期している。

スポーツ特論・実習 (ウェイトリフティング)

岡田 純一

本科目ではトレーニングの実践およびその自己管理プログラムの作成を中心に学習を進めていく。後期には生理学的あるいはバイオメカニクスの手法によって、自己のウェイトリフティング動作やトレーニングが身体に与える影響について分析する。

スポーツ特論・実習 (体操競技)

船戸 徳郎

体操の歴史、基礎理論、指導技術、審判技術、補助技術などの理論と実習を行う。

スポーツ特論・実習 (陸上競技)

佐々木 秀幸

陸上競技技術の科学的な組み立てを理解しそれを修得して指導法を深めるための実習である。また将来、中学校・高等学校の教員や社会でのスポーツ指導者として陸上競技の指導、コーチングにたずさわる者のために、陸上競技の高度の専門技術を実習する。

1. 個別性による競技力の分析
2. ハイレベルのトレーニング法とコーチング法
3. 児童、生徒の発育発達に応じた動きづくり。

スポーツ特論・実習 (柔道)

小野沢 弘史

柔道の技能を高めるとともに、「投の形」と「固の形」の習得を計る。また、練習法、トレーニング法、審判法、コンディショニング、そして部活動における指導法についての理論も併せて学ぶ。

スポーツ特論・実習 (剣道)

安藤 宏三

本講座では、将来、学校、地域及び各種の団体における剣道の指導者となることを目指す。

す剣道部部員を対象とする。

高度な剣道技術の習得と合わせて、日本剣道形、指導法、審判法、大会の企画や運営の方法等についても学ぶことをねらいとする。

準備するもの

○剣道用具一式（剣道具、竹刀、剣道着、袴、手拭、名札）

○テキスト：安藤宏三外共著『グラフィック剣道』（大修館書店）

スポーツ特論・実習（レスリング）

太田 章

本授業は、アマチュアレスリング競技について、FILA（国際アマチュアレスリング連盟）のルールに基づく、フリースタイルと、グレコローマンスタイルの理論及び実技を行う。

スポーツ特論・実習（ボクシング）（本年度休講）

林 敏 弘

スポーツ特論・実習（野球）

西大立目 永

学校教育の中での課外活動として専門的に学んできた野球の技術や知識に対して、再度検討を加え、練習法・戦術論・規則や審判技術の利用法などにスポットを当て、各々の見地からさらにより良い競技力を修得するにはどうすれば良いのかという方策を学習してみたい。

スポーツ特論・実習（ソフトボール）

吉 村 正

ソフトボールは、レクリエーション的に楽しむ方法と競技的に行う方法があることを、プレーしながら理解させる。

また、これに加えて、全受講性に対して、ファーストピッチ特有の専門的技術であるウィンドミル投法と左打者の反対打ちを習得させる。

ただし、雨天の場合は、ソフトボールの本質や歴史、あるいは審判法や記録のとり方等を講義する。

〔テキスト〕：吉村正『ソフトボール教室』（大修館書店）

〔参考書〕：吉村正著『現代スポーツコーチ実戦講座15、ソフトボール』（ぎょうせい）

スポーツ特論・実習（テニス）

宮 城 淳

近年、社会的な要請として積極的に「やるスポーツ」の必要性が高まり誰もが生涯を通じて楽しめるスポーツを身につけることが望まれている。テニスは老若男女を問わずしかも国際性豊かな競技でありこれらの要請に応えるスポーツとして最適であり、この授業ではテニスを通じて人間資質を高めることを目的とする。内容としては中級～高度の実技の修得、ストローク理論、マナー、ルール、審判法及び初心者から中級者までの指導法の修

得を目標とする。

スポーツ特論・実習（軟式テニス）

林 敏 弘

軟式テニス（ソフトテニス）において高度の技術水準に達している諸君に，ソフトテニスの合理的練習方法，試合での戦術（ルールの改正にともなう新しいコンビネーションプレー），国際ルールと日本連盟ルールの正しい理解などについても学習してもらう。また，とかく選手からは軽視されがちな「審判の要領」についても修得してもらう。

スポーツ特論・実習（卓球）

森 武

まず，理論的にも技術的にもできるだけ高度の次元に到達できることを目標としたい。もちろん，目的やレベルによって多角的な指導法をとっていく。たとえば，レクリエーション的な分野での指導法，学校体育の授業や，コーチ・顧問としての指導法，さらには日本代表チームの指導者となる場合なども含めて考えている。その他，ルールと審判法，また大会運営法（公認資格取得を目的としたもの）など現実に役立つものもとあげたい。

スポーツ特論・実習（バドミントン）

関 一 誠

競技バドミントンは，1対1，2対2で行われるスポーツで，個々の技術，体力，戦法がトータルで成されなければならない。これらの要素について科学的に分析・解明し，競技力の向上を計る。

また，バドミントンの身体運動理論，歴史，ルール，指導用語，審判法，マナー等々を学び，コーチング論を確立してもらう。

スポーツ特論・実習（バレーボール）

矢 島 忠 明

競技スポーツとしてのバレーボールと，レクリエーションスポーツとしてのバレーボールの違いについて学ぶことを基調として，ここでは，特に競技スポーツの観点からバレーボールを捉え，身体運動に関する科学的知識・分析などを学び，チームや個人技能に応じた適切なプログラムを組み立てて，高いレベルを目指して，それを実習する。これをもとにして，バレーボールのコーチングなどに役立つことを前提に授業を進める。実技と共に文献学習やビデオ教材の利点を生かした戦術・戦法などの研究も同時に行う。

スポーツ特論・実習（バスケットボール）

伊 藤 順 蔵

クラブ活動で培ったバスケットボールの能力・技術を高め，組織的な攻撃と防御を展開する力を養うとともに，試合に勝つために，どのような計画と準備が必要であるかを考え，体験して貰う。

そのためには

1. 基礎技術のグレードアップ
2. コンビネーションプレーへの習熟
3. チームプレーの確立
4. チームづくり

練習法・指導法など、個性を生かすチームづくりを計画し、その結果を驗すためにチームを指導する。

5. 審判法
6. バスケットボールについて、自らよく研究し、ユニークな自論を理論づける。

スポーツ特論・実習（ラグビー）

日比野 弘

ラグビーの攻防理論、戦術、ゲーム分析法、ルール、歴史などを研究し、各人の競技者としての力を向上させることを目的とする。あわせて、将来、指導者としても貢献できるように、ラグビーのトレーニング、コーチング、レフリングの研究も行なう。

スポーツ特論・実習（サッカー）（本年度休講）

スポーツ特論・実習（スキー）

佐 藤 千 春

スキー技術、およびスキー技術に関するいろいろな運動について、科学的に研究することが、この特論の主目的である。しかし、スキー技術と言っても、余りにも幅広い内容をもつ。そこで、とりあえず、基礎的なものをよく絞り込んでこの特論の内容としたい。もう少し具体的に言うならば、全日本スキー連盟の提唱している基礎スキー部門からスタートして、いろいろ興味深いテーマを掘り起こしてみたい。教職を希望するもの、あるいは技術指導を志すものにも有効な授業となるようにしたい。雪のない季節には、スキー技術に対するトレーニング理論とその実習、および指導についての考え方、指導法などについて、授業のなかに組み込んでいきたいと考えている。

スポーツ特論・実習（スケート）

伊 藤 順 蔵

基礎技術として、フォアスケーティング、スカーリング・スネーキング、クロッシング、バックスケーティング、ストップ・ターンをマスターするとともに、スピードスケーティング、アイスホッケー、フィギュアの各競技種目の初歩の技術修得した後、各競技種目の技術研修に励むとともに、バジテストなどに挑戦する。

あわせて、スケートの歴史、スケートの手入れ法、競技の見方、カリキュラムなどの指導計画のたて方、指導法・評価法などを学ぶ。

スポーツ史

寒川 恒夫

スポーツの起源から今日に至る発展史を、未開社会、古代、中世、近代、現代、にわけて講義する。参考書には『図説スポーツ史』（朝倉書店）を使用する。

コーチング論

(A) 佐々木 秀 幸

(B) 日比野 弘

スポーツにおけるコーチングの基礎理論とその応用について、Aでは個人的スポーツを、Bでは集団的スポーツを対象にして、具体例をあげながら解説する。

主に次のような内容を取りあげる予定である。

1. コーチングシステム
2. 体力と技術の相互関係
3. 指導者に必要な観察力
4. トレーニング計画とトレーニング管理
5. 勝敗を決定する要因
6. その他、競技力向上のためのコーチング諸問題

測定評価論

上 田 雅 夫

永 田 晟

現代において、運動・スポーツを指導する者に要求されることは、科学的に裏付けられた指導法である。そのためには、指導者はさまざまな問題点を客観的に測定評価することが不可欠となろう。

ここでは、前半を永田が分担し、統計法、資料収集の方法、論文や報告の書き方について指導をし、後半は上田が分担し、質問紙やテストの作成法ならびに心理学的アセスメントについて指導をおこなう。

参考文献などはそのつど指示する。

測定評価演習

宮 内 孝知他

本演習は、主に教員免許状取得希望者に設置されたものである（教員免許状の学部指定必修科目）。学校教育現場では、様々な測定とそれに基づく評価が求められる。本演習は、そうした要望に対処するため、主として保健体育の教科で必要な測定と評価を、①身体計測等に関わる領域、②体力・運動能力等に関わる領域、③運動技能等に関する領域に分け、それぞれの担当者が演習を行う。

武道概論

志々田 文明

今日、武道という言葉は、一般に柔道や剣道など日本古来の運動文化ないしは運動技術を表わす総合名称として用いられているが、このような用法は明治時代の末以降のことである。江戸時代には武道は武士道ないし士道と同意語に使われていた。この講義では、武道を考察する際の原点としてそれらの用法の変遷をふまえつつ武道の精神性（倫理道德的あるいは求道的）及び技術性などの文化的特色をみていく。それらの特色から、現代行なわれている武道を考え、今後のあり方を考えていきたい。

（教科書：富木謙治『武道論』，大修館書店，参考書：宮本武蔵『五輪書』，岩波文庫）

ダンス概論

杉 山 千 鶴

舞踊学の全体像を把握する。歴史において舞踊にとって必要不可欠である身体や女性に対する評価がいかに変容したかについても言及し、最終的には社会における舞踊の役割と機能について考える。

〔教科書〕：

舞踊教育研究会編『舞踊学講義』（大修館書店）

原書講読演習

竹 中 晃 二

本演習の目的は、身体運動の心理・生理的效果を欧米の文献から学ぶことである。英文文献の読解能力の向上の基は、もともとの読解能力は最低限求められるものの、いわゆる「英語の成績の善し悪し」ではなく、トレーニングそのものである。そのため、英文文献の数を多く読み、全体の内容を把握し、一語一語の単語や和訳にこだわらないことが肝要である。しかし、そこには「楽しみ」の要素が不可欠である。欧米の文献を読むことを楽しむためには、内容に対する興味が最低限必要となる。その意味で、受講者は、以下の本のタイトルが、自分の興味と一致するかどうかを十分検討して受講してほしい。

本演習では、「数を多く読む」という目的からも、受講者一人が読む量はきわめて多い。その意味で、内容が「好きになりそうかどうか」を受講の判断の基準にしてほしい。

評価は、テストや出席ではなく、数を読む努力度による。もちろん、出席しないと努力も見れないが……。

以下の本およびジャーナルの中から受講者に応じたものを抜粋し、教材とする。

Seraganian, P. (1993) Exercise psychology : The influence of physical exercise on psychological processes. John Wiley & Sons Inc.

Sandweiss, J.H. & Wolf, S.L. (1985) Biofeedback and sports science. Plenum Press.

Lehrer, P.M. & Woolfolk, R.L. (1993) Principles and practice of stress manage-

ment, second edition. The Guilford Press.

その他、身体活動の心理的效果（不安低減やストレスマネジメント効果など）を扱った最近の学術論文（Psychosomatic Medicine, Journal of Psychosomatic Research, Health Psychology など）。

社会調査 I

宮内孝知

社会科学が扱う社会現象を把握するには、要因の人為的統制や刺激の人為的導入が不可能ないしは極めて困難であることから、実験を行なうことは希であり、調査が主要な研究方法となる。本講義では、社会調査を概説するとともに、質問紙法を中心にその方法を論じる予定である。なお、スポーツ社会学演習選択者はできるだけ2年次に選択すること。

社会調査 II

寒川恒夫

伝統的社会における民族スポーツ（エスニック・スポーツ）の調査方法について学ぶ。地域は、日本をとりあげる。教材はそのつど配布され、また映像資料が用いられる。

専門教育科目 (各学科共通 選択)

哲学的人間学Ⅰ

北 村 実

「人間」は生物の一種であるが、しかし他の生物とは質的に異なる特質を持っている。「(自然) 人類学」が動物学の一分科として人間を研究していくのに対して、それだけではとらえきれない「人間」の特質を総合的に考察していくのが「哲学的人間学」である。講義では、広い視点から「人間」を見つめ直し、「人間」とは何か、という古くて新しい問への私なりの答えを出してみたい。

哲学的人間学Ⅱ

北 村 実

人間と他の動物の決定的な違いの一つは、行為を選択できるか否かにある。選択の自由、意思の自由について、代表的な見解を概観し、人間としての自覚を深めよるよすがとしたい。

言語・記号論

本 郷 均

この講義では、言語および記号現象の原理的・理論的側面を主として検討する。一般に記号論は、ソシュールの流れをくむものと、パースの系譜に属するものがあるとされているが、ここでは、主に前者に焦点を絞る。ソシュールの言語学から始め、メルロ＝ポンティを経て、R.バルトの記号論(学)について論ずる。時間があれば、J.クリステヴァやJ.デリダの考えなどにも触れたい。

教科書は使用しないが、適宜資料を配布する。

民族文化論

吉 村 作 治

20世紀末から21世紀にかけて世界は民族を中心に動くと予想される。民族という概念は難しい部分が多々あるが、言語、習慣など今日の私たちの世界観をつくる上で重要である。この講座では民族を文化の面から考えてみようというもので、特に食文化を中心に考察していくつもりだ。食文化は環境が大変重要であり、又文化の交流によって古代の食習慣が全く変化してしまう場合もある。そして宗教もその影響を大きくしているのは、タブーという形式を見ても明らかである。それらを総合的に検証する為、VTRやスライドなど映像を利用しながら進めていく予定。

認知理論

横山 詔一

認知をめぐる諸研究は、心理学・言語学・人類学といった範囲にとどまらず脳科学や計算機科学の領域においても活発に展開されている。その内容は多岐にわたり、全体像の把握には困難を伴うと思われるが、本講では言語認知の側面から種々の代表的理論をできるだけ分かりやすく、簡単な実験の実演をまじえながら解説していく。テキストについては講義の中で指示する。

人格心理学

上里 一郎

人格心理学 (Psychology of Personality) とは、ひとりの人間をどのように捉え理解するかという総合的な学問である。ここでは、以下のようなテーマを取り上げ考える素材を提供する。

- 第1回 人格心理学とは何か
- 第2回 パーソナリティの理論(1)ー精神分析(1)
- 第3回 パーソナリティの理論(1)ー精神分析(2)
- 第4回 パーソナリティの理論(1)ー精神分析(3)
- 第5回 パーソナリティの理論(2)ー類型論
- 第6回 パーソナリティの理論(3)ー特性論(1)
- 第7回 パーソナリティの理論(3)ー特性論(2)
- 第8回 パーソナリティの形成(1)ー遺伝と環境 (総論)
- 第9回 パーソナリティの形成(2)ー野性児の症例
- 第10回 パーソナリティの形成(3)ー強制収容所体験(1)
- 第11回 パーソナリティの形成(3)ー強制収容所体験(2)
- 第12回 パーソナリティの形成(4)ー文化と精神障害
- 第13回 パーソナリティの形成(5)ー多種人格(1)
- 第14回 パーソナリティの形成(5)ー多重人格(2)
- 第15回 人格心理学はひとに何を教えるのか

教育心理学 I

佐々木 正人

「からだ」、「こども」、「おとな」、「社会」といった教えることの場を構成している諸要素のシステムの結びつきとして教えることを捉え直してみたい。こどもの社会史、, 記号論、生態学的認識論、認識の発達理論、教育の認知人類学などの成果から、教えること、学ぶことの本来の姿について議論したい。『アフォーダンスー新しい認知の理論』(岩波書店)を教科書に、『からだ：認識の頂点』(東大出版会)を参考書に指定する。

運動心理学

児 玉 昌 久

新しい運動を覚えたり、すでに覚えている運動の技術を高めようとする時、多くの要因がある原則に従って作用しあう。それら種々の要因や法則のうち心理学的な問題を取りあげて解明し応用してゆくのが運動心理学の目的である。運動技術獲得のメカニズムや法則性、技術向上を促進したり妨害する心理的要因や動機の問題、獲得した技術の十分な発揮を援けたり妨げたりするメンタル諸問題についての基礎的な面を述べる。

社会心理学

小 西 啓 史

本講義では、現代社会心理学の主要トピックスについて具体的な研究例をもとに解説する。主なテーマは以下のとおりである。

- ① 社会性の発達：社会性はどのように身についてくるのか。
- ② 規範の形成：判断の拠り所となる集団規範はどのようにしてできあがるのか。
- ③ 同調行動：なぜ自分の考えを主張せず他人に合わせようとするのか。
- ④ 援助行動：なぜ困っている人を助けないのか。援助行動を抑制する要因は何か。
- ⑤ 態度変容：態度はどのようなメカニズムによって変わっていくのか。
- ⑥ 空間行動：コミュニケーションにおいて空間の果たす役割はどのようなものか。

保健社会学

佐久間 淳

まず現代社会において生活の特徴にふれ、それらと健康、疾病（成人病など）との関係を説明する。ついで日本の医療社会史から、医療サービスの特徴にふれる。一方、日本人の健康や疾病に対する意識や行動について文化人類学、行動科学、統計的手法を用いた保健・医療社会学の解析・把握法を説明する。

内容は、健康増進、疾病に対する個人、集団による健康管理の機能など専門的なものであるが、具体的で身近な問題をわかりやすく講義するので、受講者は新たな視界が広まるであろう。

たとえば、歩行量と成人病との関係、東京都と大阪府の傷病や死因別死亡率、平均寿命の差の原因などに切りこむ。また、地域別自殺率とその社会的背景、都市と農村の死因や死亡率の地域比較分析など、自分の置かれている社会的状況への新しい視点による分析法を講義したい。

〔テキスト〕：佐久間淳著『保健福祉学入門』1993（大修館）

〔参考書〕： 〃 『かわる生活環境わかる保健福祉』1995（ミネルヴァ書房）

人間工学 I

石 田 敏 郎

人間工学の基本的な考え方と、人間工学を理解するために必要な基礎的事実について具

体的な実験例をもとに概説する。

また、人間工学は学際的な学問であり、最近の進歩も著しいので、そうした話題にもふれる。

脳神経科学

小室輝昌

脳神経科学概論

神経系の働きを構造的基礎の上に理解するよう

- ① 神経系の構成
- ② 神経細胞の構造
- ③ 信号の発生と伝導・伝達機序

について概説する。

〔参考書〕：

Principle of Neural Science, Kandel and Schwartz, Elsevier Co.

From Neuron to Brain, Kuffler and Nicholls, Sinauer Co.

精神医学 I

古茶大樹

本講座では今日の精神医療全般についての基礎的な知識を習得することを目的としている。精神障害を理解する上で必要不可欠な用語の解説、症候学、診断学、分類学、各疾患の概論と治療について今日的な視点から論ずる。単に精神障害を理解するのではなく、精神障害者を理解しようとする態度を学ぶ。内容は精神医学に基礎知識のない人でも理解できるよう配慮しており、入門編と考えて頂きたい。

精神医学 II

古茶大樹

精神医学 I を総論とするならば本講座は各論に相当する。様々な精神疾患について具体的な症例をあげ解説を加える。とくに内因精神病（精神分裂病と躁うつ病）と痴呆については詳しく触れたい。さらに、本講座では、変質論、大脳局在論、力動精神医学、現象学など精神にかかわる考え方、理論の流れを概観したい。精神医学 I と比較するとやや難解な部分もあり、受講者は精神医学の一応の知識を有することが望ましい。

精神衛生概論

児玉昌久

精神衛生 (mental hygiene, mental health) とは、精神的健康の維持・向上および精神的不健康の改善・予防に関する科学である。人間が精神的に真に健康であるためには、身体的にも社会的にも、そして精神医学的にも健康であることが必要で、それ故、精神衛生とは、種々の医学関連諸科学のみではなく、心理学、社会諸科学等に立脚する総合科学と

して促えるべきものである。

講義では精神医学や心身医学よりも、科学的な心理学に基づく行動医学的立場をとり、精神症状や精神身体症状を示す人と、そのような症状を示さない人との差異を、ストレス・トランスを構成する価値観、態度などの人格的諸要因や対処法と対応させて考慮し、発症のメカニズムや予防策について考えてみる。

精神身体医学 I

河野 友信

精神身体医学は心身関連の生理と病理を解明し、その成果を臨床と疾病予防、健康増進などに活用することを目的にした学問である。物心二分論に根ざして進展した西洋近代医学の延長線上に構築された現代医学は、限り無く細分化の道を辿っている。そこでは細胞臓器や疾病が対象とされ、人間不在の医学・医療となっている。その反省から、現代心身医学は、bio-psycho-socio-eco-ethical model を掲げ、人間の total health と幸福・安寧を追求することを目的として掲げている。

人体は約60兆の細胞より構成され、細胞は集合して臓器・器官・組織となり、脳によりホメオスタシス・ネットワークのもとに全体として調和的に機能するように仕組みられている。身体-脳-精神という一体の存在として、個と全体の調和のもとに内外の環境に適応しながら生活し生存しているのが、人間である。講義では、心身関連の生理と病理、ストレスとストレス性疾患などについて、特に臨床的側面を中心に取り上げる。

最新の身体医学の進歩の知見もとり入れて紹介する。

栄養学 I

太田 富貴雄

身体を造る材料を提供し、生命維持に不可欠な生理作用の調整を行い、活動のためのエネルギーを供給するのが食物である。栄養学は食物と発育・健康・疾病との関係を究め、健康増進に役立つ食生活の指針をつくることを目的としている。本講義では、先ず人間が必要とする食物成分（栄養素）の種類と物質的特徴、各種栄養素の体内動態と生理的役割および至適摂取量、各種食品の栄養的特色など栄養学の基本的事項について述べる。次いで、成長・発育と栄養、スポーツ活動と栄養、体力増強や健康水準の向上を図るための食生活のあり方などについても言及する。なお、食生活と疾病の関係、成人病の予防と治療のための栄養処方など栄養学の臨床面については、栄養学IIで詳しく紹介する。

スポーツ医学 I

福林 徹

スポーツ障害、外傷の中でも外科的疾患を中心に部位別・競技別に事例を提出しながら紹介し、その救急処置・治療法について述べる。またスポーツの安全対策・障害予防という面から、スポーツ復帰にあたっての運動処方や、テーピングの方法、物理療法について

言及したい。

スポーツ医学 II

福 林 徹

スポーツ医学 I に続き、スポーツ障害の中でも循環器系を中心とした内科的疾患を中心に、その治療と予防法について解説する。また最近注目をあびているメディカルチェックの方法とその意義、さらには食事療法、栄養指導、ドーピングと薬物療法などについても言及し、実例を提示しながらその具体的方法について述べる。

スポーツ医学 II を受講するためには、その基礎知識となるスポーツ医学 I を履修しておくことが必要である。スポーツ医学 I と II は原則として同じ年度に続けて履習すること。

救急医学 I

安 達 正 夫

我々が社会生活を営むうえで、他人に救急処置を実施しなければならない機会は少なからずあると考える。

そのような緊急時に、我々がまず実行しなければならない救急処置の実際を、基礎編と応用編に別けて講義をおこなう。

救急医学 I では、人の呼吸・循環動態といった生理学的知識から始まり、様々な障害や疾病の原因、病態生理、臨床症状といった点まで講義をおこなう。

救急医学 II

安 達 正 夫

ここでは、救急医学 I で講義した基礎的な知識をもとにして、救急処置法の実際的なやり方を講義する。熱中症、心疾患、呼吸器疾患といった内科的におこりうる疾病はもとより、様々な外傷に対する救急処置の方法を具体的に講義する。

さらに、わが国における救急医療の実態も紹介する。

救急医学 II を受講するためには、その基礎知識となる救急医学 I を履習しておくことが必要である。救急医学 I と II は同じ年度に続けて履習すること。

画像医学 I (放射線診断学)

秋 貞 雅 祥

「百聞は一見に如かず」とか「視之而弗見（之を視れども見えず）」とか、感覚 (sensation)、知覚 (perception) や認識 (cognition) などに関するいくつかの表現がある。いま、古くからあるこれらに新しい科学の光があてられようとしている。

認識に必要なギリギリのビット数は、触覚で 10^2 b/秒、聴覚で 10^4 b/秒である。視覚は 10^6 b/秒が必要である。すなわち視覚に必要なビット数は最も大であり、そのため高度の医用画像情報が得られるまでにはずいぶん時間がかかったが、ひとたび突破口ができ、実用に使されるとその影響はきわめて大で、現在の画像診断の時代を迎えるにいたった。「からだ

の中をのぞき見る」と云う一世紀前の医学には考えられなかったきわめて大きな発見がレントゲン博士によって行なわれたのが1895年であるが、以来連続的、ならびに非連続的に方法論の進歩により現在の画像医学の繁栄がもたらされた。これらの進歩は M.D. (doctor of medicine) と non M.D. の密接な強力研究でなされたことはデジタルイメージングの例から見ても明らかである。つまり画像医学の進歩には M.D. 以外の広範な領域の協力がないと不可能である。このために画像診断の概略をエックス線画像に限定せず、核医学、超音波、CT、MRI など広範囲にわたり臨床医の目から述べるのが画像医学とは何であるか、それを通して人間の体の仕組みや画像の形成方法がどう云うものであるかを知ってもらいたいと考えている。

画像医学 II

秋 貞 雅 祥

以下の各項目は画像医学 I および II に適宜配分される。

1 診断学総論

X線像に影響する物理的因子

各種X線装置および撮影法

血管造影 インタベンショナルラジオロジー

CTなど

2 超音波診断総論

3 磁気共鳴診断総論 (MRI, MRS)

4 核医学診断総論

5 放射線の利害損失

6 各臓器の画像診断

7 画像診断の未来

8 その他

画像医学 II を受講するためには、その基礎知識となる画像医学 I を履習しておくことが必要である。画像医学 I と II は同じ年度に続けて履習すること。

運動処方論

永 田 晟

トレーニングと運動処方の違いを明確にして、それらの基礎的な運動生理科学と臨床的な健康科学の資料を提示する。そして人間改造の可能性を探り、健康と体力の保持増進の目標や指標を具体化する。そのやり方をトレーニング・ルームや演習室で実践して処方プログラムを身につけていく。特に最大酸素摂取量、一日の消費カロリー量、一日の摂取カロリー量の計測は重要である。

運動処方上、必須な①運動内容（種類） ②運動頻度 ③運動強度の理論を教示し、個

人のレベルに対応した個別的な処方箋作りの方法論を展開する。特に、一般成人が半健康人、成人病予備軍の健康体力のための処方が組み立てられ、“スポーツ・運動プログラマー”や“健康運動指導士”，“ヘルス・ケア・トレーナー”“スポーツ・インストラクター”と同様の能力が得られるように詳講し配慮する。特に運動負荷試験（ストレス・テスト）のやり方と評価法，それに基づく運動強度の設定は大切で，実際に体験してみる必要がある。

〔教科書〕：『運動の科学的基礎』（西村書店）

コミュニティ・スポーツ論

濱 野 吉 生

地域社会における体育・スポーツの進め方，法的根拠，歴史と現状などについて，諸外国の例も交えながら述べていくが，なおその他にスポーツそのものについても，かなりのウェイトを置いて言及する予定である。

参考書等については，授業中に指示する。

職 場 体 育 論

前 田 勝 也

職場体育といっても，一般にはあまり聞きなれない言葉かもしれない。総括的に考えれば，レクリエーションということになるだろうが，ここでは，仕事を持つ人々の職場における状況を，人間に加わる負担という形でとらえ，それらからの人間への影響，さらにその影響に対応する意味でのレクリエーションの問題について考慮を進める。

つまり当科目は，レクリエーション活動の必要性や活動形式を探るための基本的部分の理解を目的としている。

寄附講座開設について

早稲田大学では、教育研究の質的向上・発展に寄与することを目的として学術研究提携等を行っています。

その際、大学の主体性と独自性を堅持するため、次の「ガイドライン」を制定しています。

1. 学問の自由および独立を守ること。
2. 世界の平和および人類の福祉に貢献する研究を行うものとし、軍事研究および軍事開発は行わないこと。
3. 本大学における研究活動の発展および教育の向上に寄与すること。
4. 研究成果の公表を禁止された秘密研究は行わないこと。ただし、研究成果の公表時期に関する研究委託者または共同研究者との信頼関係に基づく合理的制約は、この限りでない。
5. 社会的に公正であること。
6. 関連資料を開示の上、民主的な手続きに基づき、提携等に関する意思決定を行うこと。

また、このガイドラインを正しく運用していくため、大学は、「学術研究提携等審査委員会」を設置して、個々の提携等を審査しています。

以下の寄附講座は、このような学術研究提携等の一環として上記の審査を経て設置されたものです。

人間科学部設置科目

分子神経生物学 (ベックマン寄附講座)

川 名 明 夫
工 藤 佳 久
関 野 祐 子
豊 島 聰
福 西 宏 有
市 川 一 寿
井 上 宏 子

これまでの神経生物学の主なテーマは、神経細胞の形態と生理機能の関係を追求することであった。しかしながら最近の分子生物学の進歩に伴い、神経の発生・生長・機能発達の諸問題を遺伝子のレベルで解明出来るようになった。

そこで本講義では、先ず分子生物学、及び神経生物学の基礎について講義を行い、次いで、新しい学問である分子神経生物学の構築を試みる。また講義内容を理解させるために、実習を行う。

以下のような諸項目に重点を置く。

- ① 脳・神経の発生
- ② 脳・神経の機能分子
- ③ 脳・神経の発生と機能を制御する遺伝子
- ④ 脳に特異的に発現する遺伝子

東洋医学の人間科学 (井深 大寄附講座)

春 木 英 一
佐々木 雄 二
矢 野 忠
宮 本 久 義
坂 出 詳 伸
春 木 豊

西洋医学はその基礎になる科学思想について長い歴史をもち、その上に立って基礎研究及び臨床実践においてめざましい成果を上げてきた。しかし、一方でその限界と、害もささやかれるようになってきた。この問題に対処するものとして、東洋医学に対して東洋のみならず西洋においても関心が高まってきた。

東洋医学の概念はまだ定かでない。したがって、さまざまなものを内包しているが、本

講座では、なるべく広範囲に東洋医学に関する基礎知識を学習できるように構成してゆく。基本的には、思想、心理、生理、医学を軸にして、それぞれの分野の専門家に出演していただく。また東洋医学は自らの実践ぬきには考えられないので、実技も含める。なお、本年は上記の講師に出演していただく。

ジェロントロジー《長寿社会の人間学》(高砂殿寄附講座)

嵯峨座 晴 夫
濱 口 晴 彦
上 里 一 郎
他

演題としては、ジェロントロジー総論、大衆長寿時代の社会学、生涯発達心理学、長寿社会の生活の質、長寿社会の福祉、長寿社会の経済、高齢者のカウンセリング、ターミナルケアなどを予定している。また、以上の講義以外にオープンレクチャーを3回程度開催する予定である。

なお、授業は次の日程で行う。

- | | | | |
|-----|-----------|-------------|---------------|
| 第1回 | 9月21日(土) | 13:00~16:30 | ジェロントロジー総論 |
| 第2回 | 9月28日(土) | 13:30~16:30 | 大衆長寿時代の社会学 |
| 第3回 | 10月12日(土) | 13:30~16:30 | 長寿社会の経済学 |
| 第4回 | 10月26日(土) | 13:30~17:00 | 「生きがい」の心理学 |
| 第5回 | 11月9日(土) | 12:30~17:00 | フリートーキング・交流会 |
| 第6回 | 11月16日(土) | 13:30~16:30 | 長寿社会の福祉 |
| 第7回 | 11月30日(土) | 13:30~16:30 | 高齢者のメンタルヘルス |
| 第8回 | 12月14日(土) | 13:30~17:00 | 老年期の心理と家族との関係 |
| 第9回 | 1月11日(土) | 13:30~17:00 | 死の教育とターミナルケア |

現代都市・地域論（早稲田都市計画フォーラム寄附講座）

現代都市・地域論 A

担当教員：佐藤滋（理工学部・教授），浦野正樹（文学部・教授），店田廣文（人間科学部・教授），寄本勝美（政治経済学部・教授），鵜飼信一（商学部・教授），内田勝一（法学部・教授），中川義英（理工学部・教授），後藤春彦（理工学部・助教授）

「現代の都市や地域社会が抱える諸問題の考察を踏まえて，自治体と市民とによる自治を基本としたソフト・ハード両面にわたる都市づくり，まちづくりを構想しよう」とする際の，理論と実践の方策を全学の都市地域関連の専任教員により講義する。前期のAは，基礎理論に関する内容で，現代都市・地域を多面的に分析し，問題の発見から課題の定位，課題解決の方法について，以下に列記する項目に従い，多面的な学問分野から論ずる。

1 都市の調査

- ・都市と農村の社会学的調査方法
- ・都市づくりと発見的方法
- ・産業と地域経営の分析

2 都市に関わる調査・研究・計画課題

- ・都市社会の計画課題
- ・市民参加の基礎理論
- ・都市法学の課題
- ・居住環境整備の基礎理論
- ・現代都市と土地住宅問題
- ・交通問題と行政

現代都市・地域論 B

担当教員：中川義英（理工学部・教授），戸沼幸市（理工学部・教授），寄本勝美（政治経済学部・教授），内田勝一（法学部・教授），土方正夫（社会科学部・教授），卯月盛夫（専門学校・教授），早田宰（社会科学部・専任講師）

現代都市・地域論Aに引き続き，都市づくりの計画と自治行政の実際と可能性を多面的な領域から学ぶ。市民参加のもとでの自治と分権が大きくこの分野を変革しようとしている現代を歴史的な視野でとらえ，第一線での動きと今後の展望，それぞれの職能の役割などについて以下の項目で講義する。

1 現代都市と自治体の行政

- ・都市の計画と実現のための自治の枠組み
- ・自治型都市づくりの技術
- ・都市づくりと財政
- ・都市の法制的仕組み
- ・情報化時代の都市の経営

2 都市の計画と自治行政

- ・都市の計画と実現化のための方策
- ・国土と大都市圏計画
- ・東京の都市計画の歴史

現代都市・地域論演習 A

担当教員：講師 卯月盛夫

現代の都市は、その主役である住民の意志とは全くかけ離れて作られている。都市を再び住民の手に取り戻すためには、“参加型まちづくり”という新しいコンセプトが必要である。そこで本演習は、都市づくりにたずさわる者にとって必要な、住民参加にかかわる新しい計画技術や手法を実際に体験しながら、理論と技術の両面から学ぶことをねらいとしている。演習は、グループワークをとまなうので、5グループ程度、合計40名を限度とする。毎回の演習は次の内容で進むが、それぞれの演習の背景となっている、各学問分野の基礎理論についても講義を行い、レポートが義務づけられる。

1：様々なワークショップの実際について学ぶ。

本演習の導入として、いくつかのワークショップを体験する。ワークショップとは、「ある目的を遂行するためにその場に参加した全員で行う創造的な共同作業」という意味である。

2：計画者と利用者のすきまをうめるコミュニケーションの手法について学ぶ。

パターンランゲージ、設計者参加の街なみづくりなどの理論と技術を演習する。

3：計画者として、住民参加プログラムの作成とその運営の手法について学ぶ。

デザイン・ゲーム、住民参加キットの開発などを演習する。

現代都市・地域論演習B

担当教員：講師 藤井敏信

「参加型まちづくり」は都市づくりのキー概念といえるが、本演習ではその過程で展開される生活環境上のさまざまな課題を多角的にとりあげ実地調査から、計画策定、その実現化の方策の検討方法などを演習する。具体的な地区を設定し都市地域づくりの前提となる、問題と課題の発見と分析、課題解決のための方法について、多面的な学問領域の成果をふまえ、さまざまな方法で演習する。

各回、それぞれの分野の専門家をゲスト指導者としてお招きし、演習を進める。計画のプロセスを一通り学ぶため、講義時間外での各種の課題や予習などが義務づけられる。演習は次の3つの段階に従い進める。

1. 計画条件の読み取り整理の方法

演習の対象として設定された地区をさまざまな手法で現地調査し、地区の条件の読みとり、地域社会の解析など、計画の前提条件の整理方法について演習する。

2. 企画構想の立案と計画案の検討

現地調査で得られた結果をもとに、課題解決のための目標の設定と表現の方法、実現化の方策の検討、計画の影響事前評価の方法について演習する。

3. 実現化のための方策の検討

具体的に検討された計画を実行するに当たって、行政、市民、民間の役割と関係、また法制度等の具体的な適応などについて既存の事例の評価をとおして演習する。

情報科学研究教育センター設置科目（全学共通科目）

情報科学研究教育センター（以下情科センター）では、全学部・大学院生を対象にコンピュータ関連科目を設置・開講している。これら情科センター設置の科目の内容および手続き等については、センターが発行している登録要項を参照・熟読のこと。

1996年度早稲田／オレゴン夏期プログラム

科目名：Japanese and American Societies

テーマ科目：Crossing Borders

All students are required to select two of the following three themes.

Comparative Literature

This course focuses on two large issues (1) the ways Western and Japanese writers, in a variety of genres and media, have represented the other culture; and (2) the ways Asian-Americans have struggled to define an identity that embraces racial and cultural complexity without succumbing to ethnic stereotypes or internalizing the explicit and implicit oppression fostered by the dominant culture.

The works and films of Gillert and Sullivan's Mikado, Puccini's Madame Butterfly, and David Hwang's M. Butterfly 観 will be read and viewed to see how, in opera and theater, cultural imperialism and stereotyping have been enacted and resisted.

In addition, a variety of travel literature, by both Western and Asian writers (such as Roland Barthes, Pico Iyer, Kipling, as well as Japanese writers who have visited and written about the U.S.) will be read to see what happens when actual border crossings produce reports of cultural clash, shock, and attempts at understanding if not self-recognition through encounter with the other. A range of autobiographical writings, memoirs and personal essays by Asian-Americans, whose borders to be sure are internal and functions of consciousness, and which concentrate on such matters as coming age, sexual identity, relationships to a more conservative older generation, and the desire to assimilate to American or English society without surrendering one's original ethnic identity will also be examined. Works as Maxine Hong Kingston's Woman Warrior, Monica Sone's Nisei Daughter, or Jeanne Wakatsuki Houston's Farewell to Manyanar (along with a viewing of Allen Parker's film on the subject of the internment of Japanese-American during WWII, "Come See the Paradise"), and pieces collected in Garrett Hongo's anthology Under Western Eyes: Personal Essays from Asian American or Maria Hong's anthology Growing Up Asian American will also be covered. Clive Collin's novel of Anglo-Japanese life, Sachiko's Wedding may also be examined.

This course depends upon energetic student discussion more than on lectures. There will be two five-page essays of literary analysis.

担当教員

Roger J. Porter

Professor, Department of English, Reed College
(Literature)

森田 典正

早稲田大学法学部助教授 (英文学)

History/Culture

The nation-state is a fundamental building block of the modern world order. Politics, culture, and economies are all organized on the basis of nations and borders. But contemporary events increasingly suggest the emergence of a period of *post-nationality*. We witness daily the dissolution of nations, the movement of capital and enterprise across space without regard to national borders, and the increasing mobility of products, people, and culture. Indeed, crossing borders is clearly as much a part of the modern world order as are national borders. While emerging transportation and communications technologies are responsible for much of this border-crossing, further reflection suggests that border-crossing has always been an important dimension of history and culture. This course examines a range of border-crossings by people and political-economic systems.

The possible topics are as follows:

The First Japanese Mission to the United States

Native American Nations in America

Karayuki-san: Japanese Women who Crossed the Sea

Immigration and American Society

The Japanese-American Experience

The Sea that Aboji Crossed: Koreans in Japan

The American Occupation of Japan

A Supermarket Owner who Burned the National Flag: Okinawa in Japan

Comfort Women: Thousands of Women Crossed the Borders, or Armies and Sexuality

The Death Railway: Asian Laborers and the Burma-Siam Railway

担当教員

Thomas Biolsi Associate Professor, Department of Anthropology,
Portland State University (Anthropology)

中原 道子 早稲田大学国際部教授 (東南アジア史)

Economies: Crossing Socio-Economic Borders

This course has been designed to provide students with an opportunity to discuss how Japan and the U.S. can solve their international and domestic socio-economic problems. The world economy today is a gigantic system of mutual interdependence. Japan as well as the U.S. cannot survive in isolation. To have a balanced view of the international economic relations, there is a great need for us to deepen our mutual understanding about the historical socio-economic development on both sides of the Pacific, for only people who have a broad view can see beyond borders.

The course will focus on the following questions: (1) How have the two nations developed their economies? (2) What policies were adopted to enhance their economies? (3) What lessons can be learned from our mutual experiences? (4) How can we use these lessons in order to bridge national borders?

The course will include lectures, discussion, guest lecturers in the colloquium "Japanese Management and Globalization," field trips and student projects which will be presented during the last week of the program. Topics to be covered will include:

Introduction and Historical Overview of Japan and the U.S. Economies
Economic Problems in the Periods between World Wars I and II
Postwar Socio-Economic Development
Structural Changes of the Japanese and North American Economies
International Economic Relations between Japan, the U.S., Europe, and Latin America
Japanese-Style Employment System and Job-Training
German and American Contributions to Japanese Culture
Bureaucrats and Technocrats in Foreign Economic Policy

Japan's Industrial Policy, and Privatization and Deregulation Policy
 Flows of Capital and Labor: U.S.-Mexico Relations and NAFTA
 Japanese Economic Policy toward Mexico and Foreign Direct Investment
 Comparative Cultural History Dealing with High and Low-Content Society
 Roles of Government in the Global Era

The major texts will be Takafusa Nakamura; The Postwar Japanese Economy: Its Development and Structure, Second Edition, University of Tokyo Press, 1995 and Kiyoshi Nakamura (Ed.); A Sign of Changes: The Structural Reforms in the Japanese Economic and Business System, The Japan Times, 1996, and B. Stallings and G. Szekely (Ed.), Japan, the United States and Latin America: Toward a Trilateral Relationship in the Western Hemisphere, The Johns Hopkins University Press, 1993.

担当教員

Frederich E. Schuler	Assistant Professor of History, Portland State University (Economics, Foreign Relations)
中村 清	早稲田大学商学部教授 (産業経済論)

Colloquium

The weekly, two-hour long colloquium provides an opportunity for all students and faculty to address the theme, "Crossing Borders", together. It is intended to be an interdisciplinary forum which will begin with an introduction and overview, followed by three colloquia which focus on the theme from the literary, historical and economic points of view. The final colloquium will address a common issue related to the theme and thereby conclude the academic program. All students are required to participate in all five colloquia.

英語科目: English

A primary goal of the English course is to enhance students' ability to express their ideas and opinions in English and to build self-confidence in their language skills. English language faculty will work in conjunction with theme course faculty to prepare students to understand theme readings and lectures as well as to complete their final projects. Students will develop the skills needed to participate in discus-

sions and projects with fellow students and faculty, focusing on the most significant concepts and themes of the program. Emphasis will be on listening comprehension and note-taking, debate and discussion techniques, academic writing, reading strategies, pronunciation and vocabulary development. Students will be required to keep a journal in which they reflect on their theme course readings and discussions as well as on their cross-cultural experiences.

The English course will be divided into four levels based on prior assessment of language skills. The pace of each level and the specific activities will be determined by the needs of the students.

担当教員

Ruth E. Chapin	Instructor, Center for English as a Second Language, Portland State University
Craig Machado	Faculty, English Language Institute, Oregon State University
Stephanie Spak	Faculty English Language Institute, Oregon State University
Norman J. Yoshida	Lecturer in English, The Institute for the Study of American Language and Culture, Lewis and Clark College

役付教職員一覧

学 部 長	濱 口 晴 彦
教 務 主 任 (教務担当)	佐 古 順 彦
教 務 主 任 (学生担当)	加 藤 清 忠
教 務 副 主 任 (教務担当)	池 岡 義 孝
教 務 副 主 任 (学生担当)	菅 野 純
人間基礎科学科主任	木 村 一 郎
人間健康科学科主任	蔵 持 不三也
スポーツ科学科主任	林 敏 弘
事 務 長	関 谷 武 彦
図 書 課 長	馬 場 静 子

1996年度 クラス担任者一覧

第 1 学 年

クラス	担 任 者	クラス	担 任 者
1	井 上 宏 子	11	菅 野 純
2	矢 野 敬 生	12	齋 藤 美 穂
3	吉 村 作 治	13	蔵 持 不三也
4	根ヶ山 光 一	14	太 田 章
5	重 原 淳 郎	15	竹 中 晃 二
6	宮 崎 清 孝	16	杉 山 千 鶴
7	柴 田 重 信	17	葛 西 順 一
8	野 嶋 栄一郎	18	土 屋 純
9	野 呂 影 勇	19	前 田 勝 也
10	木 村 利 人	20	志々田 文 明

第 2 学 年

人 間 基 礎 科 学 科	クラス	担 任 者	人 間 健 康 科 学 科	クラス	担 任 者	ス ポ ー ツ 科 学 科	クラス	担 任 者
	1	春 木 豊		11	石 田 敏 郎		20	児 玉 昌 久
	2	森 川 靖		12	蔵 持 不三也		21	山 崎 勝 男
	3	臼 井 恒 夫		13	坂 野 雄 二		22	村 岡 功
	4	濱 口 晴 彦		14	佐 古 順 彦		23	寒 川 恒 夫
	5	木 村 一 郎		15	店 田 廣 文		24	宮 内 孝 知
	6	根 建 金 男		16	谷 川 章 雄		25	町 田 和 彦
	7	青 柳 肇		17	野 嶋 栄一郎		26	比 企 静 雄
	8	小 室 輝 昌		18	木 村 利 人		27	梅 澤 宣 雄
	9	堀 田 郷 弘		19	吉 村 正		28	濱 野 吉 生
	10	神 崎 巖					29	前期) 山崎勝男 後期) 鈴木秀次
							30	太 田 富貴雄
							31	土 屋 純
							32	永 田 晟
							33	加 藤 清 忠
							34	前期) 中村好男 後期) 村岡 功
							35	葛 西 順 一
							36	志々田 文 明

第 3 学 年

人間基礎科学科	クラス	担 任 者	人間健康科学科	クラス	担 任 者	スポーツ科学科	クラス	担 任 者
	1	池 岡 義 孝		11	谷 川 章 雄		28	児 玉 昌 久
	2	白 井 恒 夫		12	岡 野 静 二		29	山 崎 勝 男
	3	柿 崎 京 一		13	門 前 進		30	村 岡 功
	4	宮 崎 清 孝		14	吉 村 正		31	寒 川 恒 夫
	5	小 室 輝 昌		15	上 里 一 郎		32	宮 内 孝 知
	6	嵯峨座 晴 夫		16	店 田 廣 文		33	町 田 和 彦
	7	飯 野 徹 雄		17	石 田 敏 郎		34	比 企 静 雄
	8	鈴 木 晶 夫		18	野 呂 影 勇		35	梅 澤 宣 雄
	9	吉 岡 亨		19	木 村 利 人		36	濱 野 吉 生
	10	山 内 兄 人		20	蔵 持 不三也		37	前期) 山崎勝男 後期) 鈴木秀次
				21	野 嶋 栄一郎		38	太 田 富貴雄
				22	坂 野 雄 二		39	土 屋 純
				23	宮 崎 正 己		40	永 田 晟
				24	相 馬 一 郎		41	加 藤 清 忠
				25	佐 古 順 彦		42	前期) 中村好男 後期) 村岡 功
				26	菅 野 純		43	葛 西 順 一
				27	齋 藤 美 穂		44	志々田 文 明

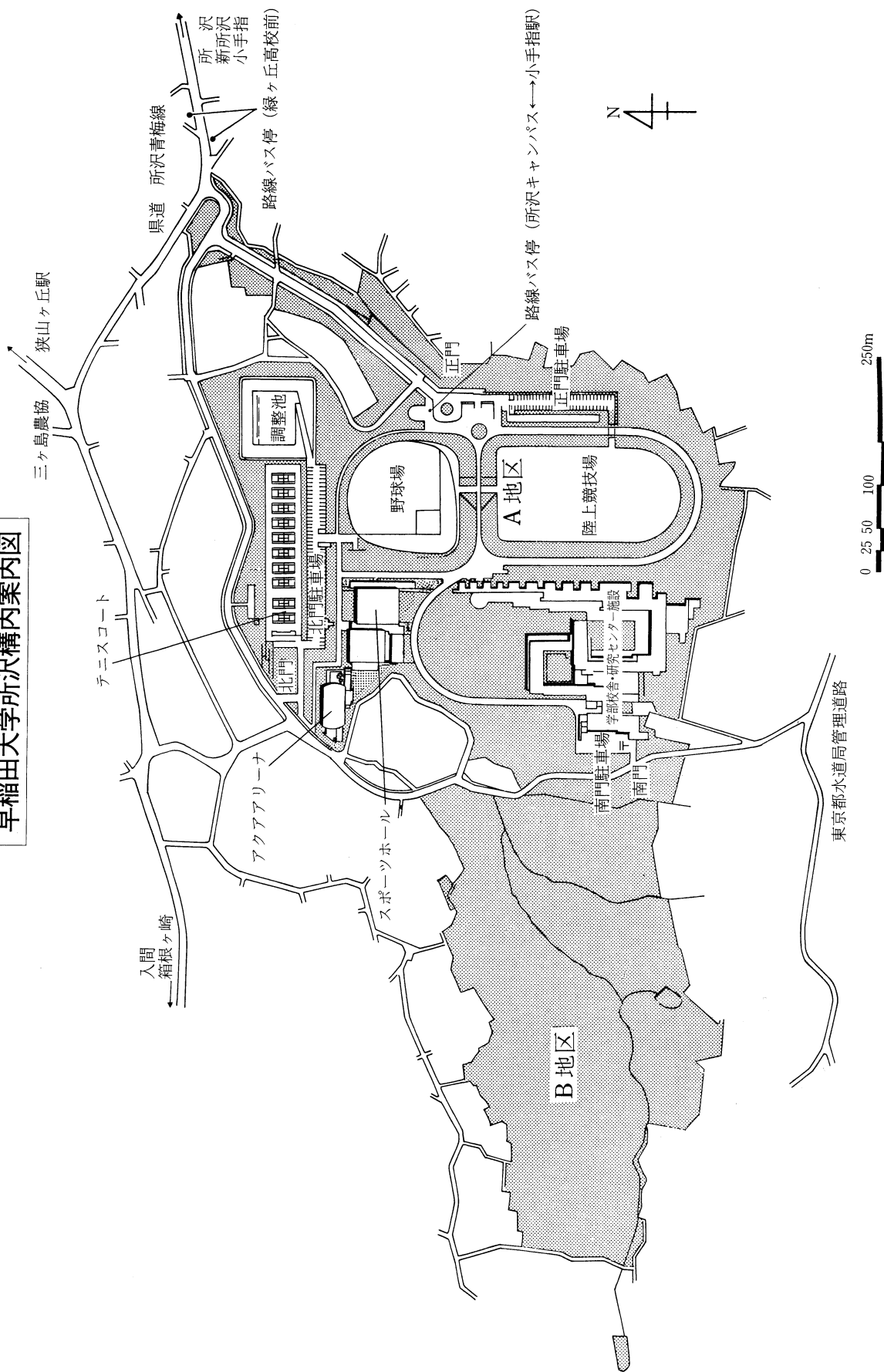
第 4 学 年

人間基礎科学科	クラス	担 任 者	人間健康科学科	クラス	担 任 者	スポーツ科学科	クラス	担 任 者
	1	木 村 一 郎		4	蔵 持 不三也		7	濱 野 吉 生
	2	嵯峨座 晴 夫		5	野 嶋 栄一郎		8	林 敏 弘
	3	根 建 金 男		6	門 前 進		9	山 崎 勝 男
							10	寒 川 恒 夫

建 物 ・ 号 館 案 内

100 号 館	8 階	研究室（一般教育・外国語・助手）
	7 階	研究室（スポーツ科学科）
	6 階	研究室（人間健康科学科） 人間総合研究センター所長室 実験室（人間健康科学科・人間総合研究センター） 会議室
	5 階	研究室（人間基礎科学科・スポーツ科学科・助手） 会議室 実験室（人間基礎科学科・人間健康科学科・スポーツ科学科） 学生実験室 面接室 観察室 暗室 測定機室
	4 階	学部事務所 大学院事務所 学部長室 教務主任・副主任室 研究科委員長室 会議室 所沢図書館・事務所 健康管理室 教職員食堂 研究室（スポーツ科学科） 実験室（スポーツ科学科） 学生実習室
	3 階	演習室 埋蔵文化財展示室・整理室 学生ラウンジ・就職資料室 学生共同利用室 コピー室 学生食堂 売店 情科センター分室事務室 端末室 労務室・清掃室
	2 階	60人教室 350人教室 700人教室 演習室 視聴覚教室 LL教室
	1 階	60人教室 140人教室 200人教室 学生ラウンジ エレベーター
		守衛室

早稲田大学所沢構内案内図



0 25 50 100 250m



1996